令和６年度における
学習評価に関する調査の結果
について

令和７年４月２８日

教育委員会教育支援部義務教育課

目　　次

頁

１　調査対象　・・・　１

２　調査内容　・・・　１

３　調査期間　・・・　１

４　調査①
（１）調査結果の概要　・・・　１

（２）観点別評価や評定の割合、評定の平均値を
周知していた学校　・・・　４

（３）割合や平均値を周知していた学校の具体的な内訳　・・・　４

５　周知内容と調査②の評定分布
（１）観点別評価の割合・評定の割合・評定の平均値　・・・　５

（２）観点別評価の割合・評定の割合　・・・　９

（３）観点別評価の割合・評定の平均値　・・・１２

（４）評定の割合・評定の平均値　・・・１４

（５）評定の割合　・・・２７

（６）評定の平均値　・・・３６

（７）集団に準拠した評価（いわゆる相対評価）を行った
場合の割合と平均値の例【参考】　・・・４９

６　調査用紙　・・・５０

７　学習評価についての参考資料　・・・５６

１　調査対象

市立中学校（分校を含む、なごやか中学校を除く）１１１校

２　調査内容

調査①　目標に準拠した評価に関する調査（令和６年度の状況）
調査②－１　令和６年度３年生の２学期における評定の分析
調査②－２　令和５年度３年生の２学期における評定

３　調査期間

令和７年４月４日（金）～１４日（月）

４　調査①

(1)　調査結果の概要

Ｑ４　目標に準拠した評価を実施していましたか。	
１　していた	１１１　校
２　していない	０　校

Ｑ５　校内で目標に準拠した評価をどのように周知していましたか。	
１　文書を基に説明	１１１　校
２　文書のみ	０　校
３　口頭のみ	０　校

Ｑ６　誰が文書を作成していましたか。（複数選択可）	
１　教務主任（主幹教諭）	１１１　校
２　進路指導主事	０　校
３　努力点担当者	０　校
４　その他	１　校
その他の具体：校長	

Ｑ７　どのような場で文書が出されましたか。（複数選択可）	
１　職員会議	９０　校
２　現職教育	３５　校
３　教科部会	１９　校
４　その他	１　校
その他の具体：評価・評定等検討委員会	

Ｑ８　文書にはどのような内容が書かれていましたか。（複数選択可）	
１　指導と評価の一体化について	１０２　校
２　学習評価の基本的な考え方について	１１０　校
３　具体的な手順や方法について	７４　校
４　その他	１　校
その他の具体：本校の評価システムについての根拠	

Ｑ９　観点別評価（Ａ～Ｃ）の割合を周知していましたか。	
１　していた	９　校
２　していない	１０２　校

Ｑ１０　どのような形で周知していましたか。	
１　文書を基に説明	７　校
２　文書のみ	２　校
３　口頭のみ	０　校

Ｑ１１　どのような意図で周知していましたか。（複数選択可）	
１　指定した割合に収めさせるため	０　校
２　評価規準が適正であるかを振り返らせるため	９　校
３　その他（具体的に記述）	０　校

Ｑ１２　評定（５～１）ごとの割合を周知していましたか。	
１　していた	２９　校
２　していない	８２　校

Ｑ１３　どのような形で周知していましたか。	
１　文書を基に説明	２３　校
２　文書のみ	３　校
３　口頭のみ	３　校

Ｑ１４　どのような意図で周知していましたか。（複数選択可）	
１　指定した割合に収めさせるため	０　校
２　評価規準が適正であるかを振り返らせるため	２９　校
３　その他	１　校
その他の具体：評価規準を作成する上で参考とするために目安を周知しており、割合の中に収めるためのものではない。	

Ｑ１５　評定の平均値について周知していましたか。	
１　していた	３２　校
２　していない	７９　校

Ｑ１６　どのような形で周知していましたか。	
１　文書と口頭	１７　校
２　文書のみ	４　校
３　口頭のみ	１１　校

Ｑ１７　どのような意図で周知していましたか。（複数選択可）	
１　指定した平均値に近づけさせるため	０　校
２　評価規準が適正であるかを振り返らせるため	３２　校
３　その他	１　校
その他の具体：評価規準を作成するための目安として周知した。	

Ｑ１８　（令和２～５年度の文書に）評価・評定の割合や評定の平均値に関する記載はありましたか。	
１　あった	３８　校
２　なかった	７３　校

Ｑ１９　その内容は何年度までありましたか。	
１　令和２年度まで	５　校
２　令和３年度まで	３　校
３　令和４年度まで	１　校
４　令和５年度まで	２９　校

(2)　観点別評価や評定の割合、評定の平均値を周知していた学校

周知していた内容（複数選択可）	校数
観点別評価（Ａ～Ｃ）の割合を周知していたと回答した学校	９　校
評定（５～１）ごとの割合を周知していたと回答した学校	２９　校
評定の平均値について周知していたと回答した学校	３２　校

(3)　割合や平均値を周知していた学校の具体的な内訳

観点別評価の割合	評定の割合	評定の平均値	校数
○	○	○	４　校
○	○		３　校
○		○	２　校
	○	○	１３　校
○			０　校
	○		９　校
		○	１３　校
		合計	４４　校

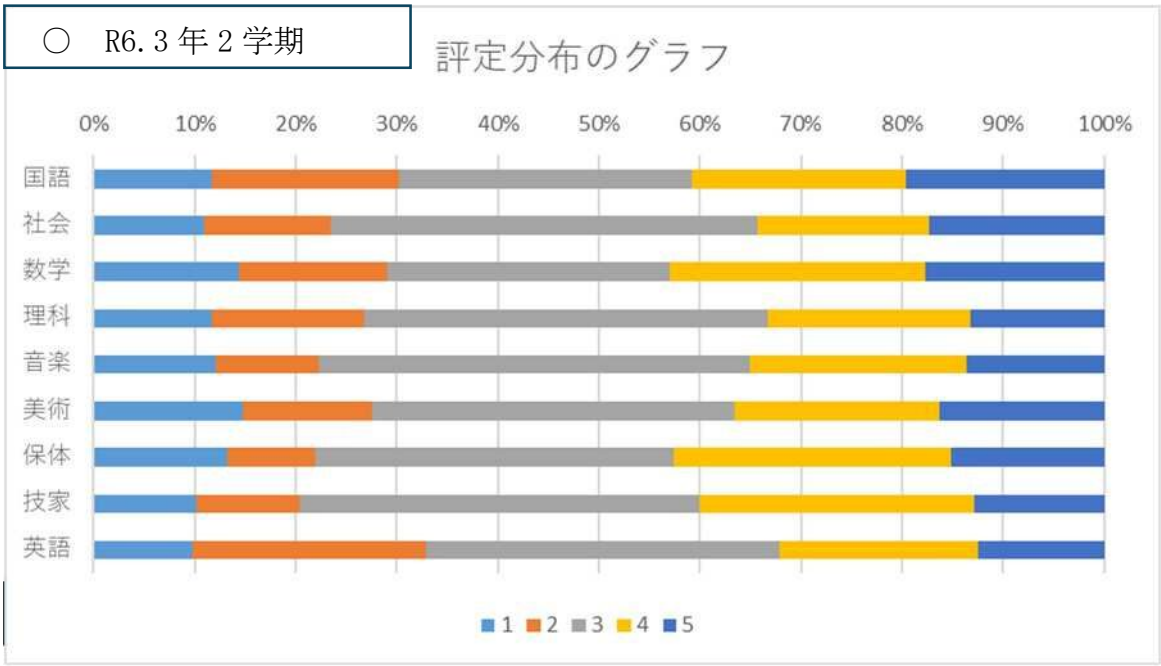
（注）○は周知していたことを示した。

５　周知内容と調査②の評定分布
（１）観点別評価の割合・評定の割合・評定の平均値（４校）

○　文書の記載

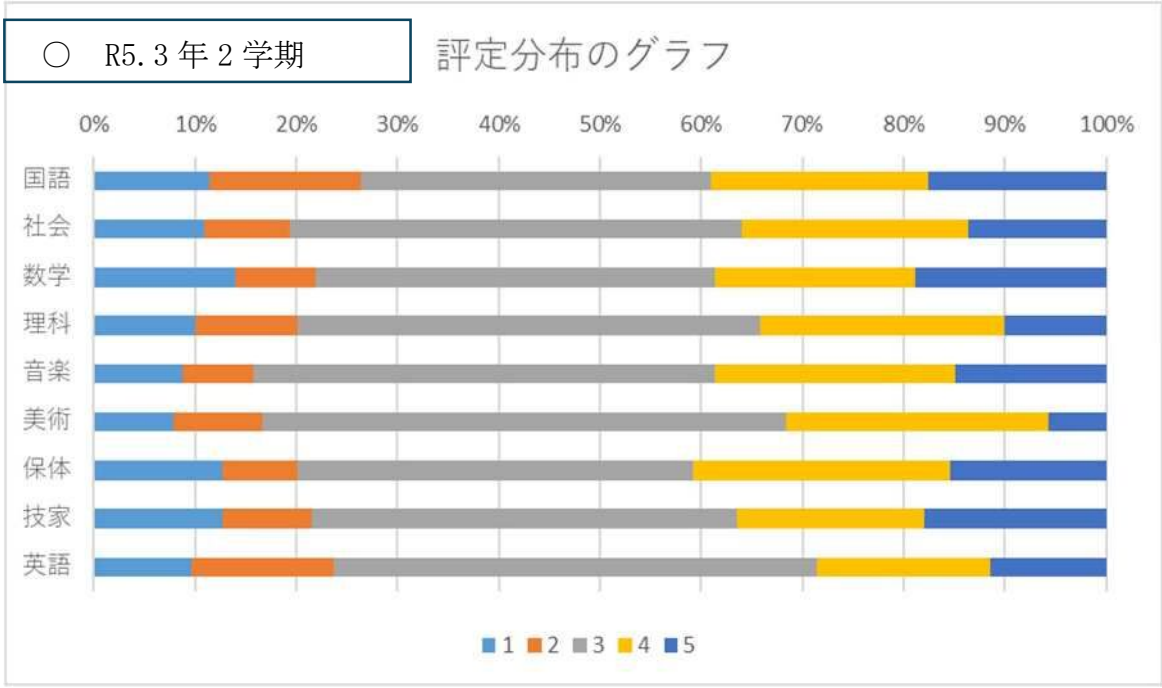
・　評定人数については、正規分布を基本とし、評価基準（Ｂ基準）の見直しを図るなどして工夫をする。
　評定１・５＝約１０％、評定２・４＝約２０％、評定３＝約４０％が正規分布。
ただし、本校の実情を鑑み、
・　各観点の割合がＡ＝約３０％、Ｂ＝約４５％、Ｃ＝２５％程度を目安として、
・　評定５と４の人数の合計が約３５％、評定２と１の合計が約２０％程度で評定する。
（評定平均が３．２程度までとする。）
・　「４」より「５」が多い、「２」より「１」が多いといった評価は原則避ける。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.1
音楽	3.3
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.1

○　文書の記載

本校の５教科評定平均は生徒の日々の学習状況や各種学力テストの結果から３．０が相当である。評定平均３．０を成立するために次の原則を守りつつシュミレーションした。

原則　○　昨年度までの評定１＋２で２０～４０％、５＋４で２０～４０％を廃止するが、評定１と５は各学年１０％程度（最低数を 在籍数×１０％ －２　人）
　　○　各観点のＡＢＣ内訳は３３％ずつが理想ではあるが、幅を設定し、Ａの人数 ＜ Ｂの人数 ＞ Ｃの人数　←ＡとＣは原則それぞれＢの人数を超えない

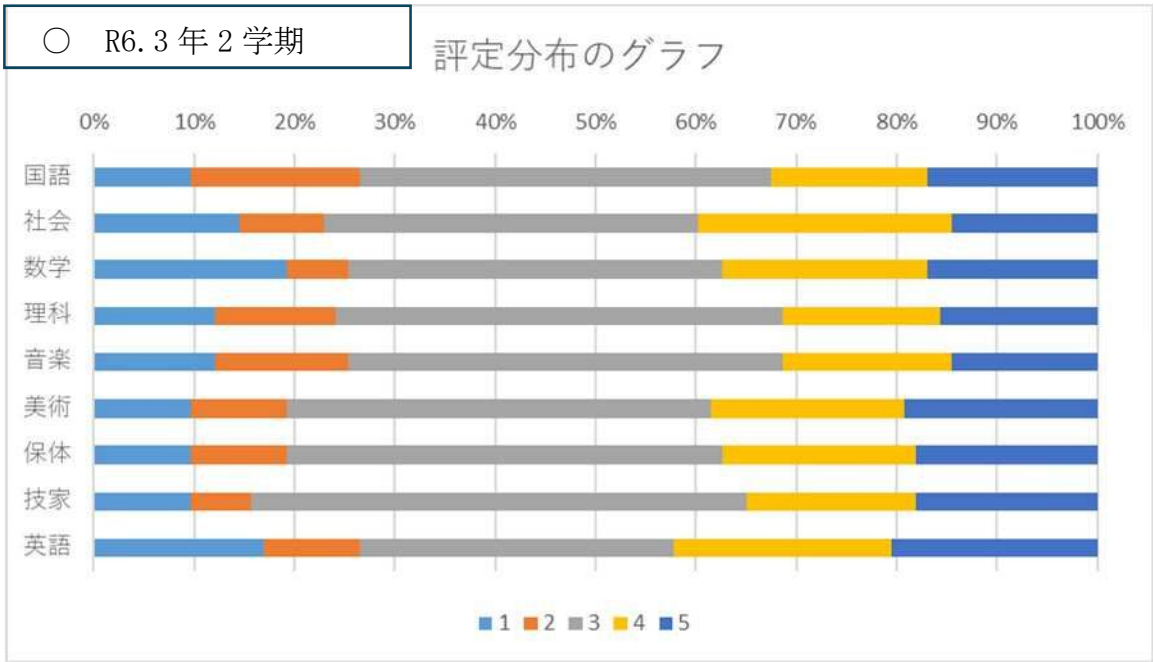
例　　ＡとＣは２５～３３％以内
　　Ａ：３３％　Ｂ：４２％　Ｃ：２５％　　学年評定平均：３．０８

であれば、ＡとＣの範囲は広がり、学年評定平均も本校生徒に妥当である。

よって前ページの評定パターンを守りつつ、下の割合を設ける。

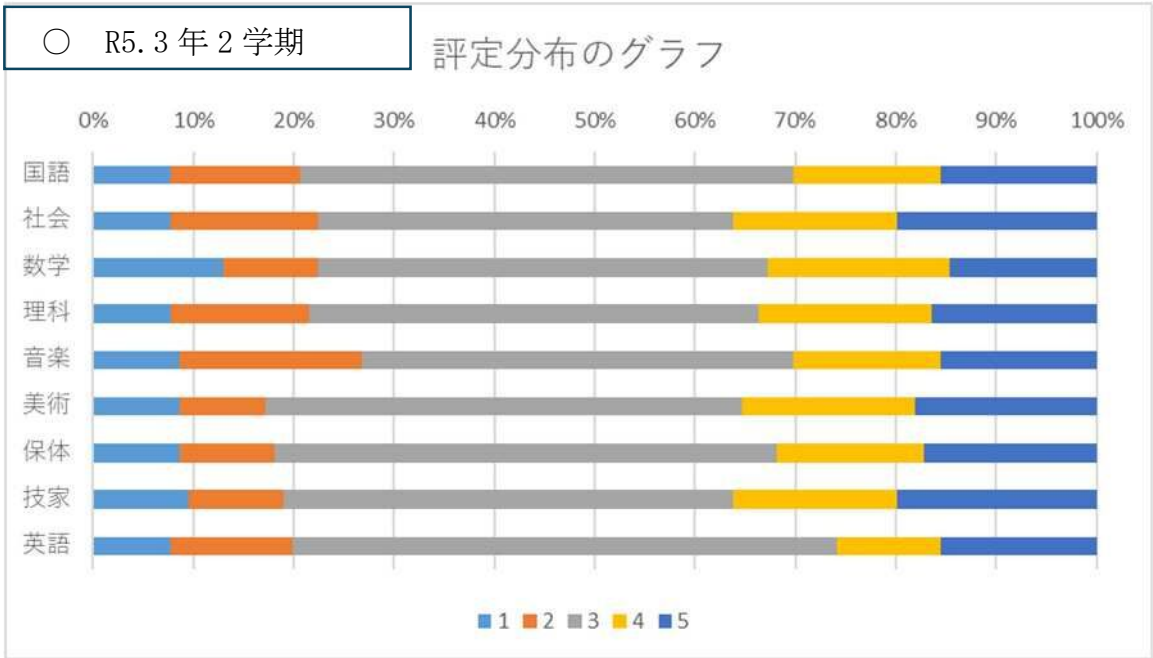
○　評定１と５は各学年１０％程度（最低数を 在籍数×１０％ －２　人）
○　各観点のＡＢＣ内訳は３３％ずつが理想ではあるが、ＡとＣは２５～３３％以内が望ましい。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.2
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.2

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.1
理科	3.2
音楽	3.1
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.3
英語	3.1

○　文書の記載

4　各評価・評定の割合（原則）

(1) 各観点ＡＢＣの幅

Ａの人数 ＜ Ｂの人数　**かつ**　Ｃの人数 ＜ Ｂの人数

(2) 評定平均

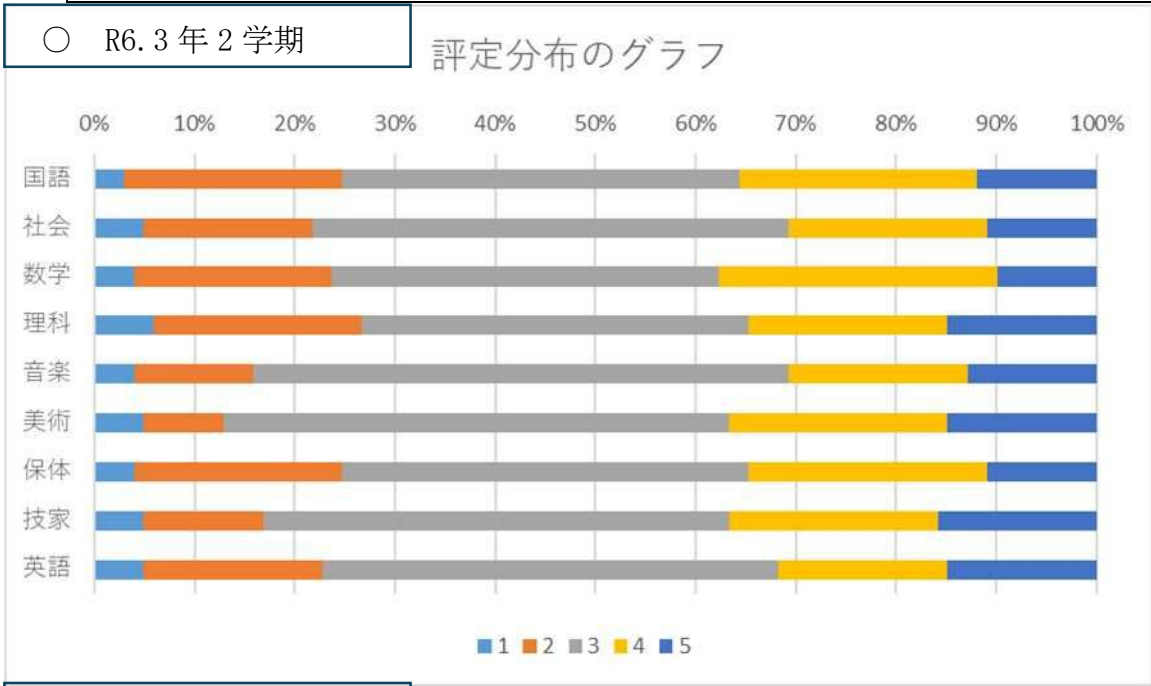
日々の学習状況や学力テストの結果から学年末に３．０±０．２が妥当です。

(3) 評定人数

５の人数 ＜ ４の人数　**および**　１の人数 ＜ ２の人数

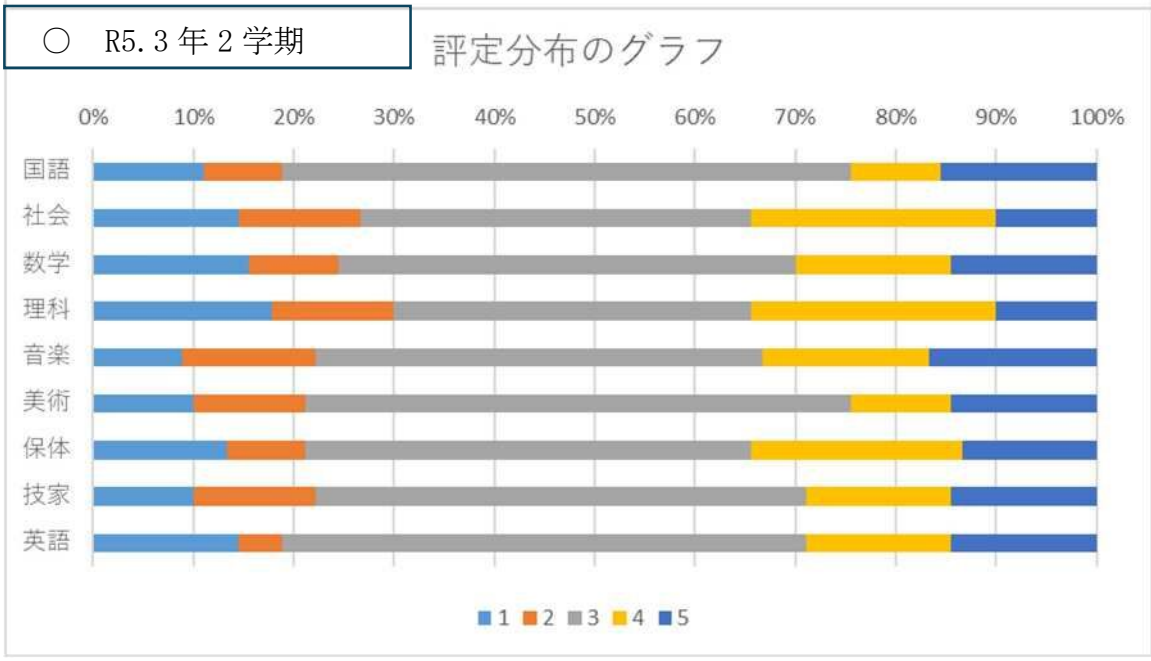
※　５や１の人数が「０人」となった場合は、評価基準を見直す必要があります。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.1
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.3
英語	3.2

○　R5.3 年 2 学期

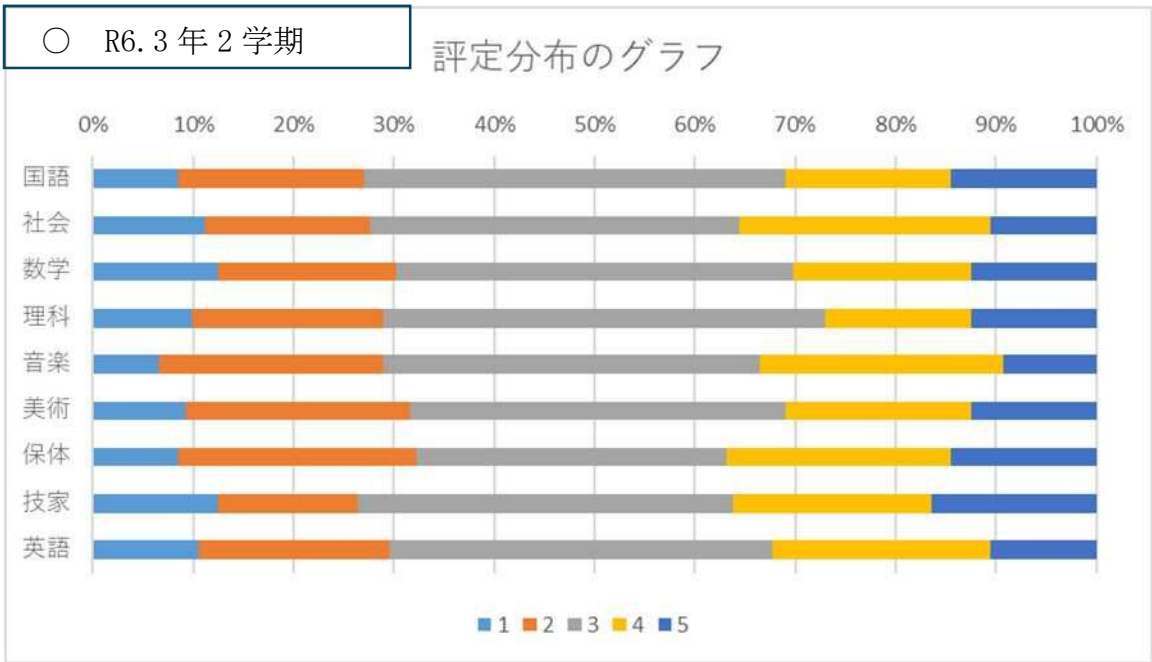


	平均値
国語	3.1
社会	3.0
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.1
技家	3.1
英語	3.1

○　文書の記載

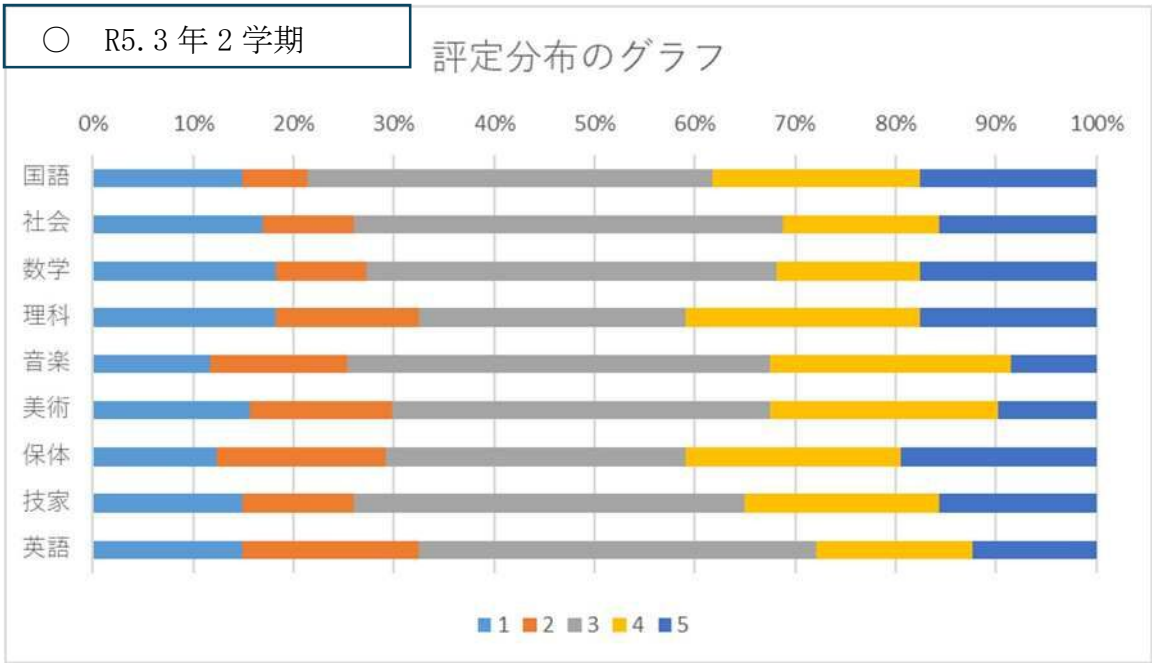
> また、進学にあたっては、各高等学校や専修学校等との信頼性も必須である。そうした意味では、評定の正規分布から大きく外れる状態にならないよう留意する必要がある。そこで、【観点別評価 A･B･C の割合を１：２：１程度とすることを目安】とし、【評定の分布を**評定１と２の合計数が３割程度**】、【評定の平均を **3.0±0.2 程度**】の幅に収めていきたい。各教科で、学年の平均がその範囲に収まらない場合は、観点別の評価規準について見直し・修正を行い範囲内に収まるように心掛ける。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.0
保体	3.1
技家	3.1
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.0
数学	3.0
理科	3.1
音楽	3.0
美術	3.0
保体	3.2
技家	3.1
英語	2.9

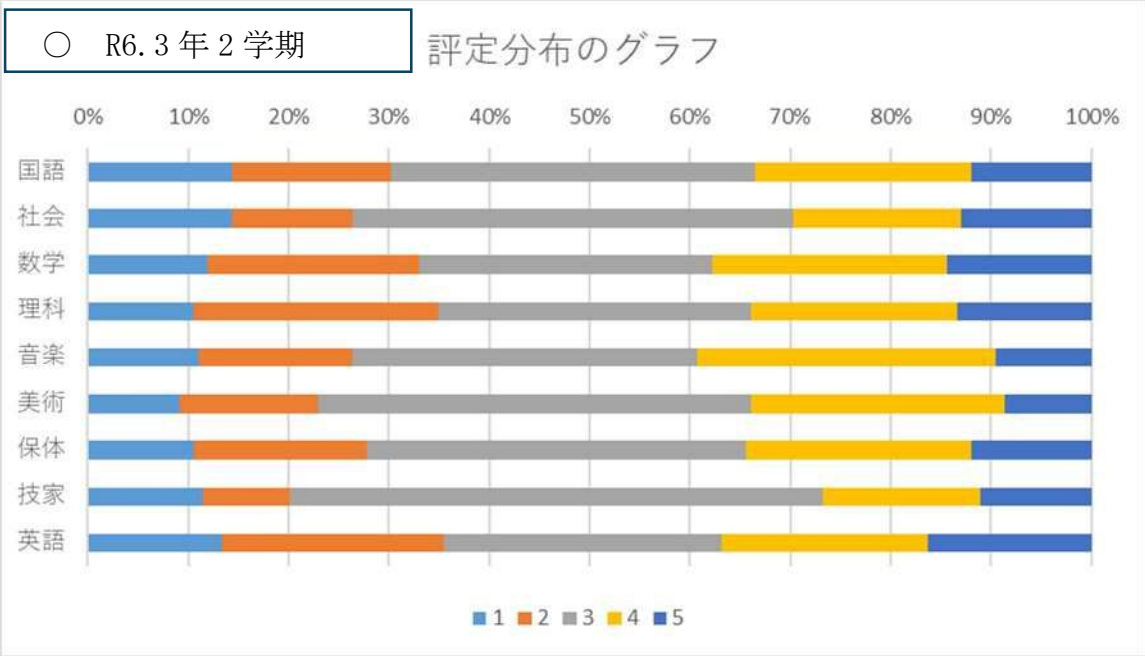
（２）観点別評価の割合・評定の割合（３校）

○　文書の記載

※　評価基準は生徒の実態を考慮し、A：15～30%、B：40～70%、C：15～30%となるように推測して設定する。また、学期・学習内容のまとまりごとに生徒の学習状況を把握し、必要に応じて上記範囲となるように設定を見直す。

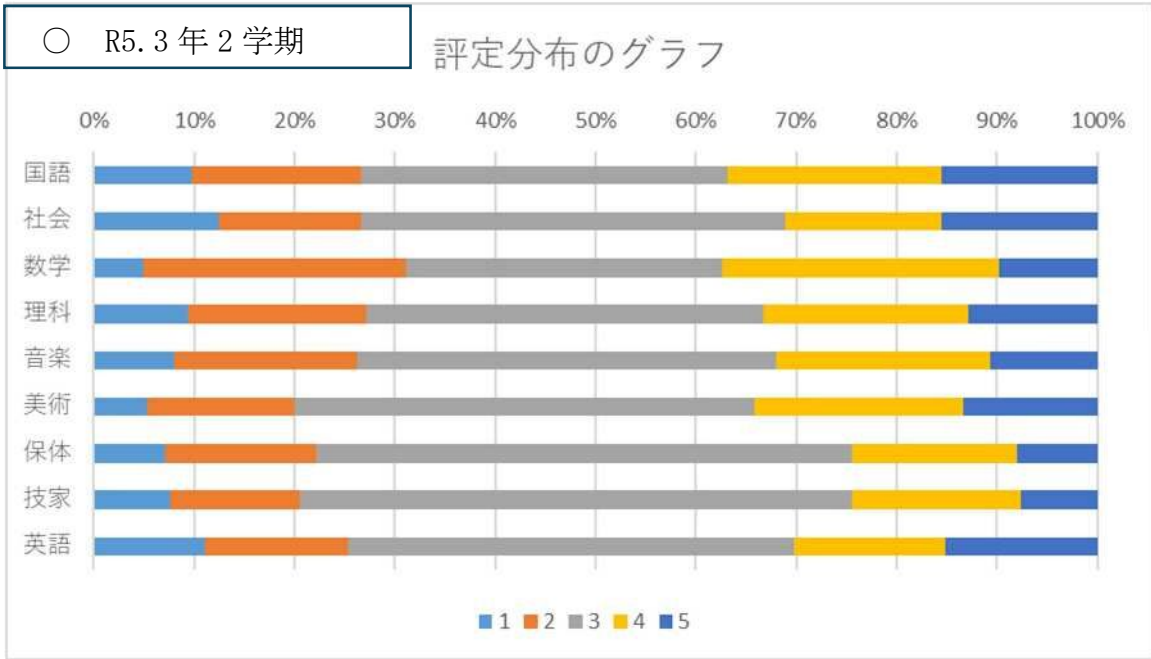
※　学年の評定の信頼性を担保するため、正規分布から大きく外れる状態にならないように留意する必要がある。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.0
数学	3.1
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.1
技家	3.1
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期



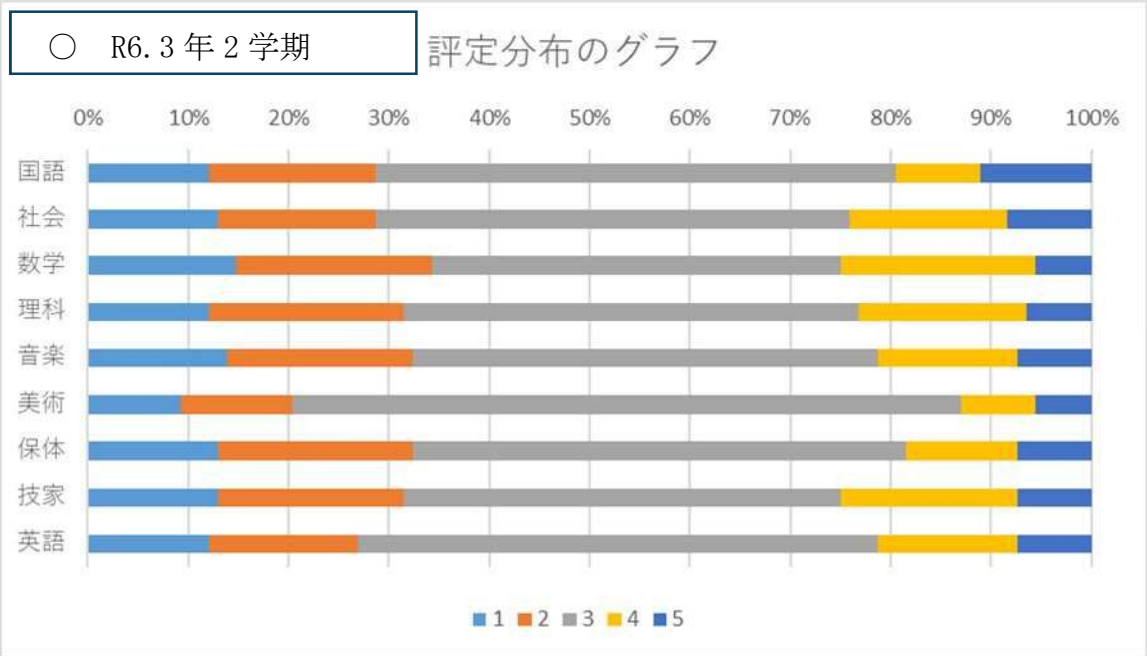
	平均値
国語	3.2
社会	3.1
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.0
技家	3.0
英語	3.1

○　文書の記載

人数の割合については明確な根拠はないが、**仮にＡやＣの生徒が５０％近くいたとすると学校の設定した評価規準(簡単すぎる、難しすぎる)や指導方法が問われることにもなりかねない。**Ａ「十分に満足」Ｃ「努力を要する」ということから考えると、**上下２０％程度（ＡとＣの割合がＢの割合を越えない程度）が目安となる。**

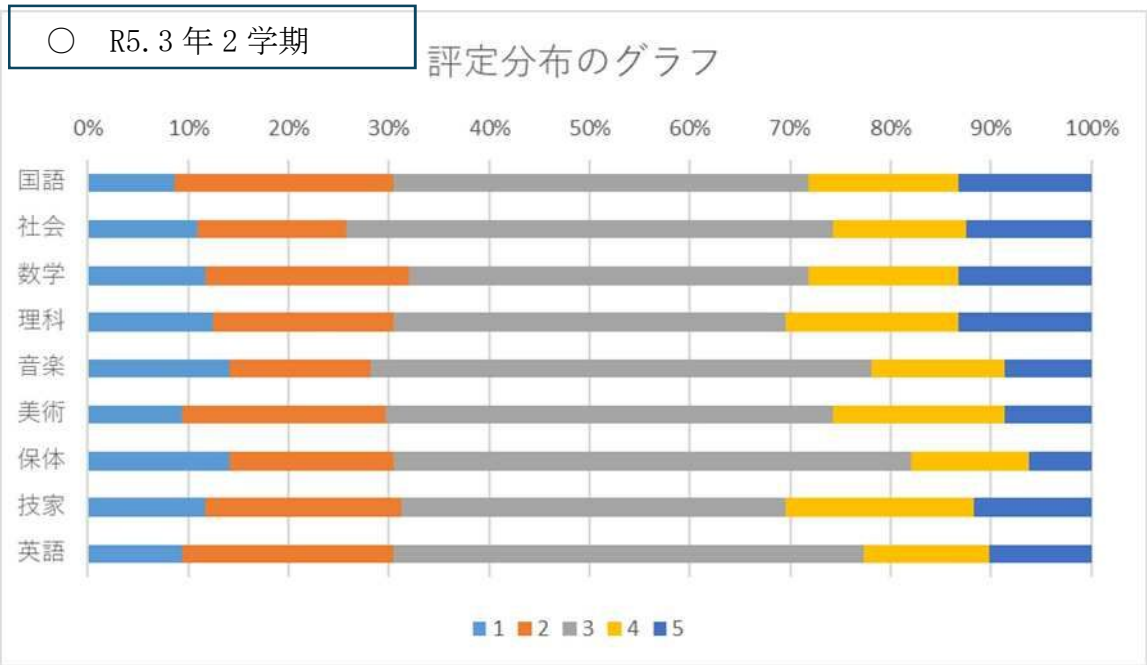
○　人数の割合を　**５と４で３０％**、**３は４０％**、**１と２で３０％**　**程度**とする。
※　原則として**５の人数が４の人数を上回らない**ようにする。

○　R6.3 年 2 学期



平均値
2.9
2.9
2.8
2.9
2.8
2.9
2.8
2.9
2.9

○　R5.3 年 2 学期

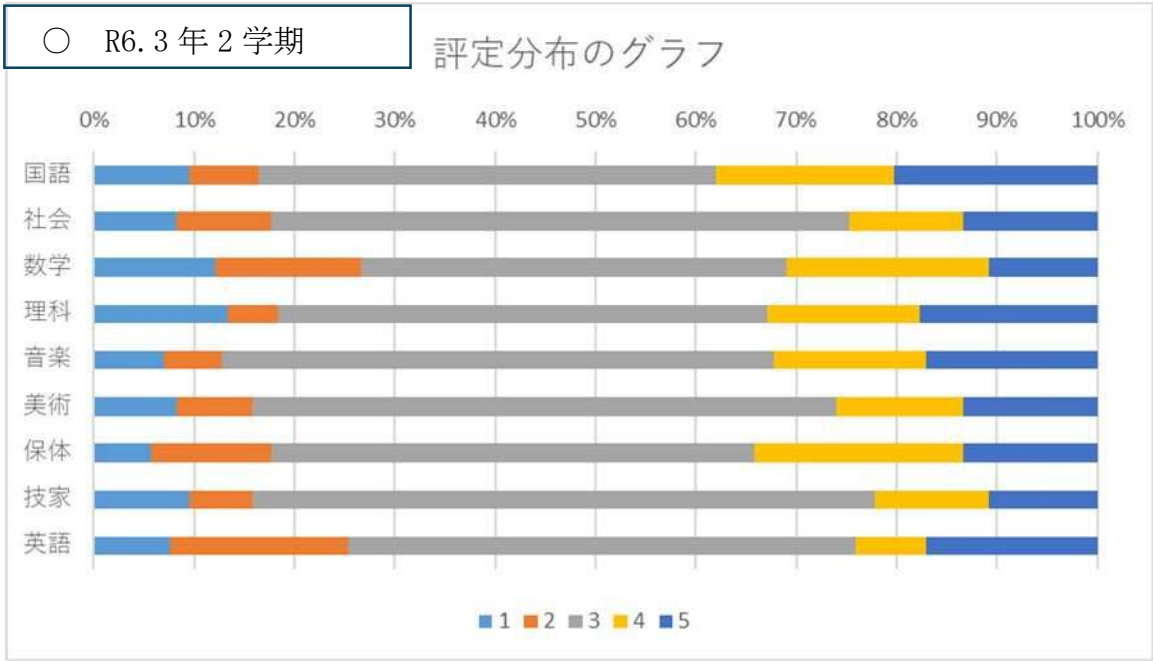


平均値
3.0
3.0
3.0
3.0
2.9
3.0
2.8
3.0
2.9

○　文書の記載

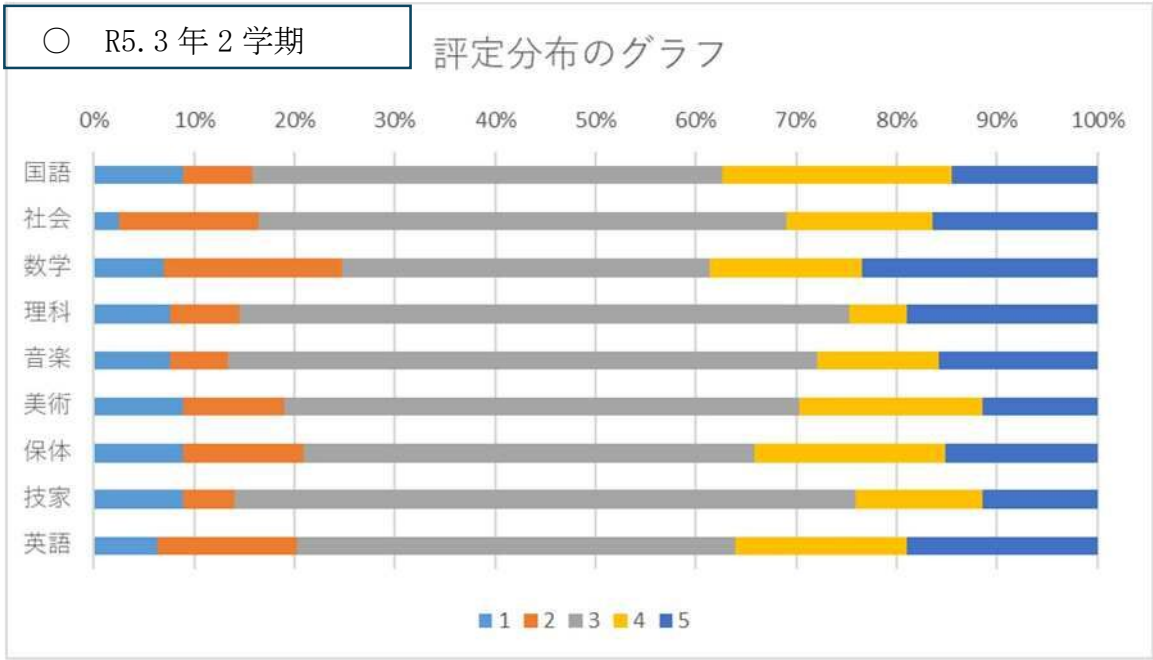
○　人数の割合を　A･･･２０％　B･･･６０％　C･･･２０％　を基準
（範囲としては　A･･･２０～３０％　B･･･４０～６０％　C･･･２０～３０％　程度）
５と４･･･３０％　３･･･４０％　２と１･･･３０％　を基準
※　原則５の人数が４の人数を上回らないようにする。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.3
社会	3.1
数学	3.0
理科	3.2
音楽	3.3
美術	3.2
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.1

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.3
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.3

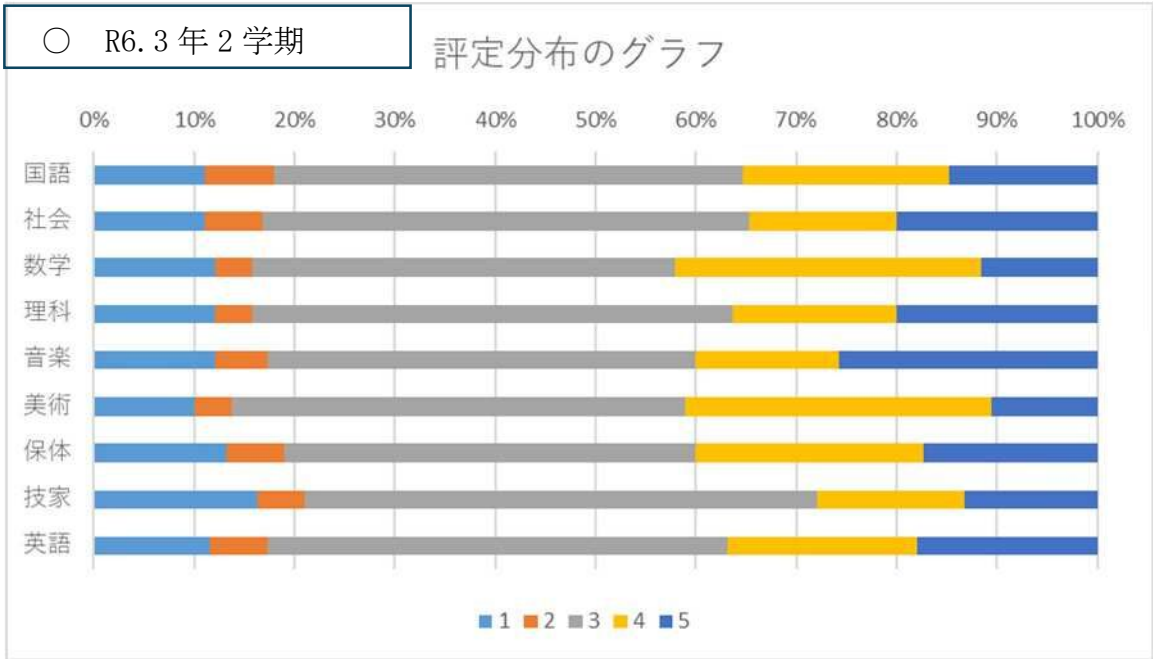
（３）観点別評価の割合・評定の平均値（２校）

○　文書の記載

Ｂの基準を達成した生徒の中で、特に達成度の高い生徒をＡとする。Ａの生徒は、全生徒の 15%～40%程度とする。
Ａの割合は５０％を超えないようにする。
Ｃの割合は３０％を超えないようにする。　※超える場合は事前に主幹へ相談する。

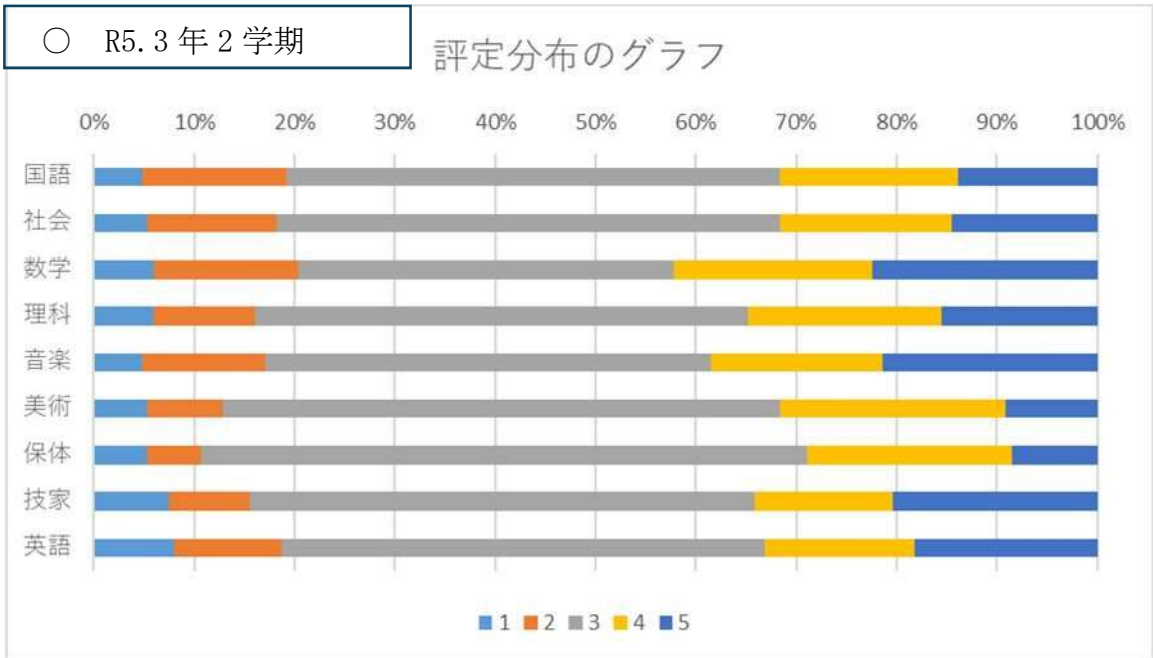
※　評定の平均値について、口頭で周知した。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.3
音楽	3.4
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.0
英語	3.3

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.4
理科	3.3
音楽	3.4
美術	3.2
保体	3.2
技家	3.3
英語	3.2

○　文書の記載

本校の５教科評定平均は、生徒の日々の学習状況や各種学力テストの結果から**３．０～３．３**が相当である。

原則

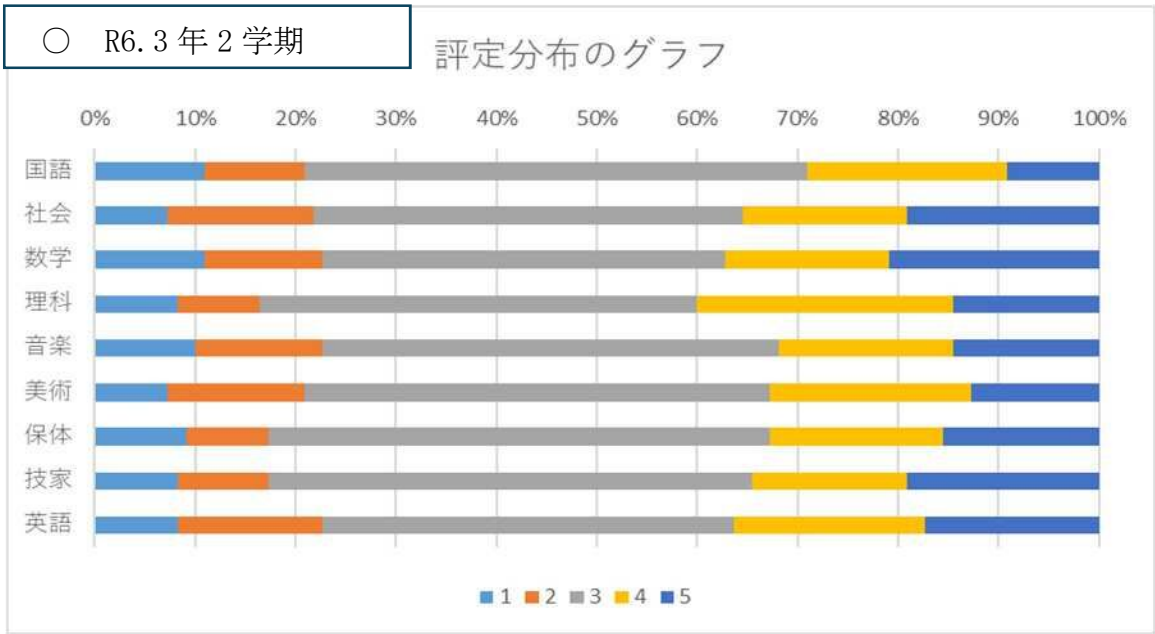
○　現行の評定５と４の割合が２５～３５％以内を廃止する。

○　観点の組合せ、評定平均を守る。

○　各観点ＡＢＣの幅を設定し、ＡとＣはそれぞれＢの人数を超えないを守る。

【Ａの人数 ＜ Ｂの人数 ＞ Ｃの人数】

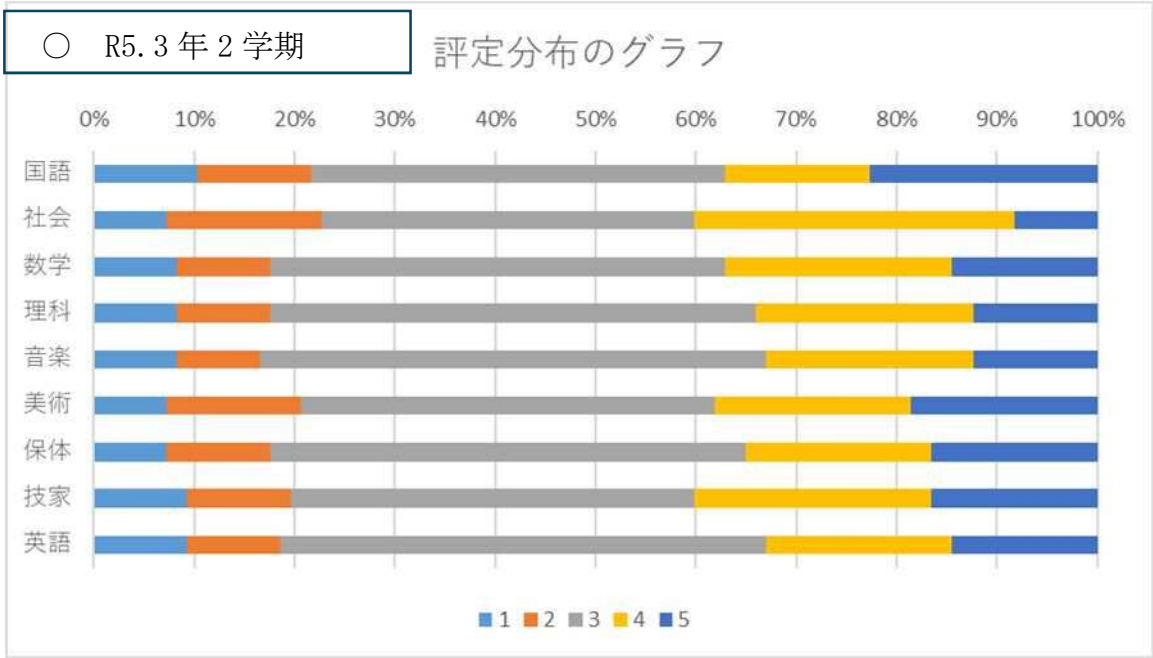
○　R6.3 年 2 学期



平均値

3.1
3.3
3.2
3.3
3.1
3.2
3.2
3.3
3.2

○　R5.3 年 2 学期



平均値

3.3
3.2
3.3
3.2
3.2
3.3
3.3
3.3
3.2

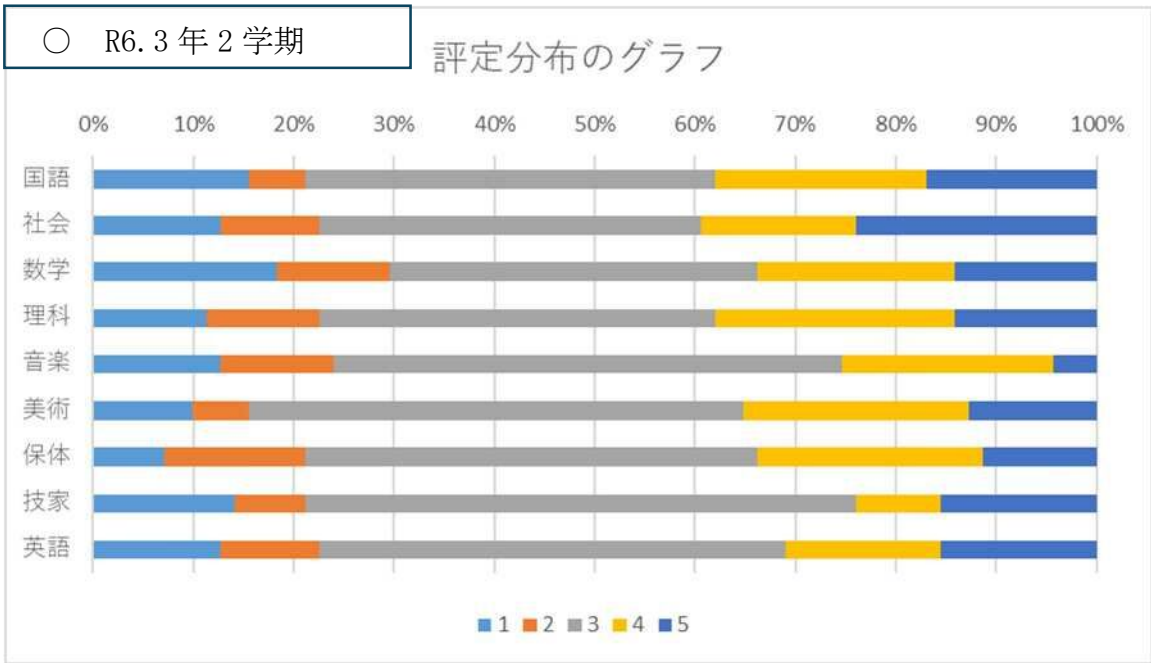
（４）評定の割合・評定の平均値（１３校）

○　文書の記載

> ※　学年の評定の信頼性を担保するため、正規分布［10%・20%・40%・20%・10%］から大きく外れる状態にならないように留意すること。

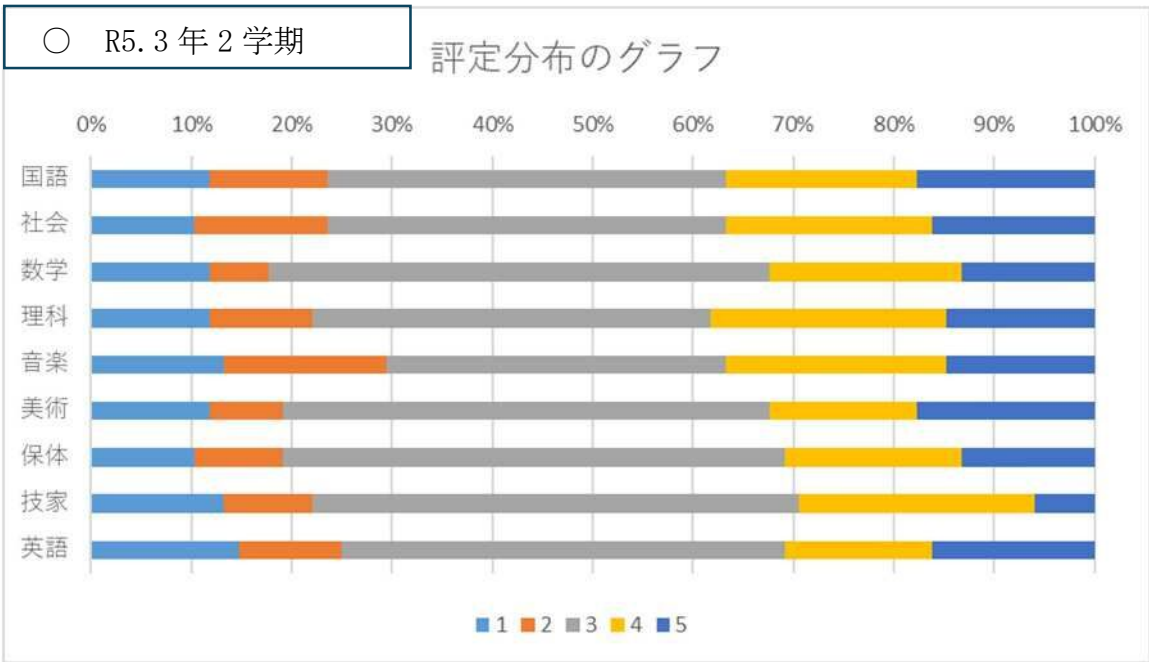
口頭で伝えたこと
→　全国学力テストや実力テストの結果が、平均か平均を少し上回っていることを踏まえて、評価をお願いします。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.0
理科	3.2
音楽	2.9
美術	3.2
保体	3.2
技家	3.0
英語	3.1

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.0
英語	3.1

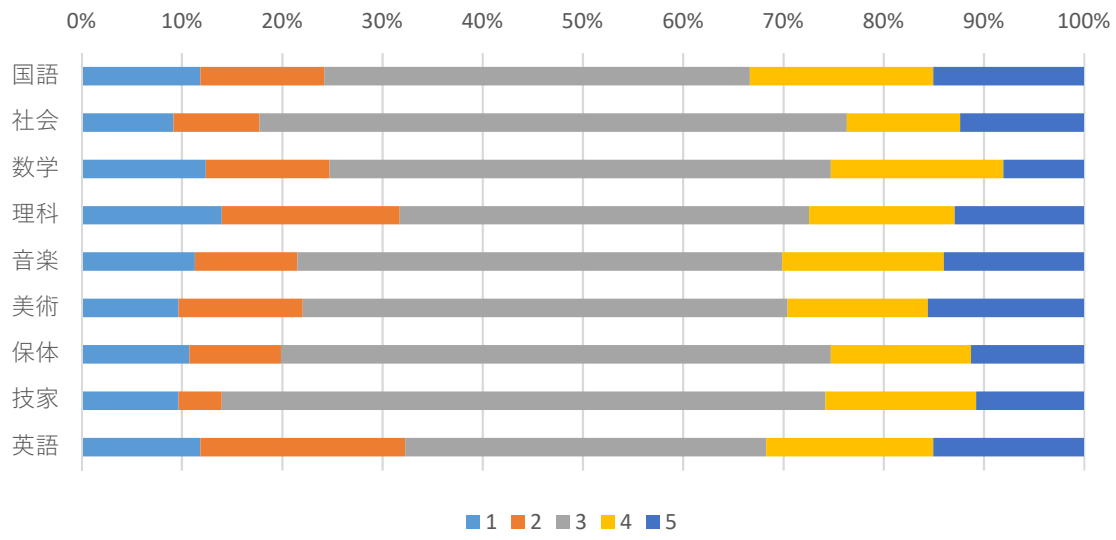
○　文書の記載

	評定	目安
30%	5	10～15%
	4	15～20%
	3	40%
30%	2	15～20%
	1	10～15%

学年	評定平均の目安
1年	2．80 ～ 3．05
2年	2．85 ～ 3．10
3年	2．90 ～ 3．15

○　R6.3年2学期

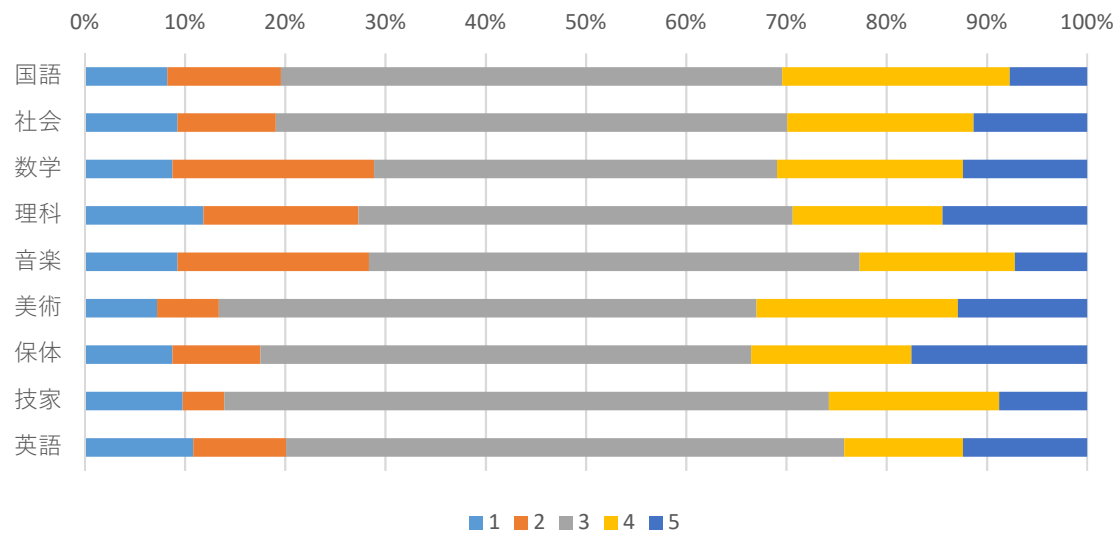
評定分布のグラフ



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	3.0
理科	2.9
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.1
技家	3.1
英語	3.0

○　R5.3年2学期

評定分布のグラフ



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	3.1
理科	3.0
音楽	2.9
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.1

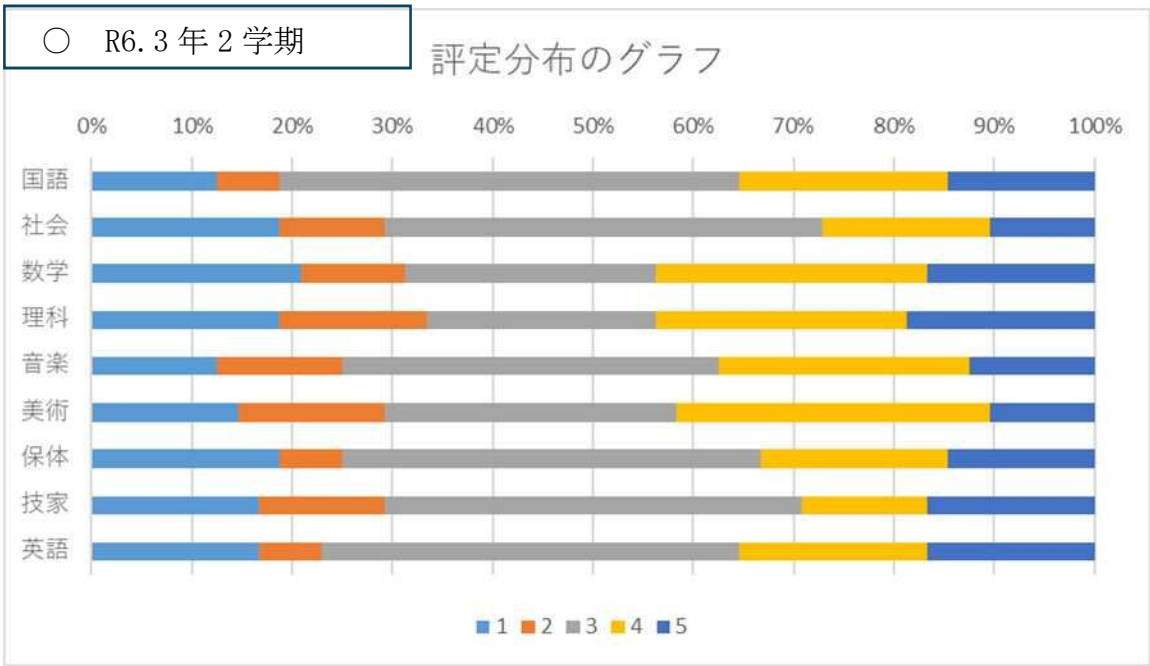
○　文書の記載

◎　生徒が頑張った結果が成績にあらわれように評価する
◎　指導と評価の一体化を図る
◎　正規分布を参考にする
◎　評定平均が極端に高かったり、低くなったりしないようにする（評定平均は２．９～３．１を目安とする）

計画（P）→実践（D）→評価（C）→改善（A）の活動の繰り返しを

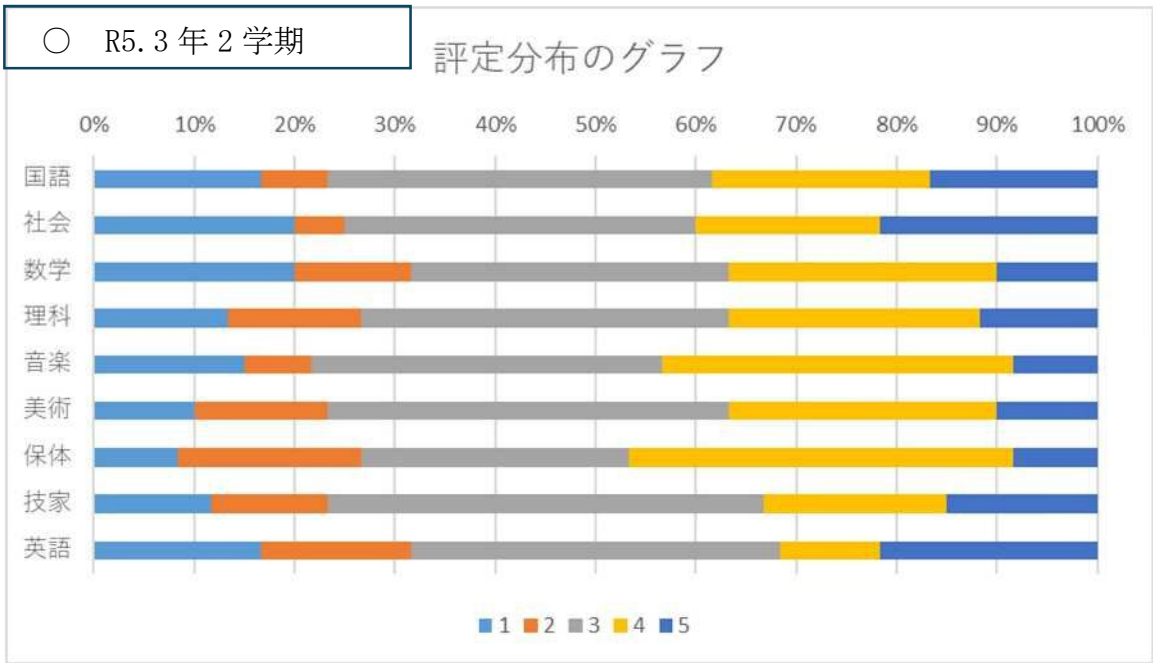
● 具体的な配分資料
○　各評定数を次の目安を参考にする。（目安　１・５-１０％　２・４－２０％　３－４０％）

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	2.9
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.0
技家	3.0
英語	3.1

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.0
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.1

○　文書の記載

※　学年の評定の信頼性を担保するため、正規分布から大きく外れる状態にならないように留意する必要がある。

☞　学年の評定平均は、標準が３．０であることから、±０．２の範囲になるようにする。（２．８～３．２）

本校では、

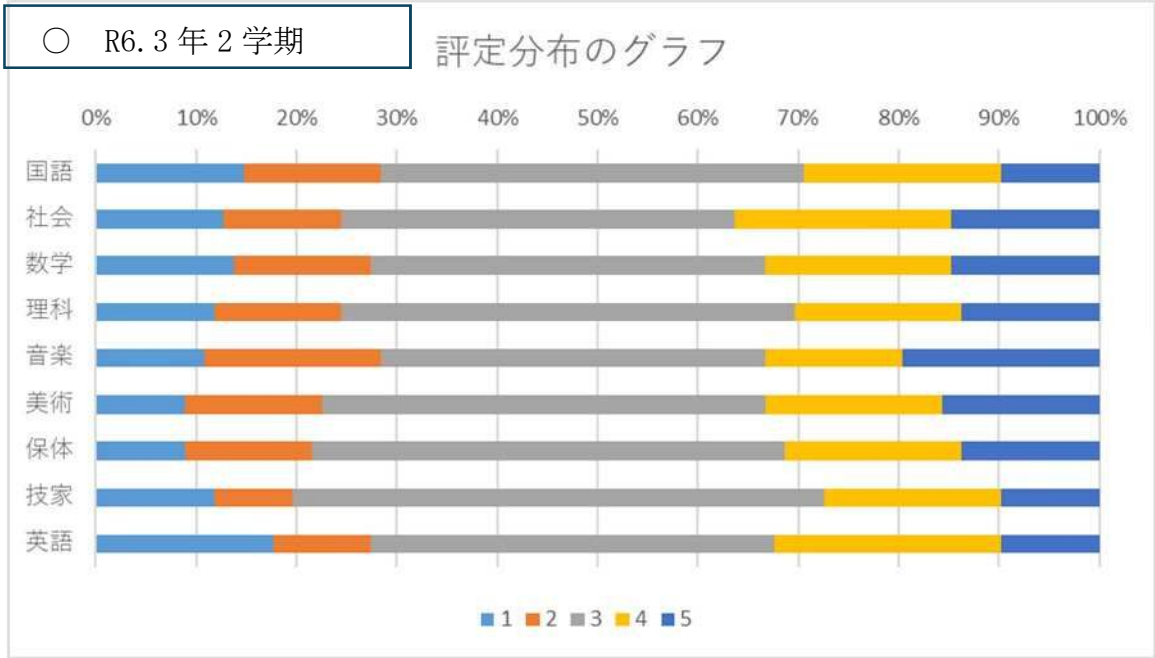
５：在籍人数の１０％±５％
４：在籍人数の２０％±５％
３：在籍人数の４０％±５％
２：在籍人数の２０％±５％
１：在籍人数の１０％±５％

を目安とする。

※ 絶対評価のため、評定ごとの目安内にあることが絶対条件ではないが、学校として成績の信ぴょう性が欠けないためにも、少なくとも評定が４と５の合計が多くても４０％、少なくとも２０％は意識したい。（評定１と２の合計も同様）

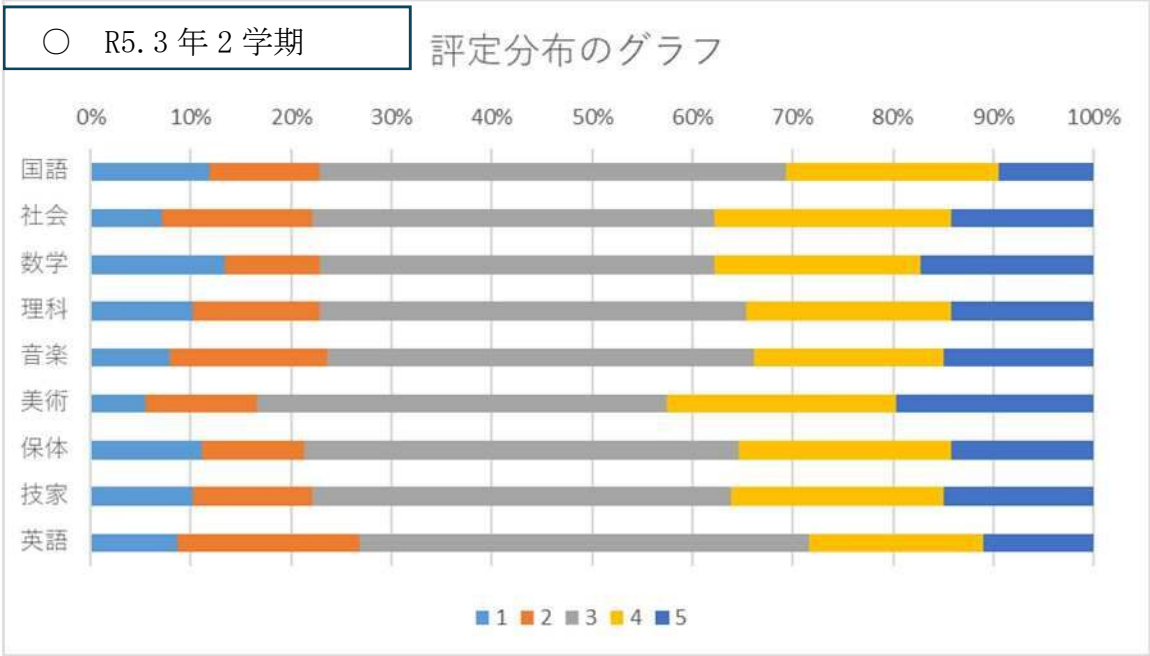
⇒　評定平均（２．８～３．２）の目安から外れる場合は教務に相談をする。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.1
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.1
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期

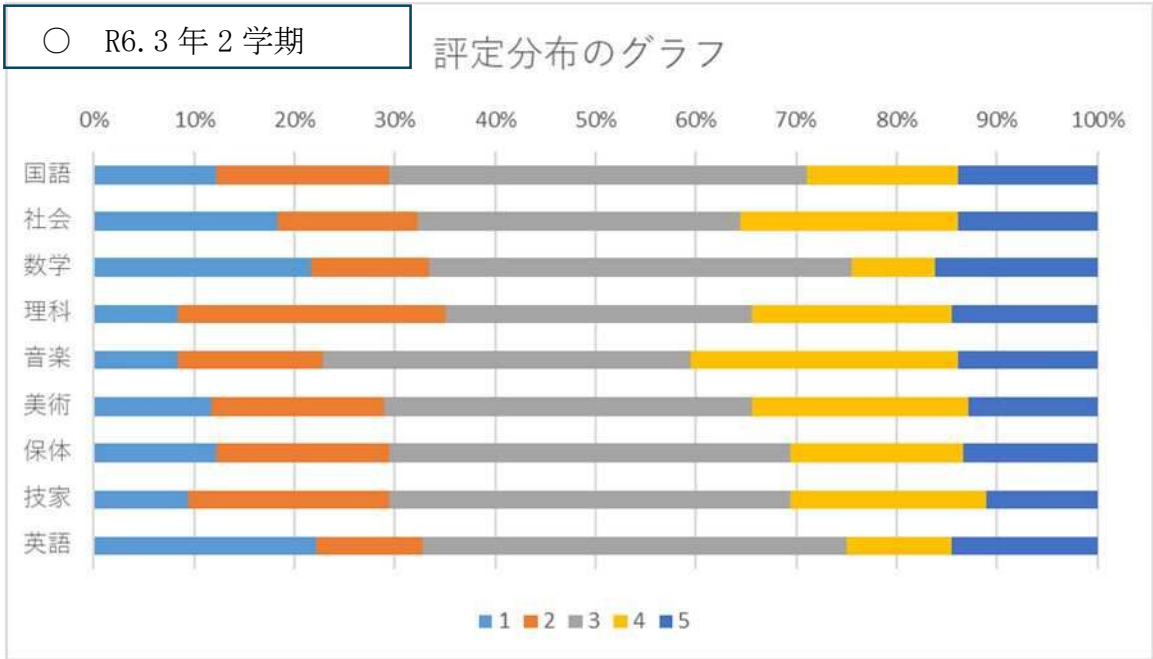


	平均値
国語	3.1
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.4
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.0

○　文書の記載

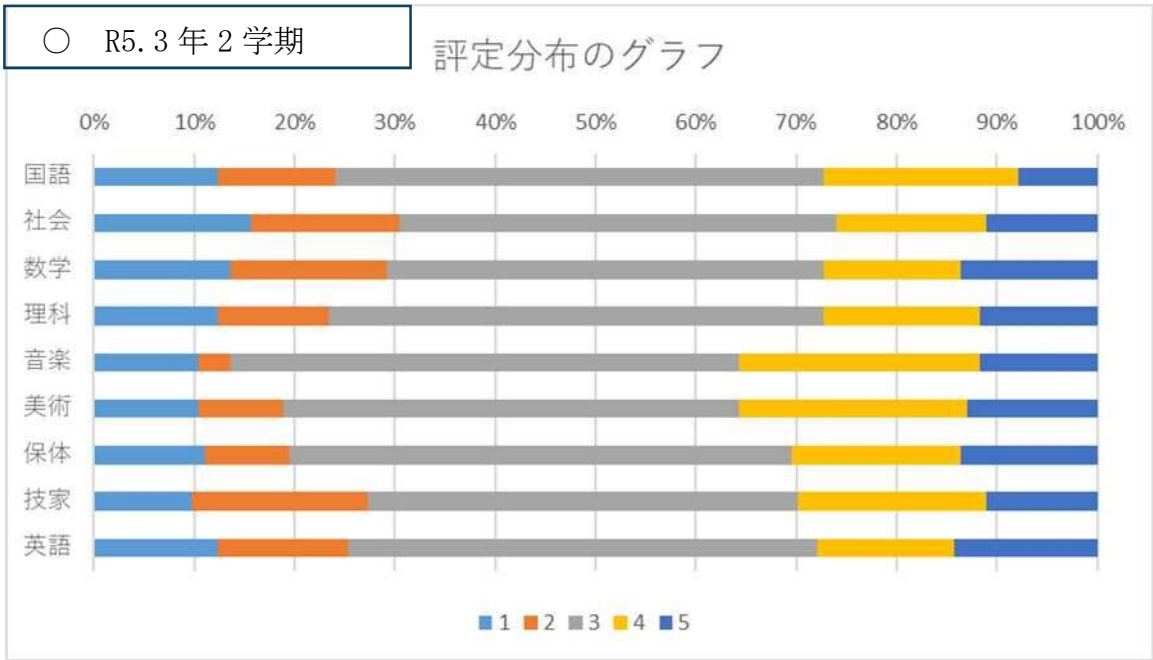
> 同じ学年を複数の先生で担当する場合、互いに相談して評価・評定が大きくかけ離れないようにしてください。（参考：全国学力学習状況調査の結果から、５科の評定平均は２．８程度を目安）
>
> **(3) 評価の信頼性**
>
> 評価の信頼性を担保するため、正規分布から大きく外れる状態にならないように留意する必要がある。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.0
数学	2.9
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.0
技家	3.0
英語	2.8

○　R5.3 年 2 学期

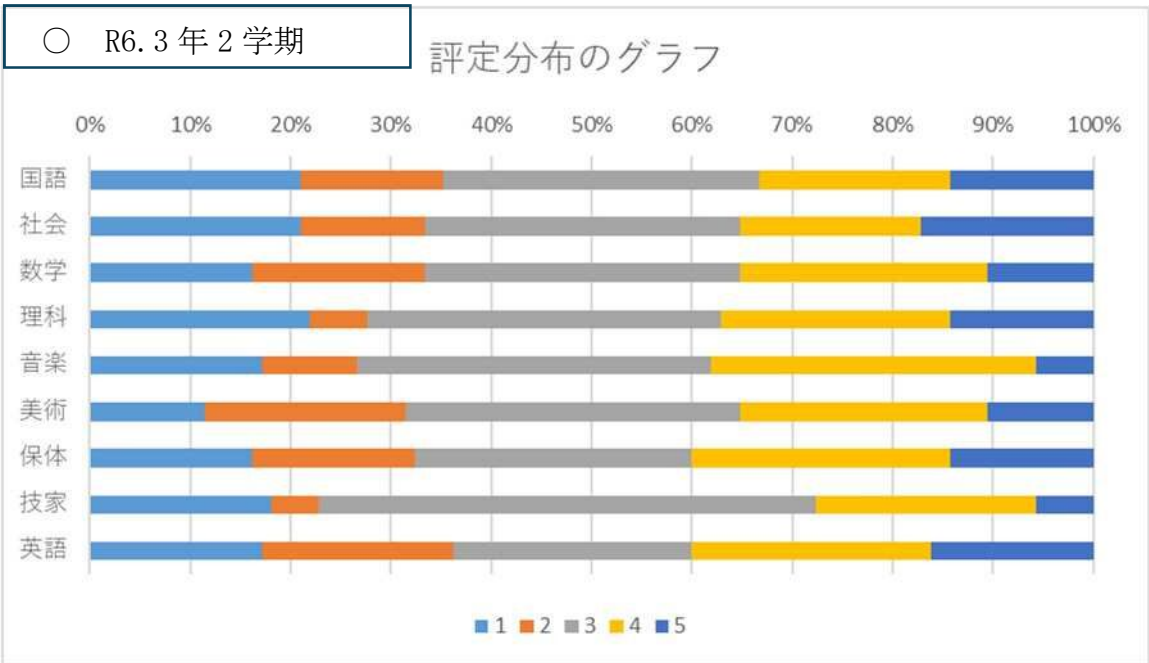


	平均値
国語	3.0
社会	2.9
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.0
英語	3.0

○　口頭で周知した内容

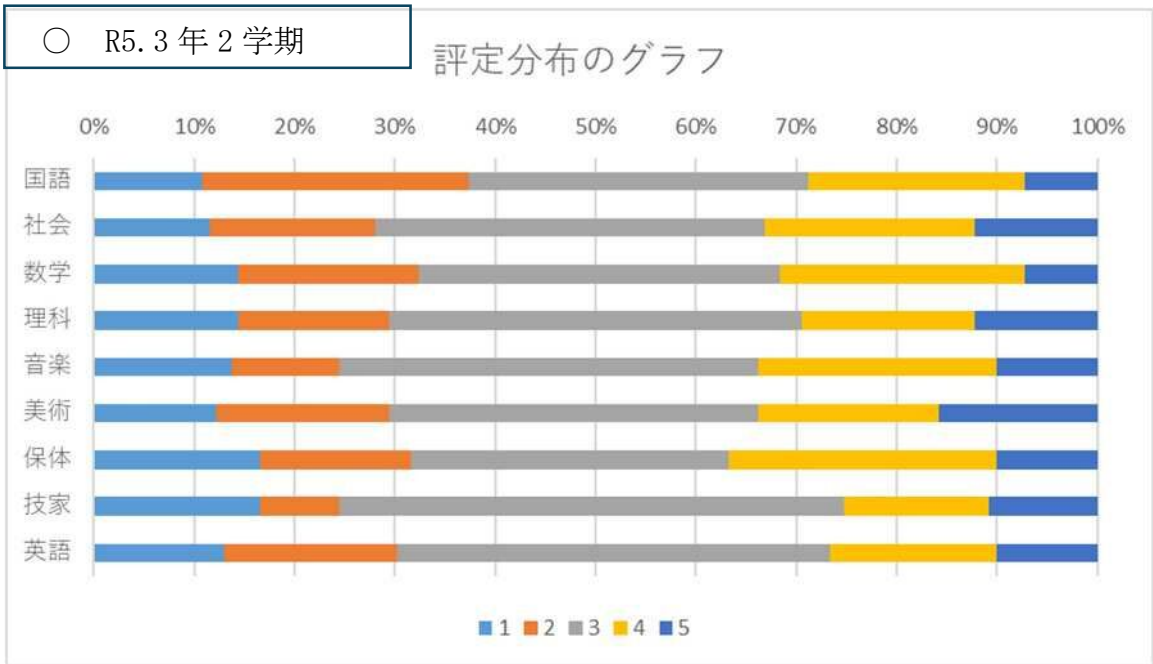
評定ごとの割合（５が１割、４が２割など）や評定の平均値（３．０）を周知したが、指導と評価の一体化を図るためであり、教諭自身の指導を振り返ることを目的のため、あくまで目安で評価規準が適正であるかを確認してもらった。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	2.9
社会	3.0
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.0
美術	3.0
保体	3.1
技家	2.9
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期



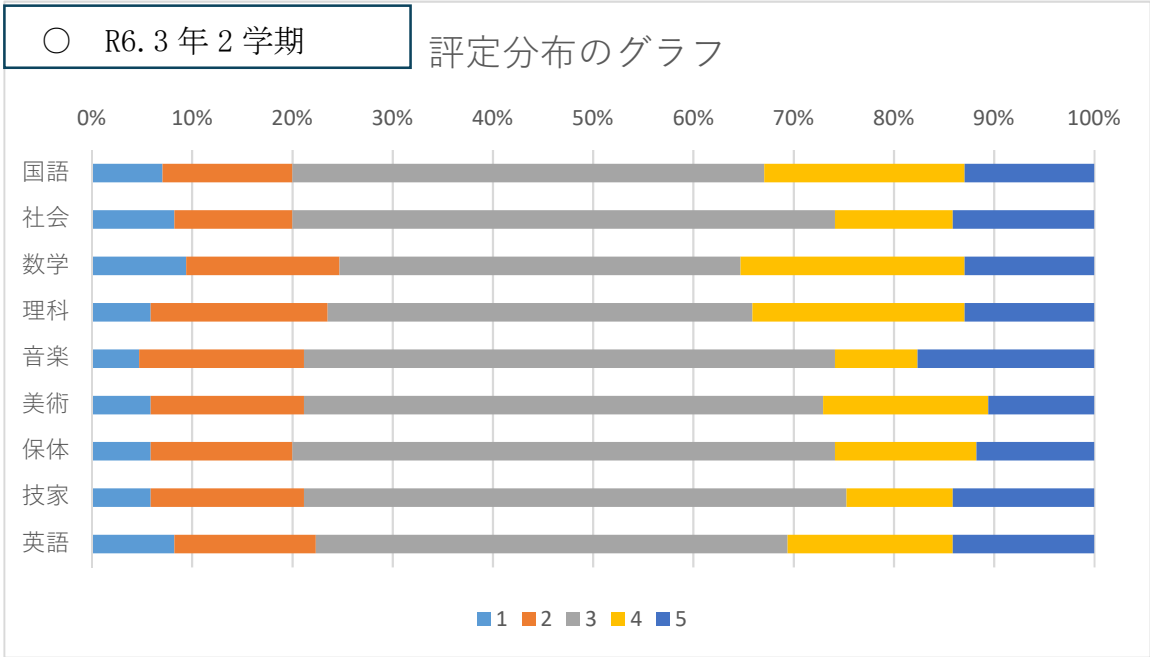
	平均値
国語	2.9
社会	3.1
数学	2.9
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.0
技家	2.9
英語	2.9

○　文書の記載

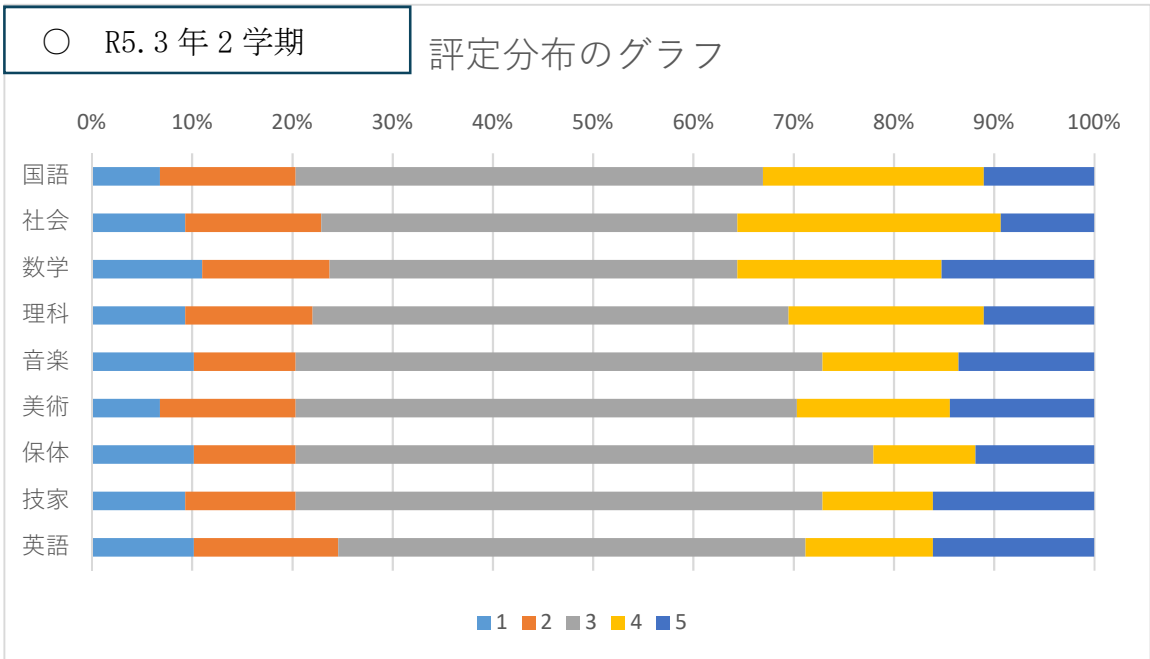
なお、評定数の分布については、相対評価の割合を基に、５、４、３、２、１の上限下限の目安を設ける。
５、１　…　10％±５％（５％～15％）
４、２　…　20％±５％（15％～25％）
３　　…　40％±10％（30％～50％）
※　これらの上限下限を超える場合は点検の際、各教科担任に確認を行う。

※　評定の平均値について口頭で周知した。

○　R6.3 年 2 学期



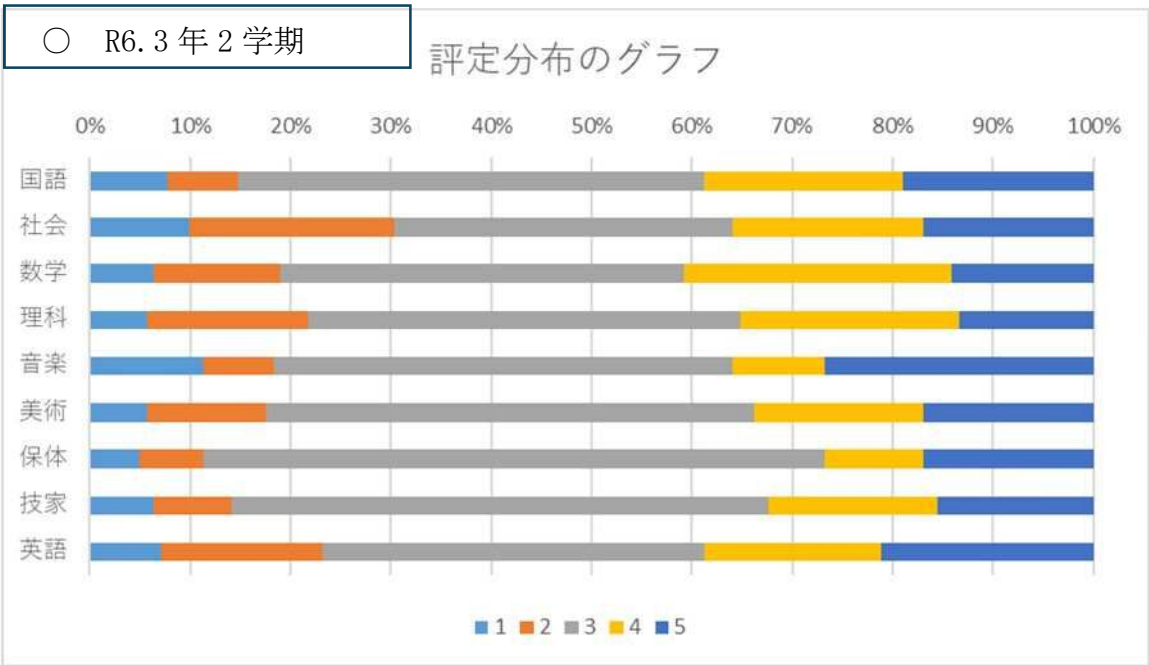
○　R5.3 年 2 学期



○　文書の記載

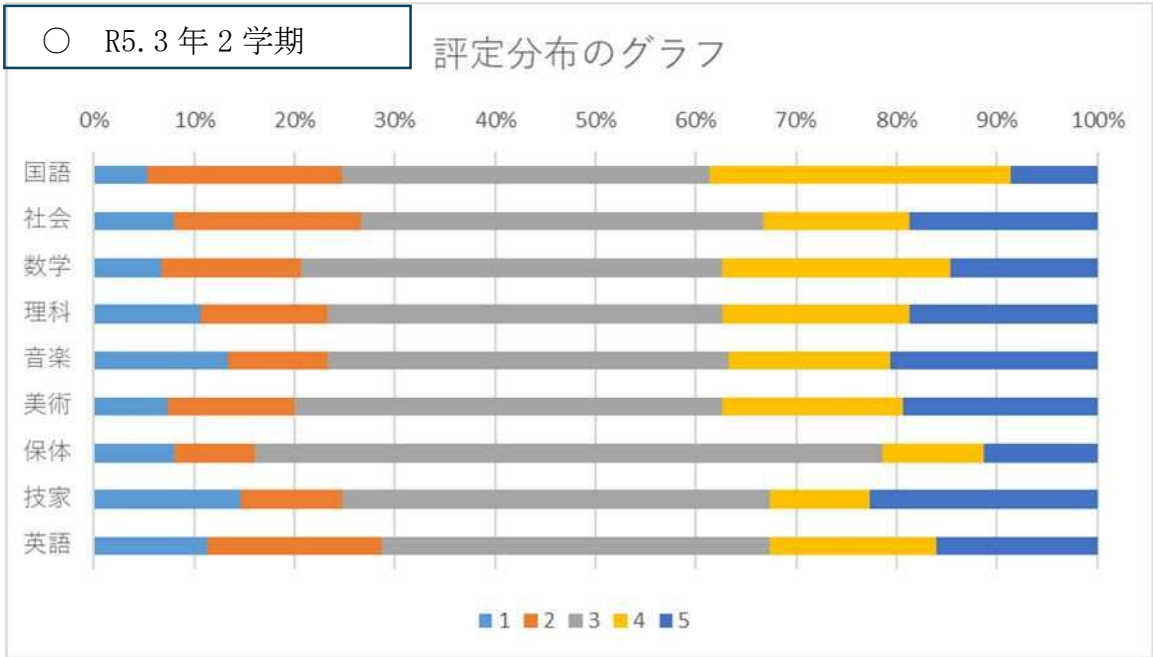
> ※　学年の評定の信頼性を担保するため、正規分布から大きく外れる状態にならないように留意する必要がある。
> ※　ＮＲＴテストの結果を踏まえ評定平均の目安を決定する。
> （例年は「３．２を目安とし３．３を超えない」が続いている。）

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.4
社会	3.1
数学	3.3
理科	3.2
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.3

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.3
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.1

○　文書の記載

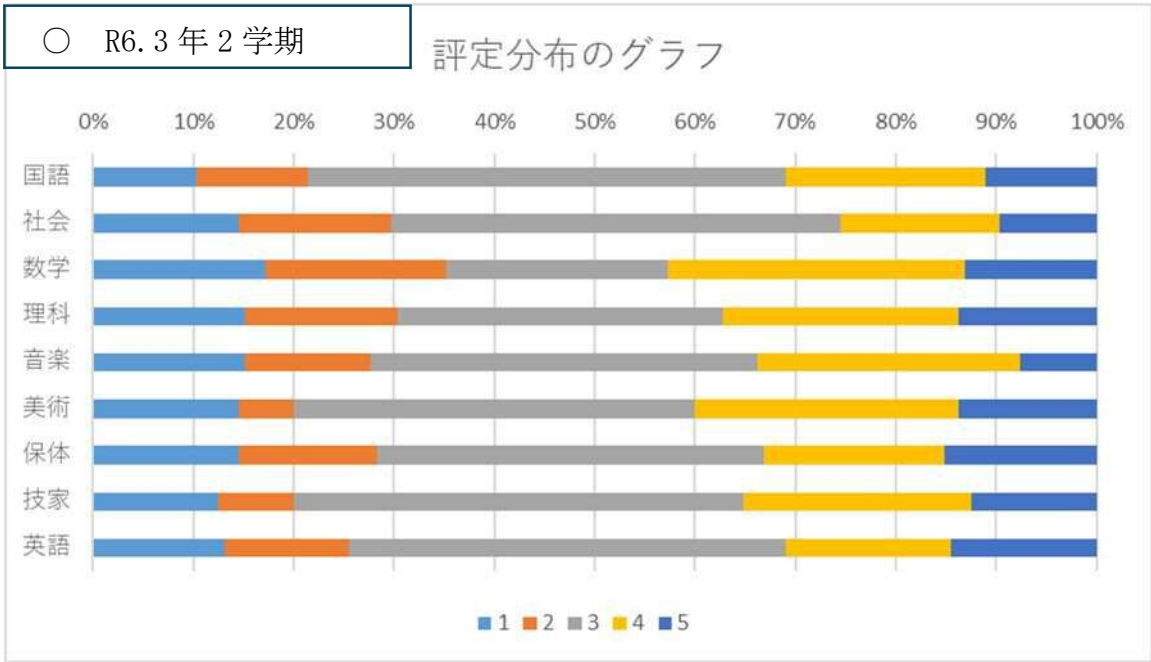
2　信頼性を担保するために

①　各観点について

・　ある程度、**相対的を加味して**人数を考える。

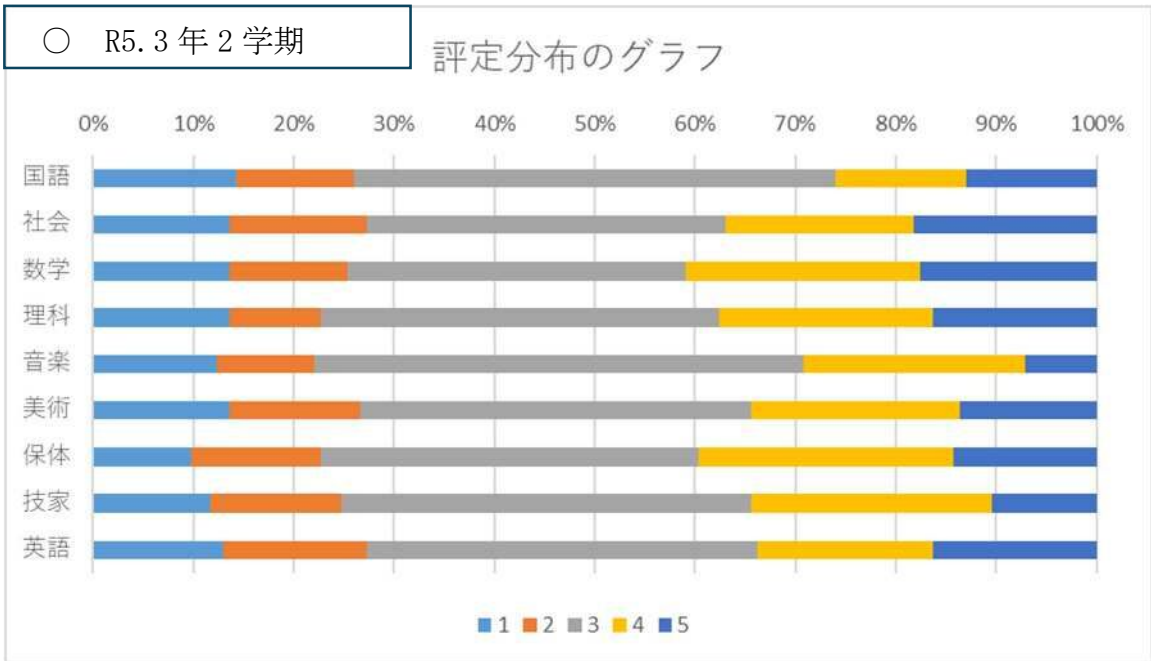
・　評定平均が**真ん中の値**に近くなるようにする。

○　R6.3年2学期



	平均値
国語	3.1
社会	2.9
数学	3.0
理科	3.1
音楽	3.0
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.1

○　R5.3年2学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.1
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.0
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.1

○　文書の記載

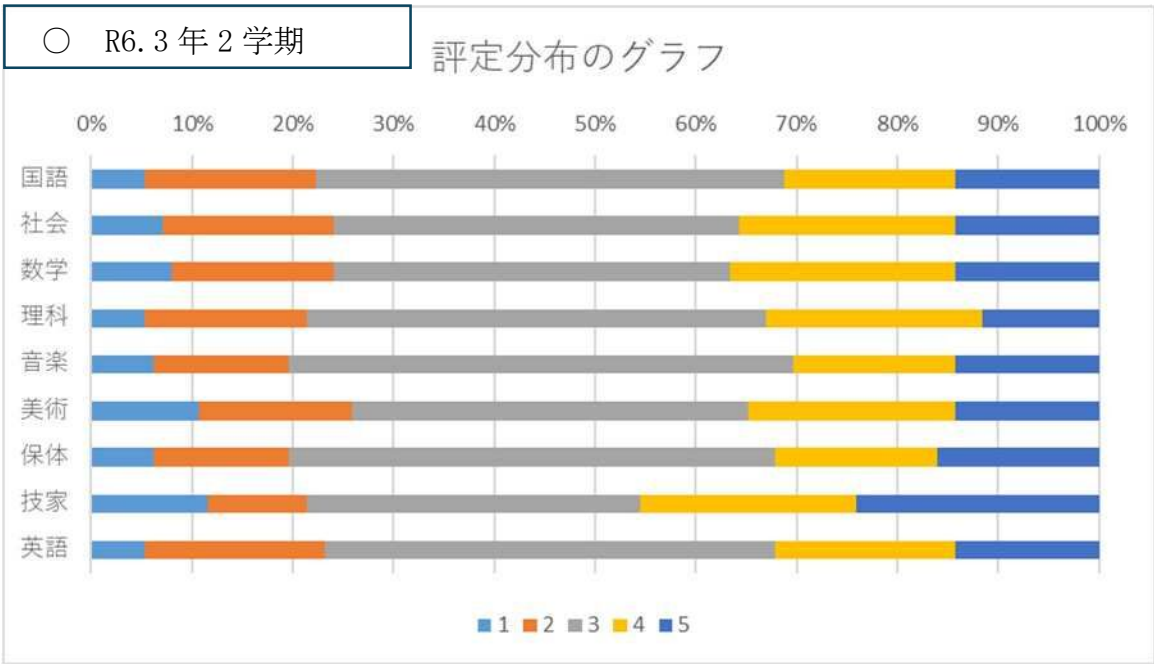
○　「評定平均が３．２」を超える場合、または、各評定数の割合が下の割合を外れる場合は、事前に教務に相談してください。

評定「1」、「5」→　　５%～１５%

評定「2」、「4」→　１５%～２５%

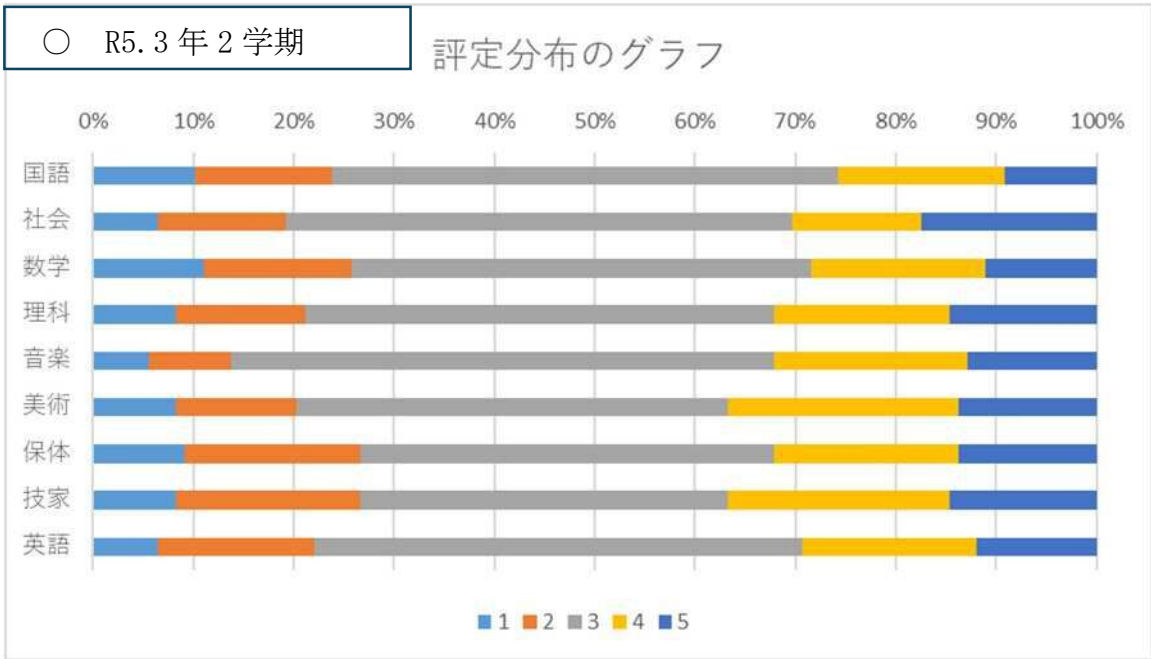
※　裏面続く

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.4
英語	3.2

○　R5.3 年 2 学期

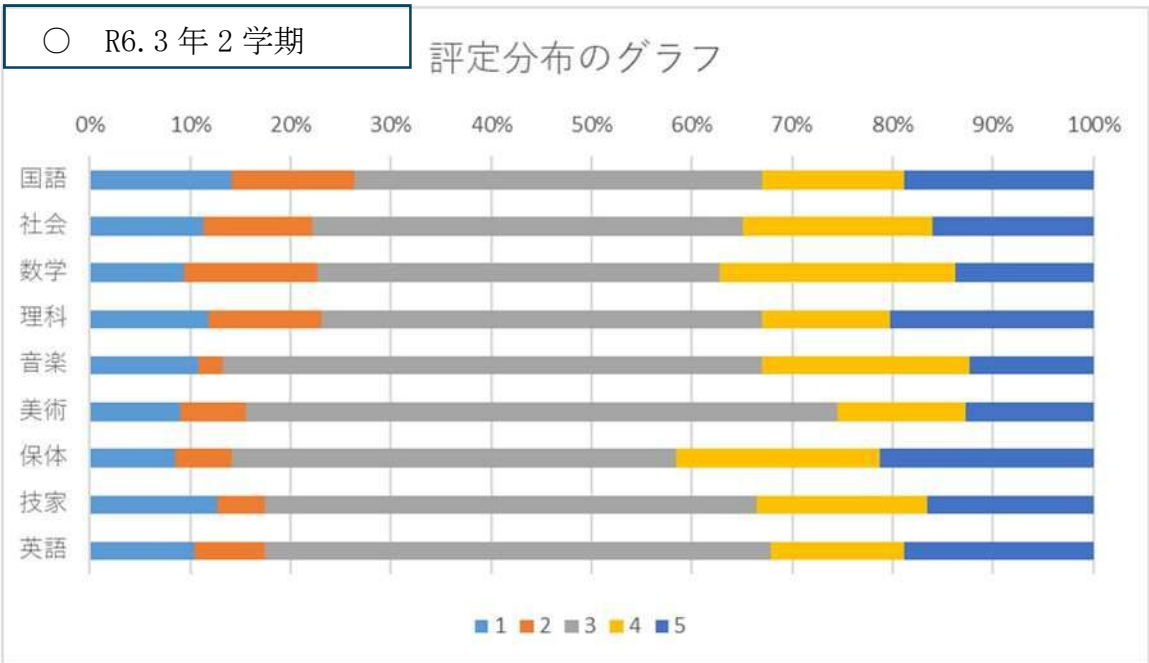


	平均値
国語	3.0
社会	3.2
数学	3.0
理科	3.2
音楽	3.3
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.1

○　口頭で周知した内容

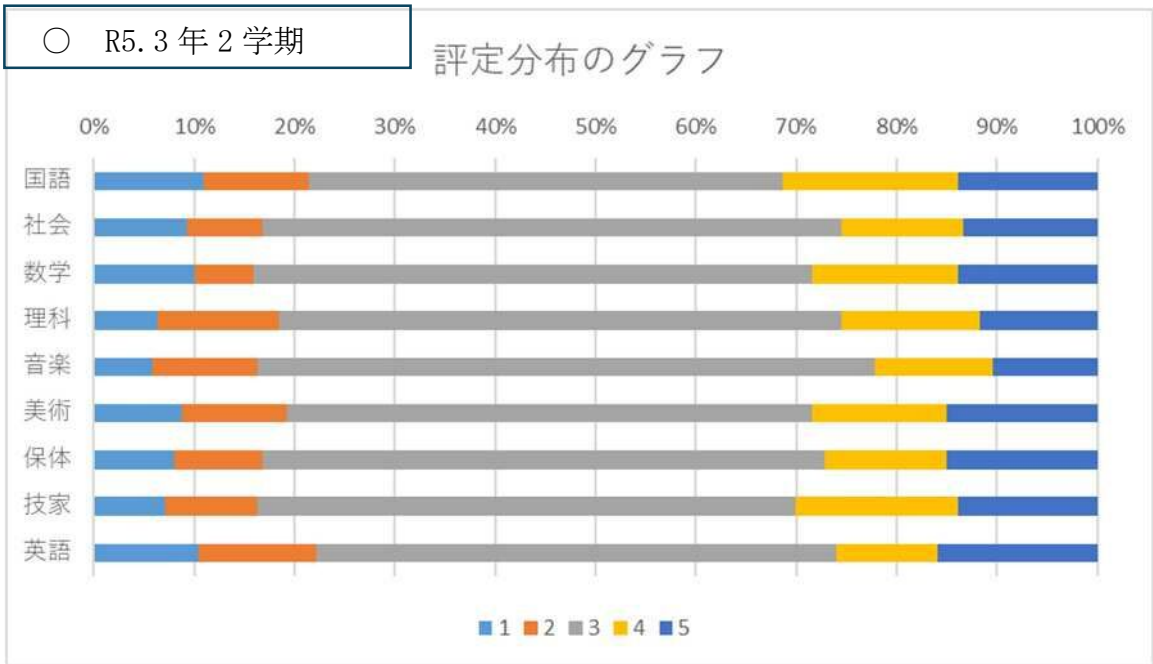
各教科部会で、昨年度の評定の平均について周知した。ＮＲＴ学力検査の結果も鑑みた上で、それぞれの評価規準が適正であるか、また各担当教諭の指導がどうであったかを振り返ることが目的である。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.4
技家	3.2
英語	3.2

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	3.2
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.1

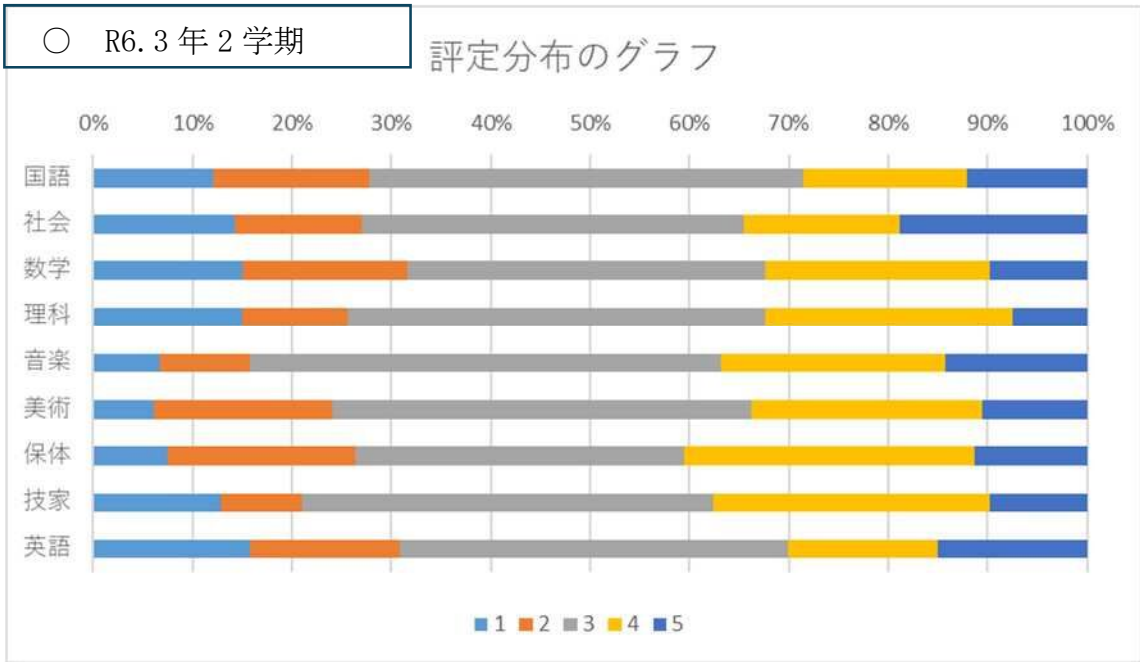
○　文書の記載

組み合わせ	評定	実現状況
AAA	5	十分満足でき　特に程度が高い
AAB　ABB	4	十分満足できる
BBB　AAC　ABC　BBC	3	おおむね満足できる
BCC　ACC	2	努力を要する
CCC	1	一層努力を要する

・ パターン＝評価となり、例外は生まれないため評価の説明は容易
・ ある程度信頼性を担保したい･･･が正規分布は正直難しい
　めやす　5･･･10%　4･･･20%　3･･･40%　2･･･20%　1･･･10%

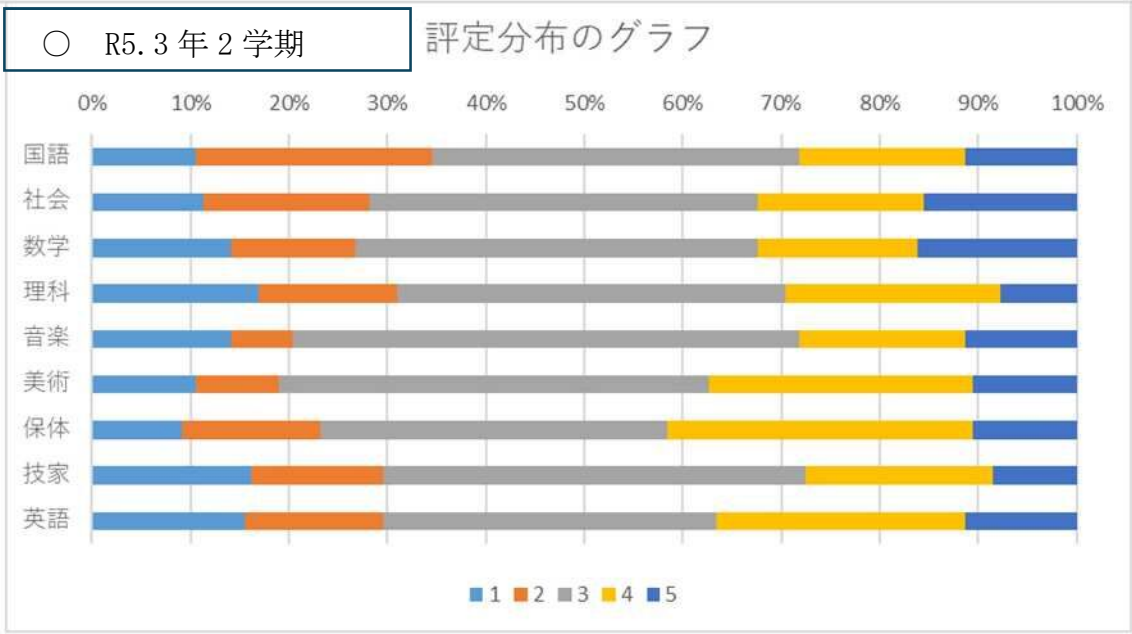
※　評定の平均値について口頭で周知した。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.1
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.3
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期

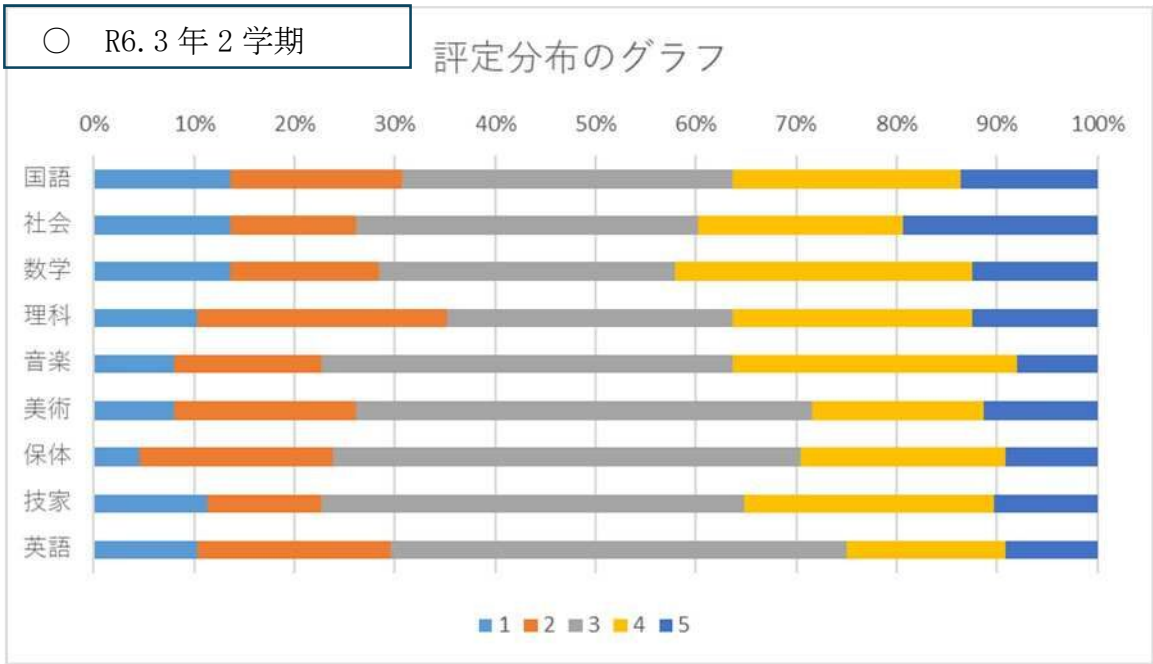


	平均値
国語	2.9
社会	3.1
数学	3.1
理科	2.9
音楽	3.0
美術	3.2
保体	3.2
技家	2.9
英語	3.0

○　文書の記載

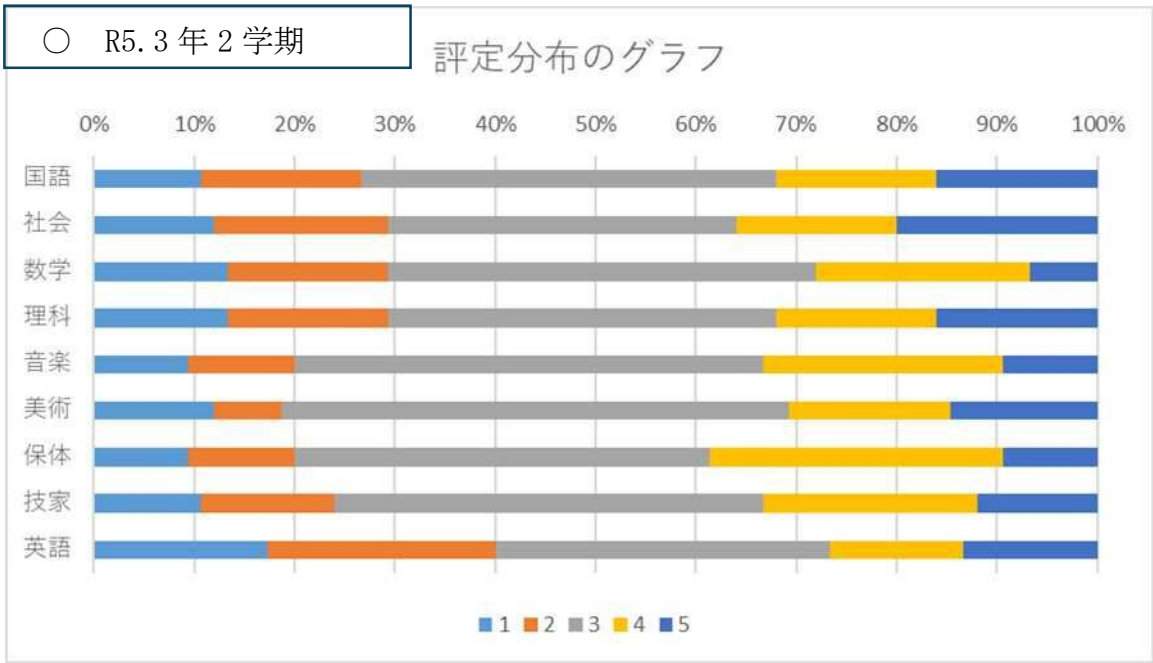
> ※　学年の評定の信頼性を担保するため、正規分布から大きく外れる状態にならないように留意する。学年の評定平均が 2.8 を下回った場合には、その理由を教務主任に報告する。あまりにも全体として偏りがある場合は、評価規準、評価基準や評価の方法について見直し、評価・評定について再検討する場合もある（評価・評定の入力時に遅れることがないようにする）。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.2
数学	3.1
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.1
技家	3.1
英語	2.9

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	2.9
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.1
英語	2.8

（５）評定の割合（９校）

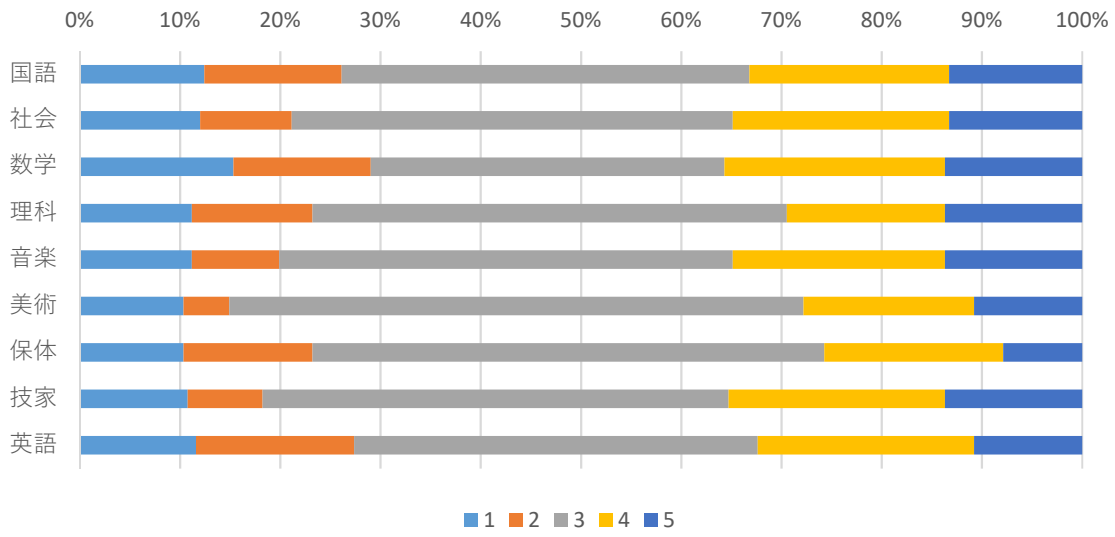
○　文書の記載

※　各教科、絶対評価のため評定の人数を定めることはないが、評定についてより高い信頼性を確保する観点から、概ね相対評価の前後５％を目安とする。
※　授業者によって同学年内の評価に偏りがないようにする。

	相対評価	
5	１０％	５～１５％
4	２０％	１５～２５％
3	４０％	３５～４５％
2	２０％	１５～２５％
1	１０％	５～１５％

○　R6.3 年 2 学期

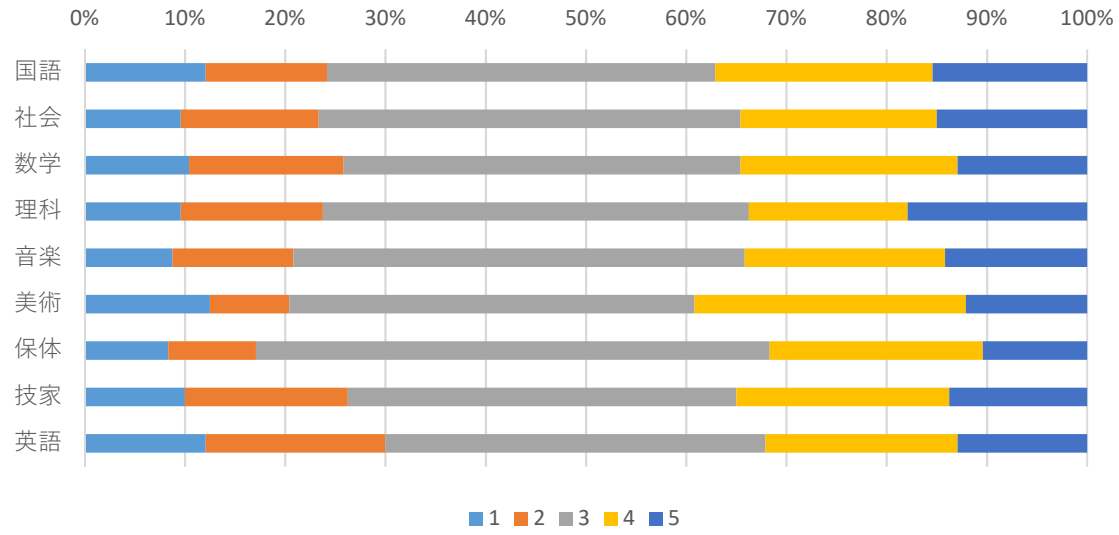
評定分布のグラフ



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	3.0
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.0
技家	3.2
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期

評定分布のグラフ

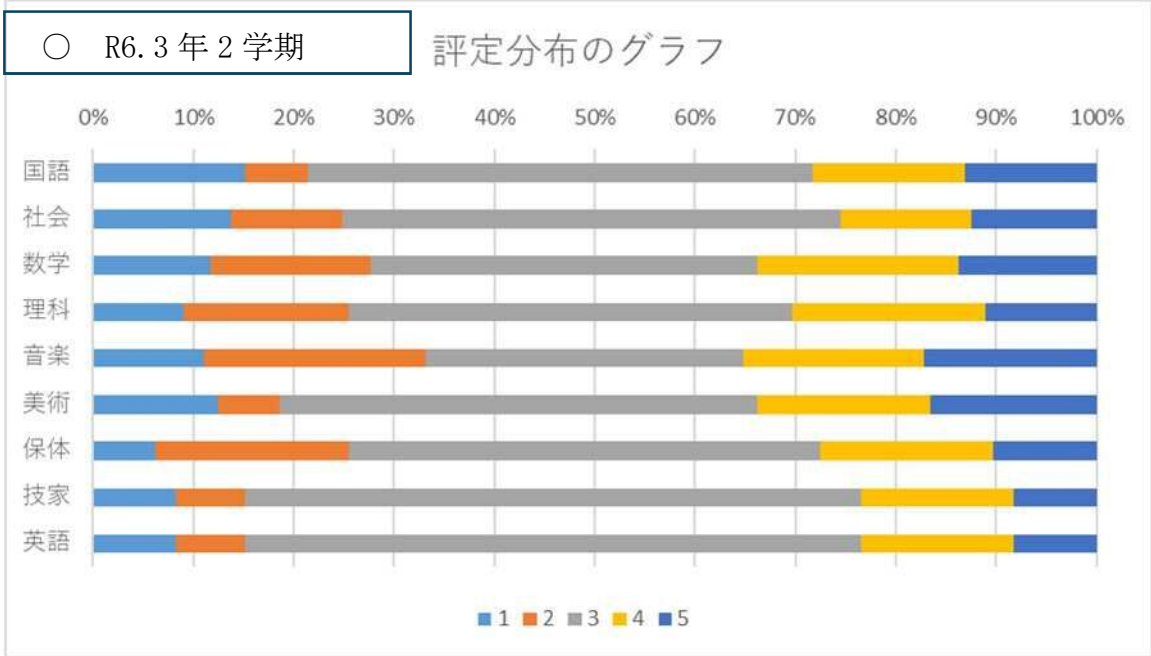


	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.1
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.2
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.0

○　口頭で周知した内容

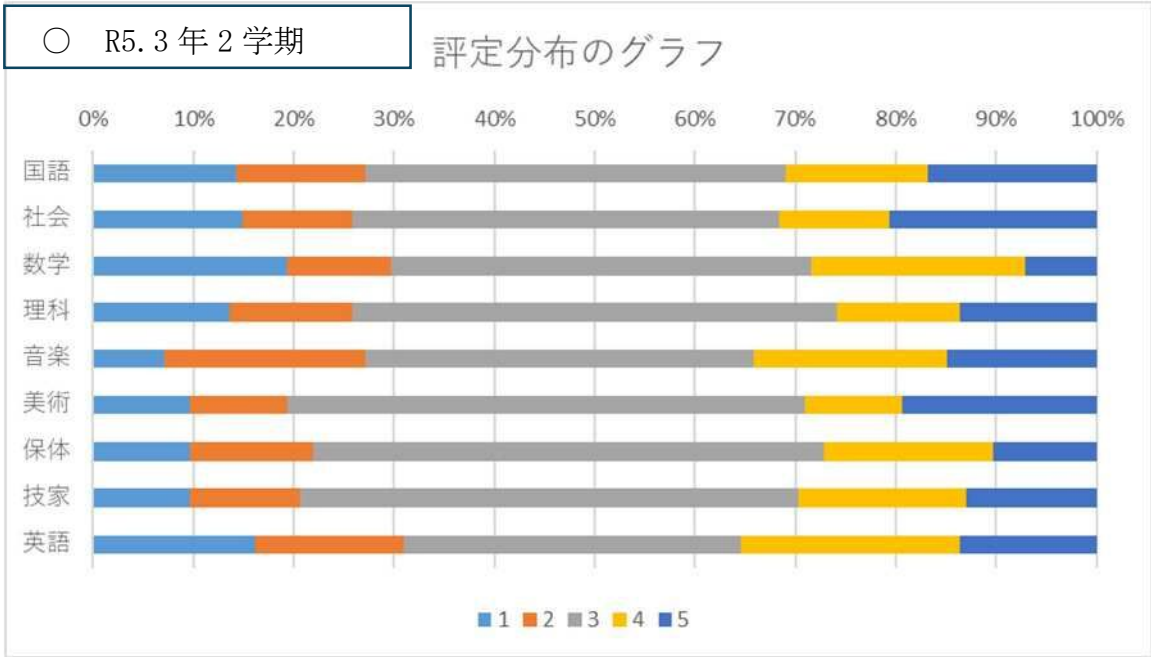
提案時に、ＮＲＴや全国学調の結果も参考にするように依頼した。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.0
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.1
英語	3.1

○　R5.3 年 2 学期



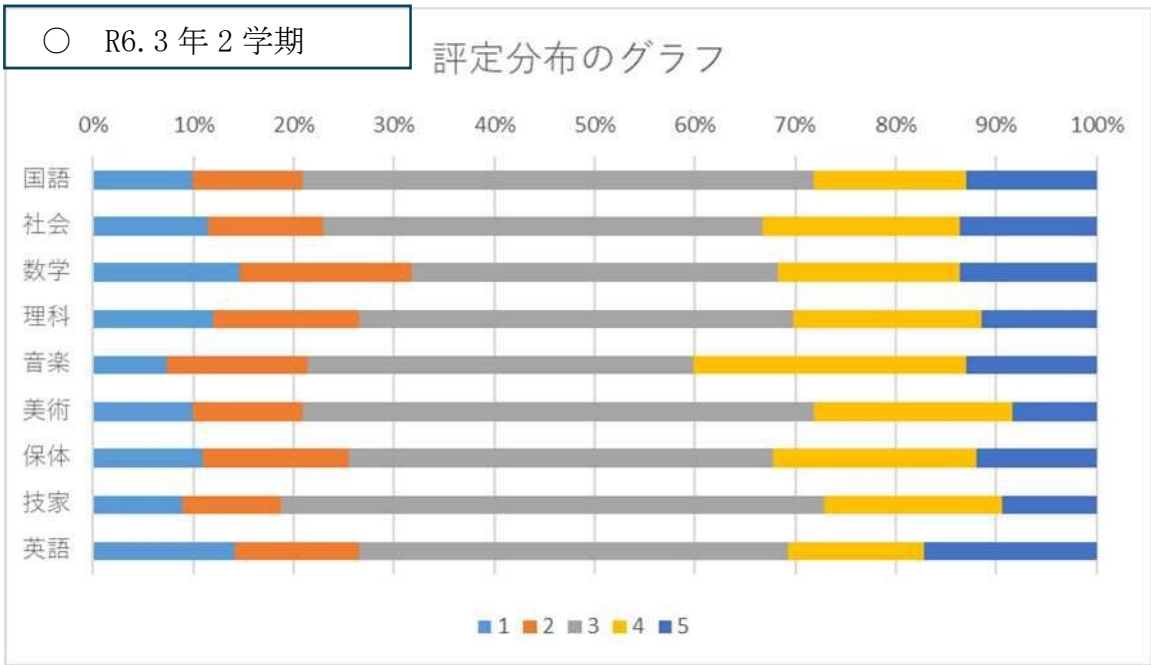
	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	2.9
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.1
英語	3.0

○　文書の記載

我々教員は、評価の結果によって、指導方法を改善していかなければならない。このため、極端な評定の偏りがあったり、評価の数の逆転現象があったりすると、我々の教員としての姿勢が問われる。絶対評価で評価は行うが、評価規準達成のために以下の資料を参考にしていただきたい。

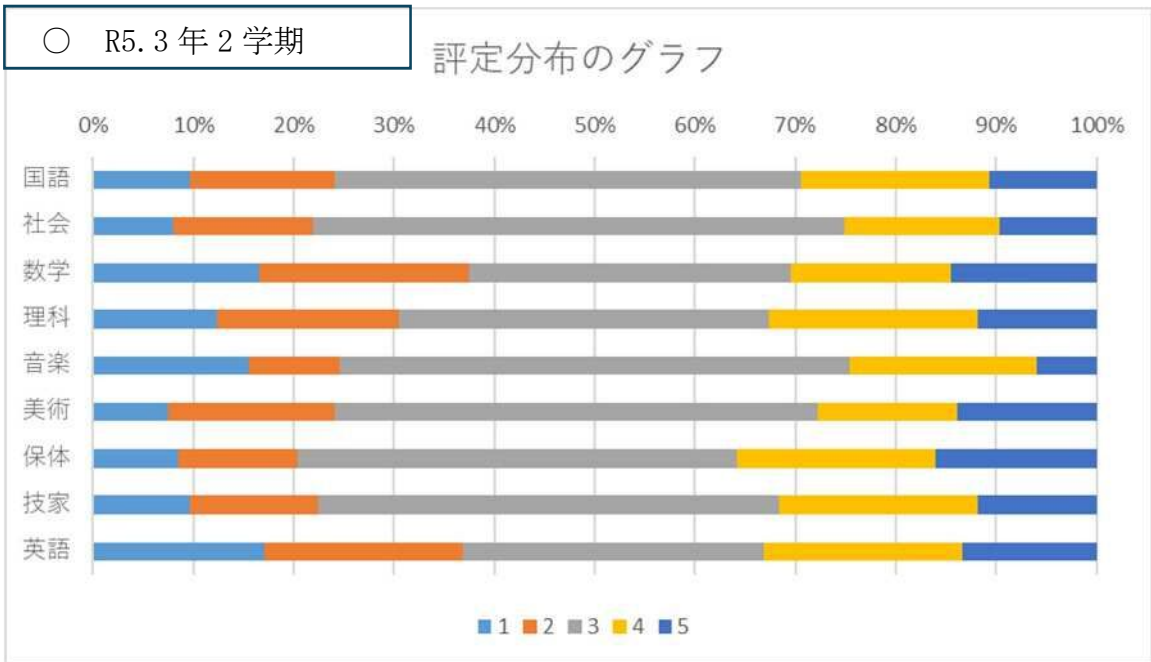
<参考>	１年（人）	２年（人）	３年（人）
５　１０％	１９	１８	２１
４　２０％	３９	３７	４１
３　４０％	７８	７４	８３
２　２０％	３９	３７	４１
１　１０％	１９	１８	２１
＊四捨五入してあるため、足しても、生徒数と一致しないことがある。			

○　R6.3 年 2 学期



平均値
3.1
3.1
3.0
3.0
3.2
3.1
3.1
3.1
3.1

○　R5.3 年 2 学期



平均値
3.1
3.0
2.9
3.0
2.9
3.1
3.2
3.1
2.9

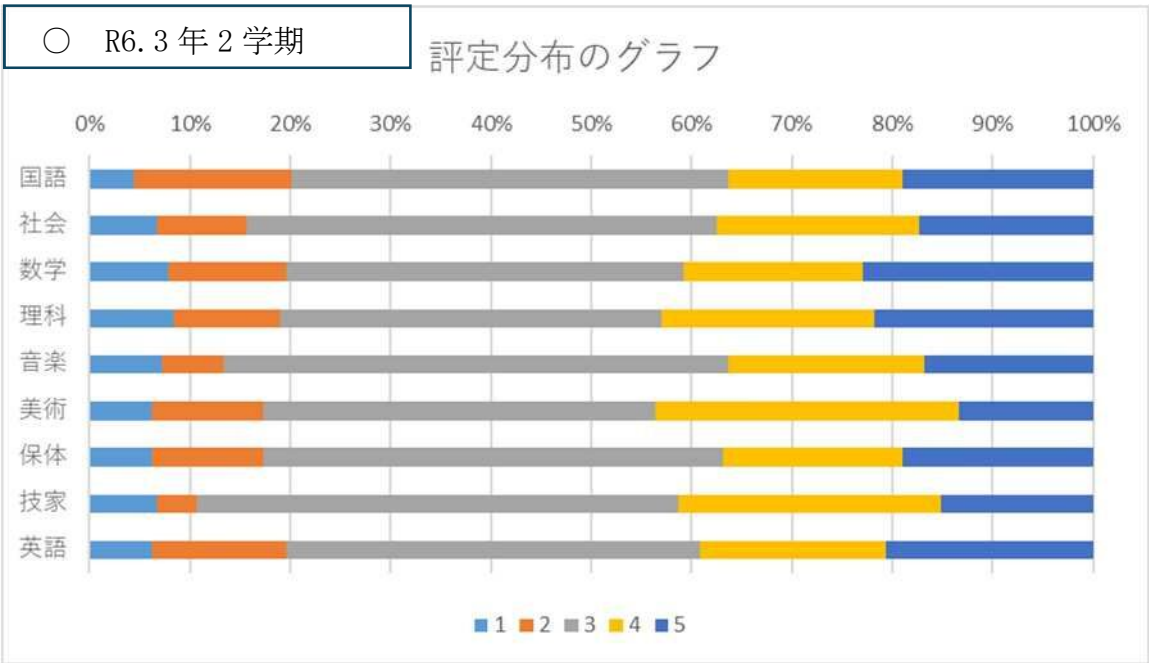
○　文書の記載

評定の信頼性

※　より多くののデータを蓄積して総合的に評価した結果は信頼性が高い。

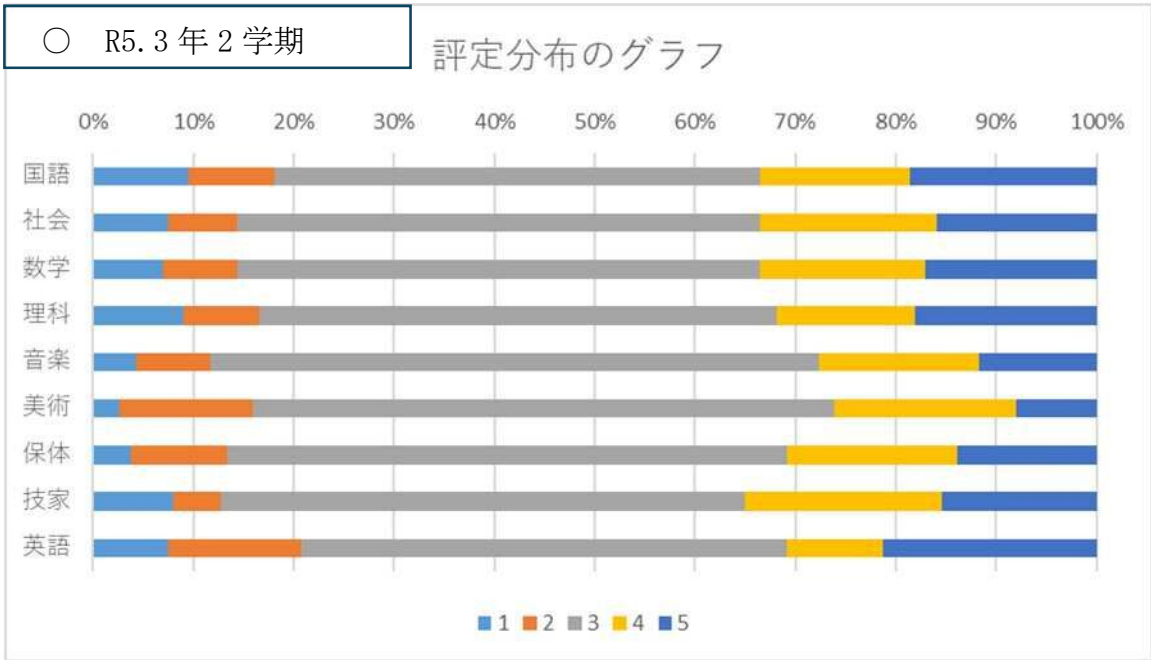
評定の信頼性を担保するため、正規分布から大きく外れる状態にならないように留意する必要がある

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.3
社会	3.3
数学	3.4
理科	3.4
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.4
英語	3.3

○　R5.3 年 2 学期

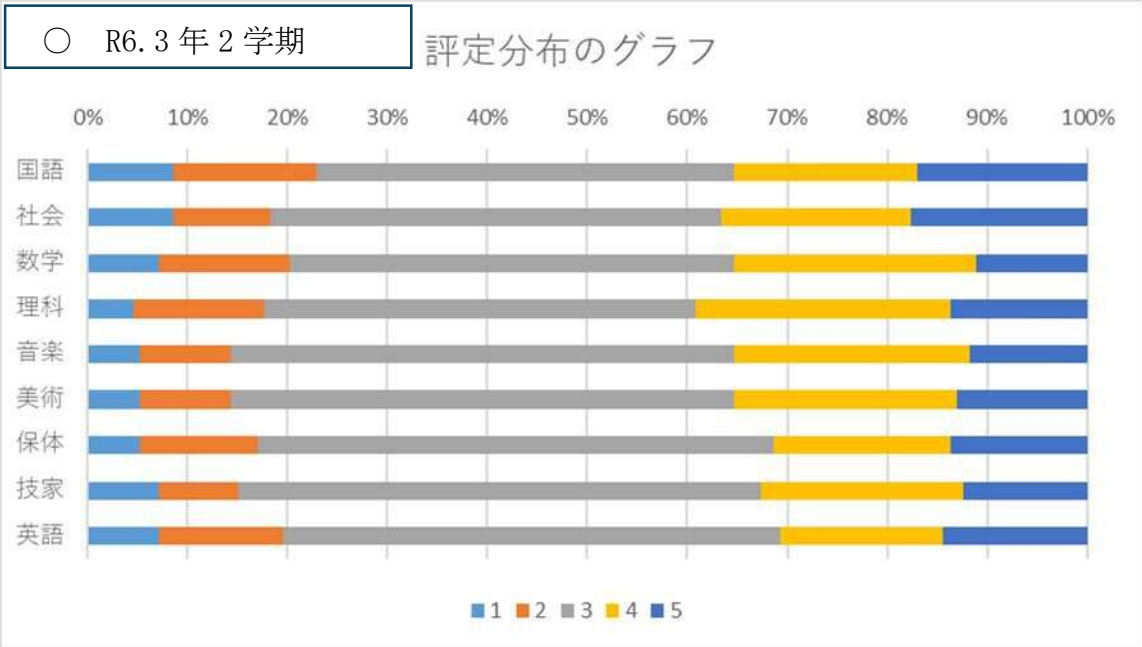


	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.2
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.2

○　文書の記載

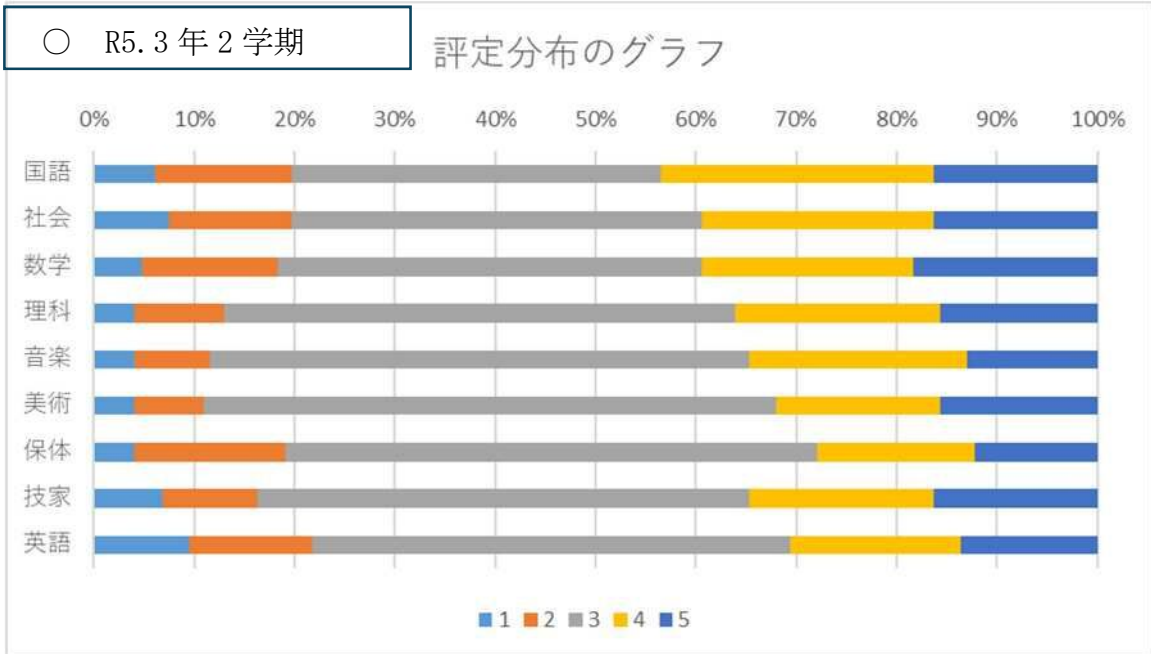
観点別評価の組み合わせ	評　定	目　安
AAA　(AAB)	5	1割程度
AAB　(ABB)　(AAA)	4	2割程度
BBB　(AAC)　(ABC)　BBC　ABB　(ACC)	3	4割程度
BCC　(ACC)　(CCC)	2	2割程度
CCC　(CCB)	1	1割程度

○　R6.3年2学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.2
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.2

○　R5.3年2学期

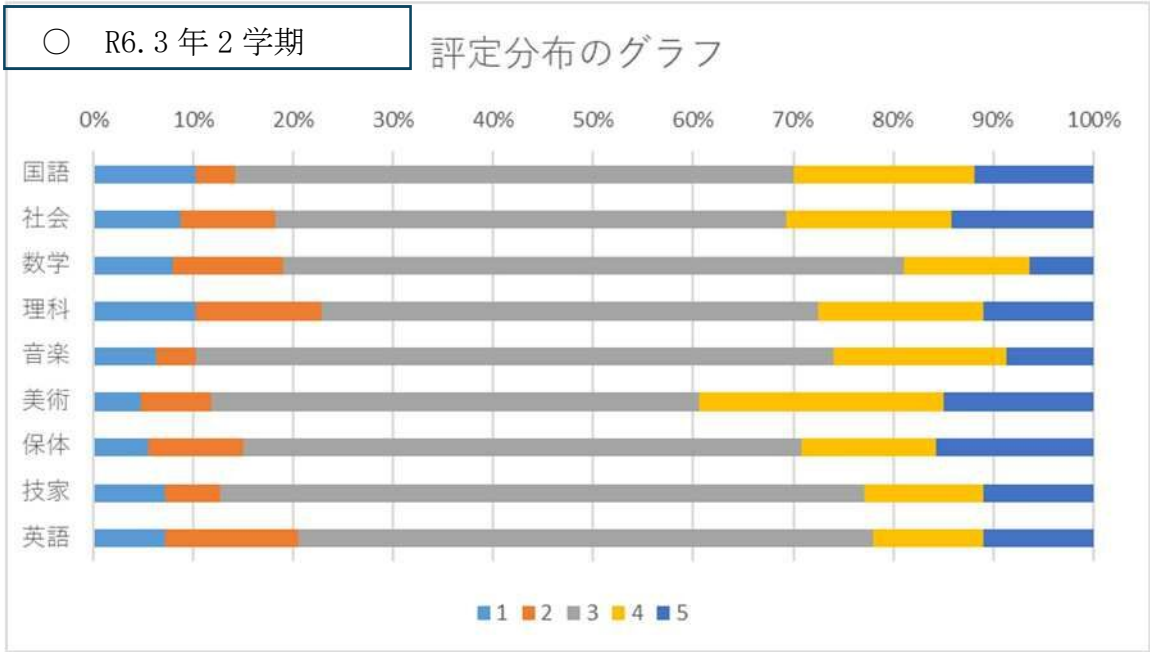


	平均値
国語	3.3
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.3
英語	3.1

○　口頭で周知した内容

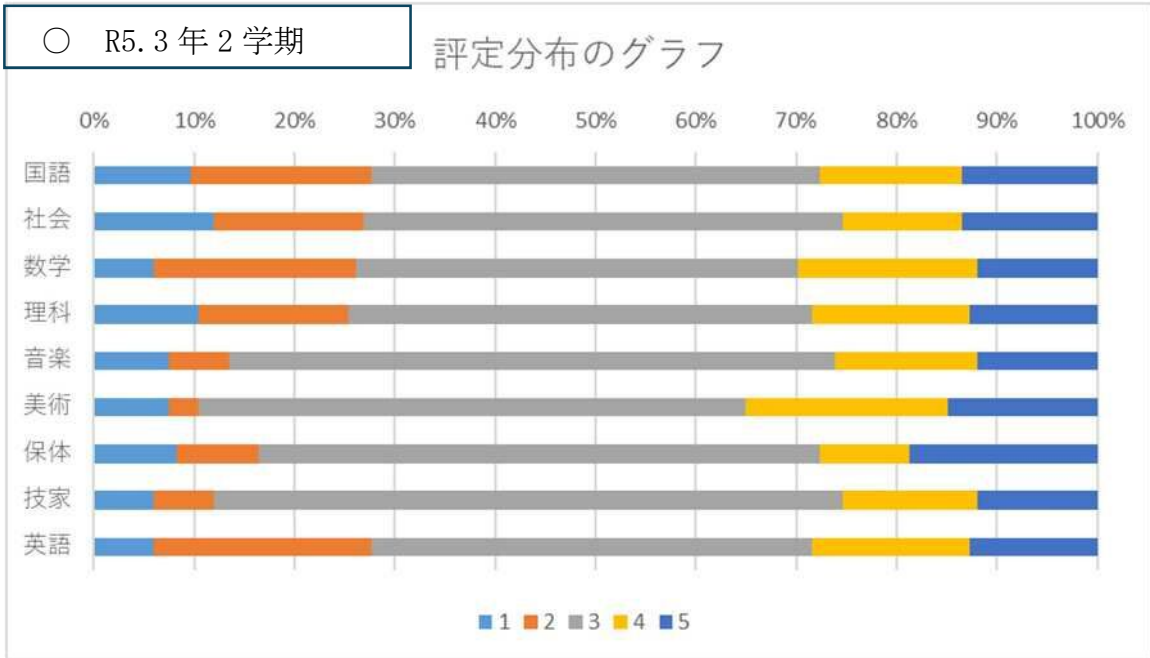
評定の平均値を示しているのではなく、学力テスト（NRT）の結果のグラフも参考にして学習評価について取り組んでくださいと依頼した。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.0
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.4
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.1

○　R5.3 年 2 学期



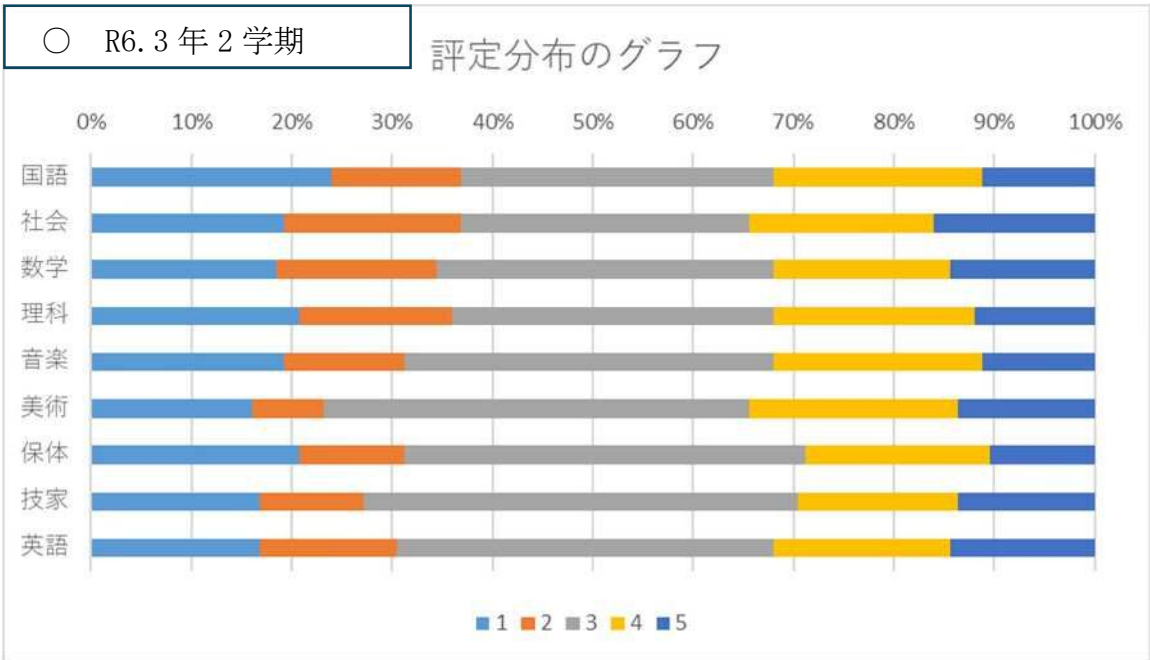
	平均値
国語	3.0
社会	3.0
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.1

○　文書の記載

《資料１》　評定数のめやす

評定	1	2	3	4	5	
割合	**30+5%まで**			**30±5%**		
1年	45名程度まで			29～45名程度		129名
2年	37名程度まで			27～37名程度		106名
3年	43名程度まで			31～43名程度		125名

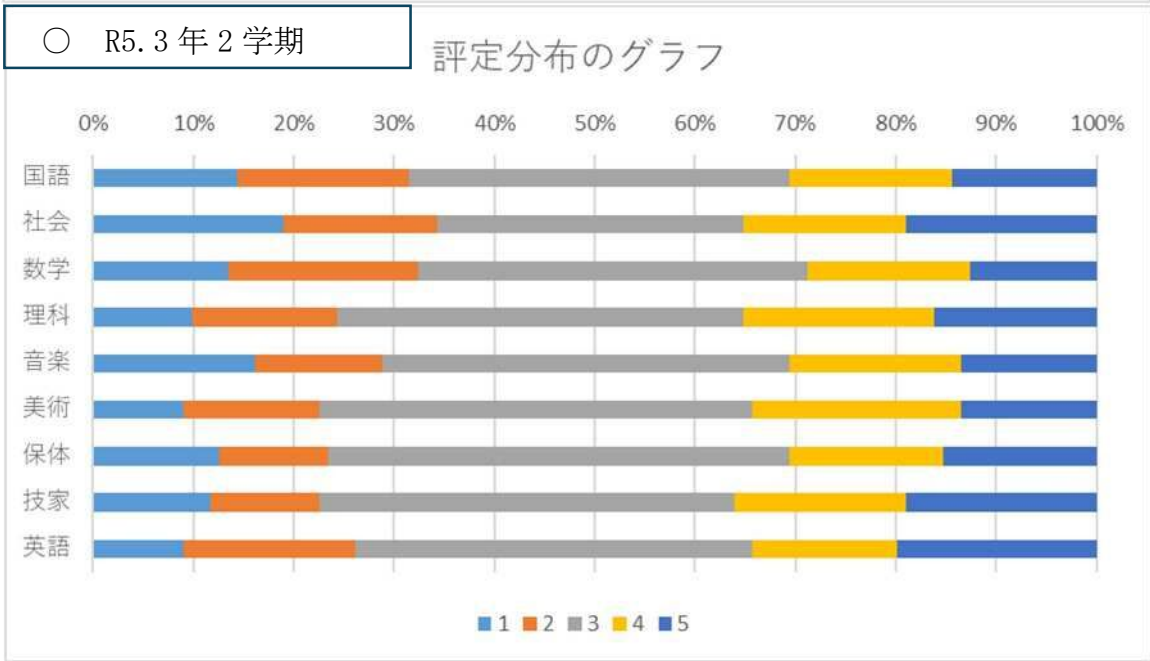
○　R6.3 年 2 学期



平均値

国語	2.8
社会	2.9
数学	2.9
理科	2.9
音楽	2.9
美術	3.1
保体	2.9
技家	3.0
英語	3.0

○　R5.3 年 2 学期



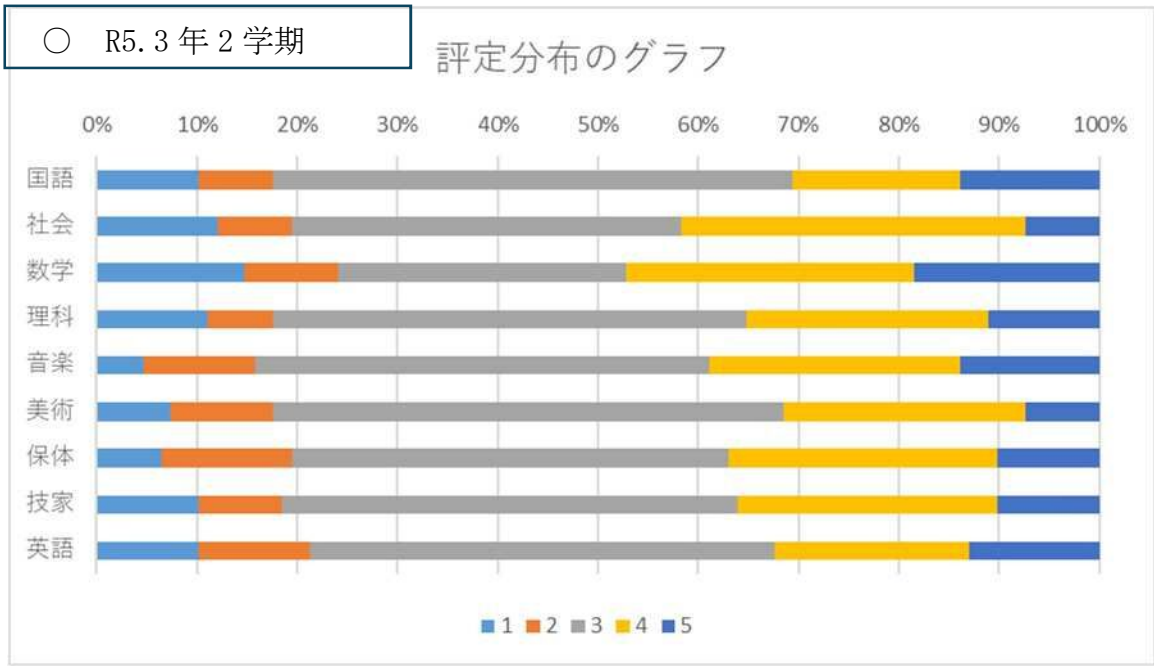
平均値

国語	3.0
社会	3.0
数学	3.0
理科	3.2
音楽	3.0
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.2

○　文書の記載

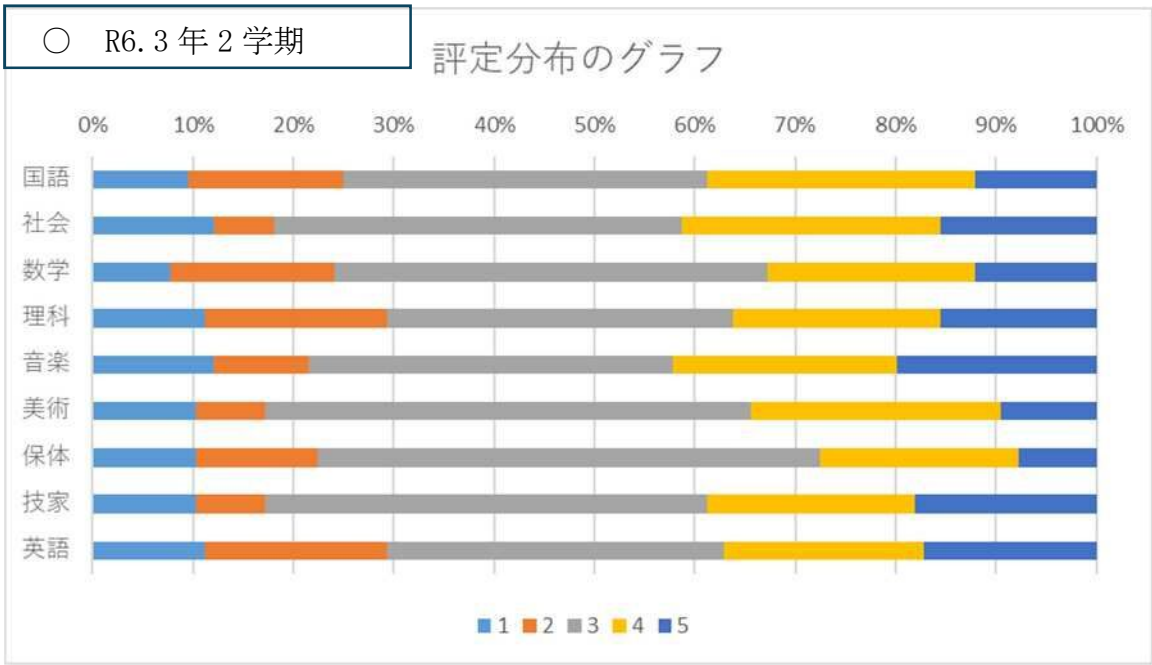
・「４」「５」合わせて30%程度をめやすとする。

○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.3
理科	3.2
音楽	3.3
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.1

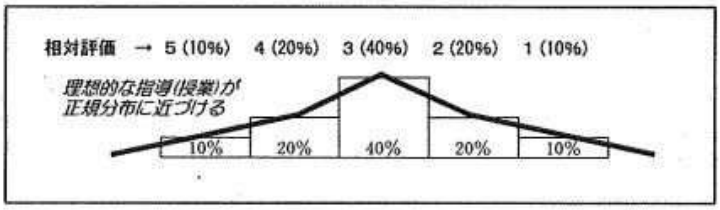
○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.3
美術	3.2
保体	3.0
技家	3.3
英語	3.1

○　文書の記載

(3)　「相対評価」を意識した「絶対評価」

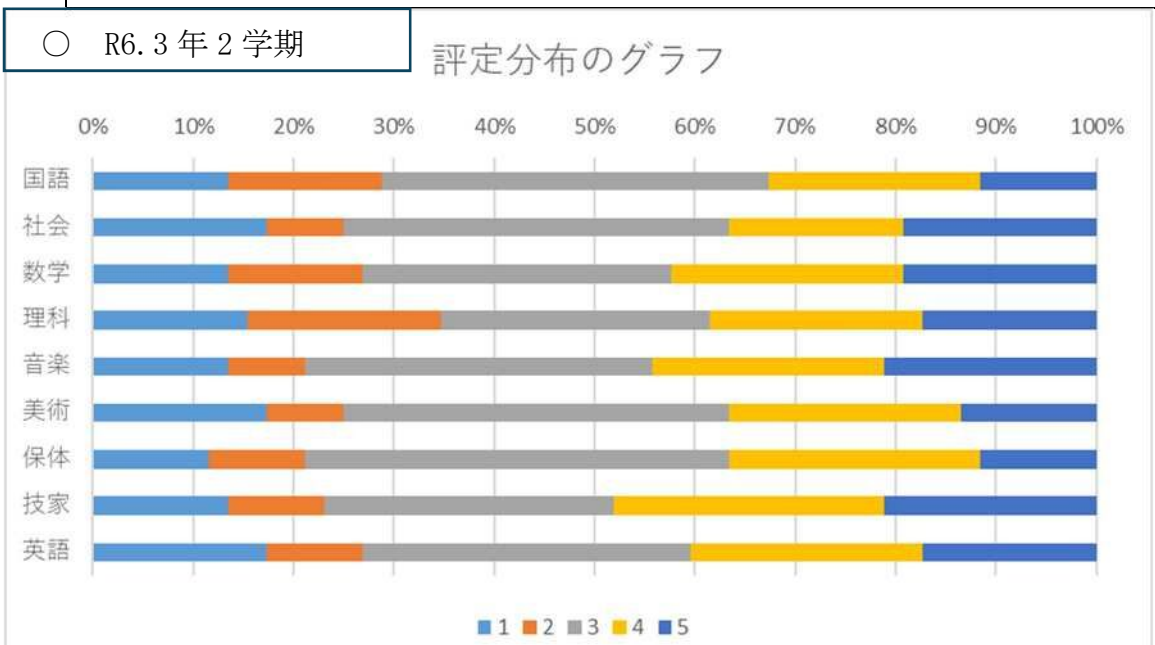


(2)　評　　定

絶対評価　……　目標に準拠した評価（各教科の単元・課題目標）

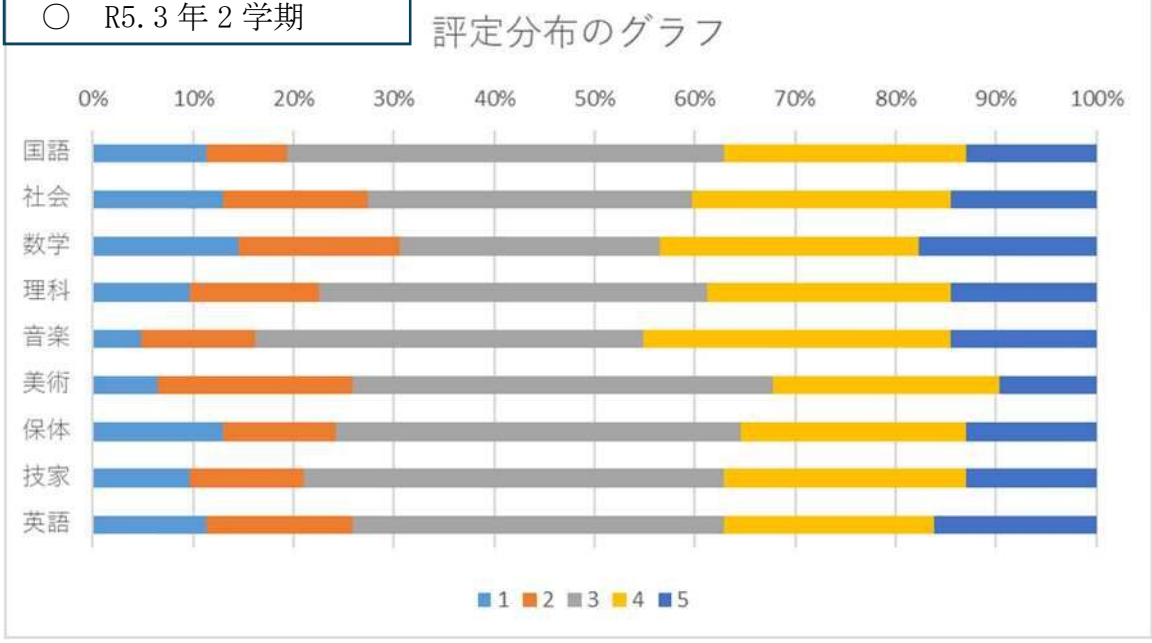
相対評価に順ずる　　境目を調整

○　R6.3 年 2 学期



平均値
3.0
3.1
3.2
3.1
3.3
3.1
3.2
3.3
3.1

○　R5.3 年 2 学期



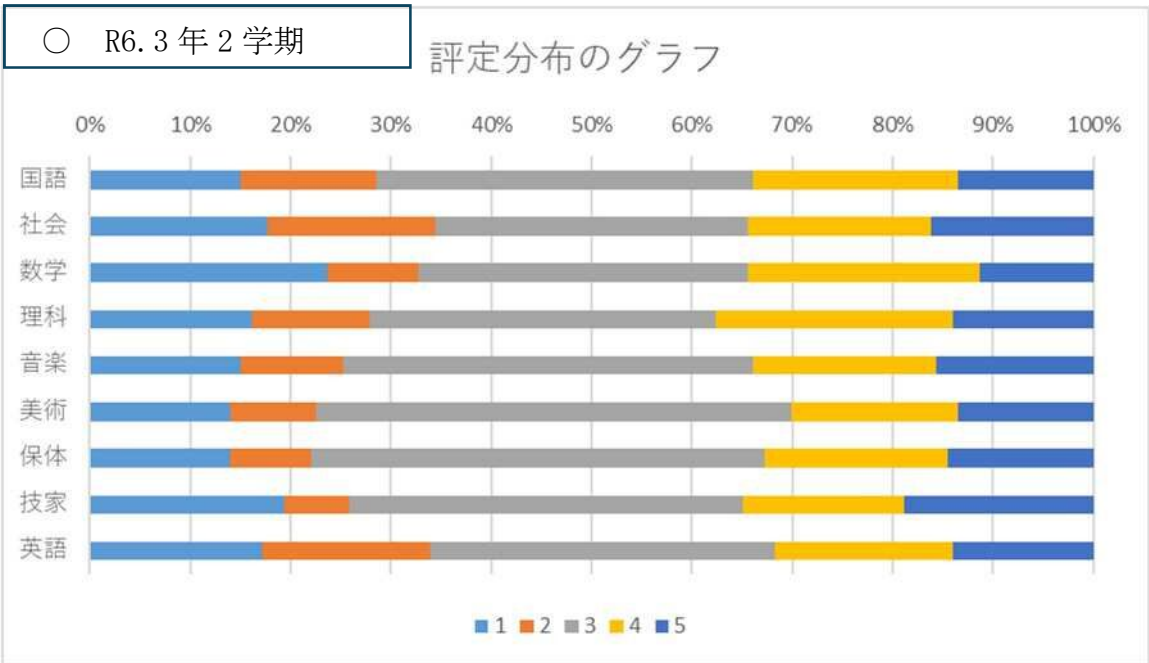
平均値
3.2
3.1
3.2
3.2
3.4
3.1
3.1
3.2
3.2

（６）評定の平均値（１３校）

○　口頭で周知した内容

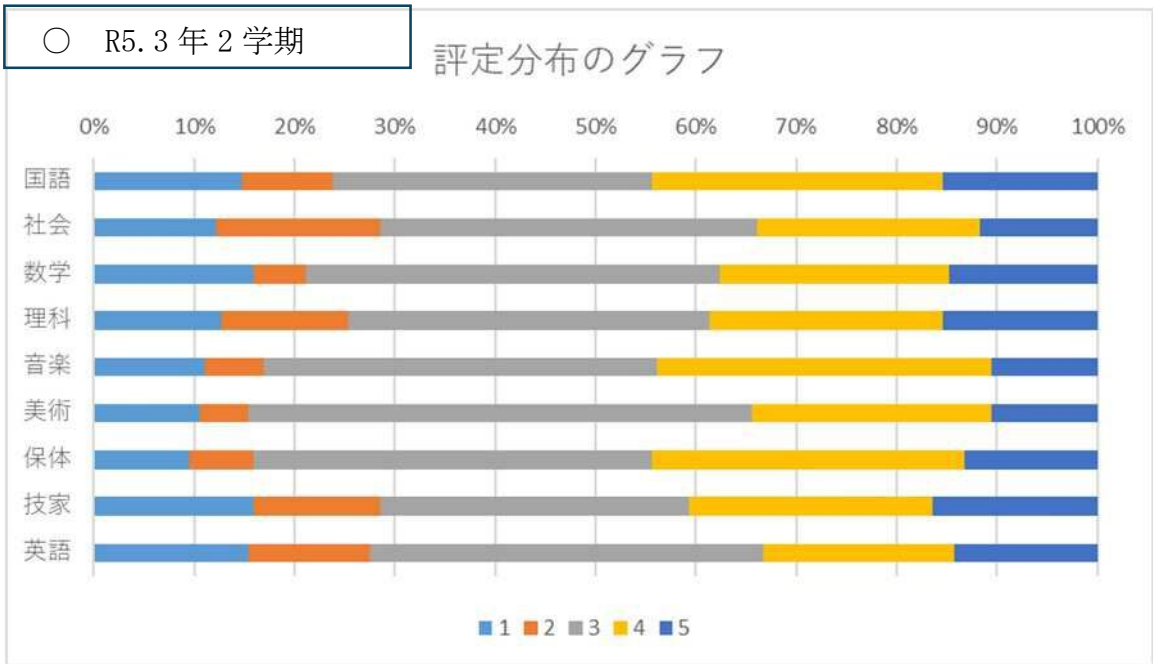
各教科の評定が出たところで、教務主任がその平均値を教科担任に示し、評価規準が適正かどうか確認してもらうようにした。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.0
数学	2.9
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.1
技家	3.1
英語	2.9

○　R5.3 年 2 学期

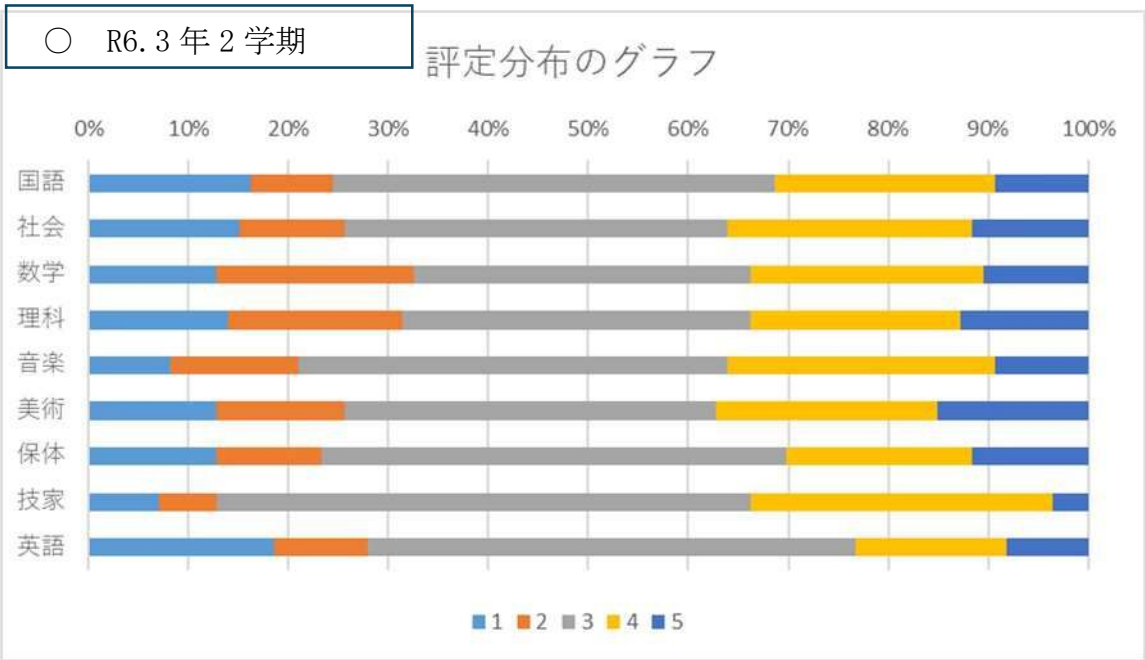


	平均値
国語	3.2
社会	3.0
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.3
美術	3.2
保体	3.3
技家	3.1
英語	3.0

○　文書の記載

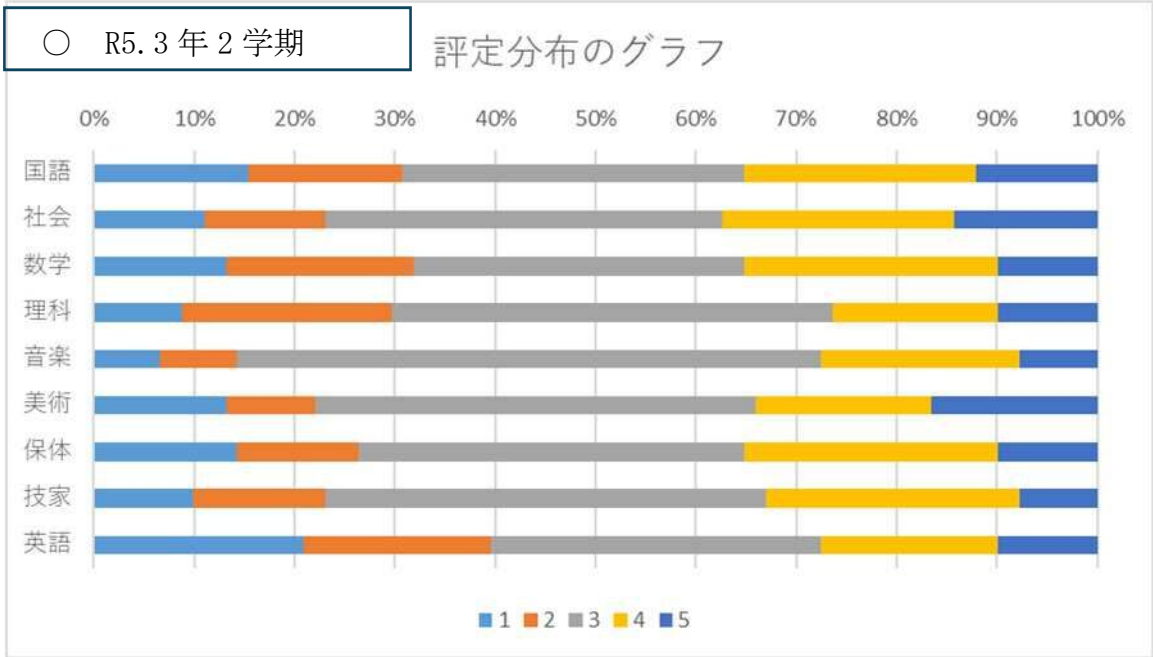
※　「評価・評定について」を踏まえて評価をお願いします。学年の評定平均や分布は、信頼性を担保できる範囲（評定平均おおよそ 2.8～3.2）となるようにしてください。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.1
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.1
技家	3.2
英語	2.8

○　R5.3 年 2 学期

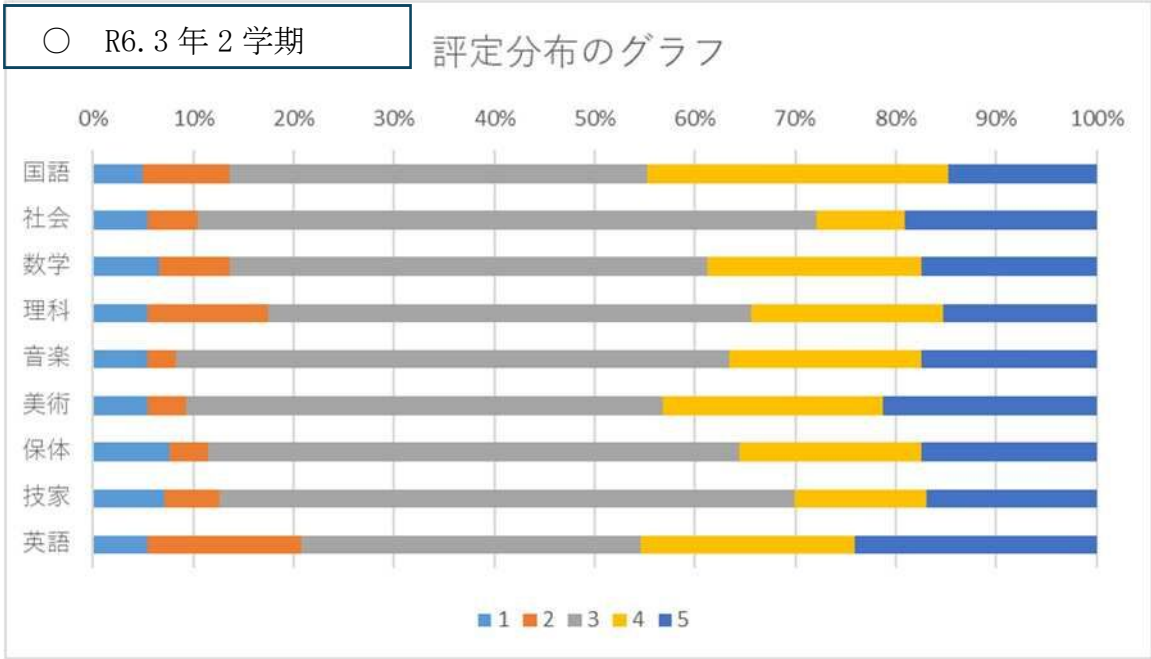


	平均値
国語	3.0
社会	3.2
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.0
技家	3.1
英語	2.8

○　文書の記載

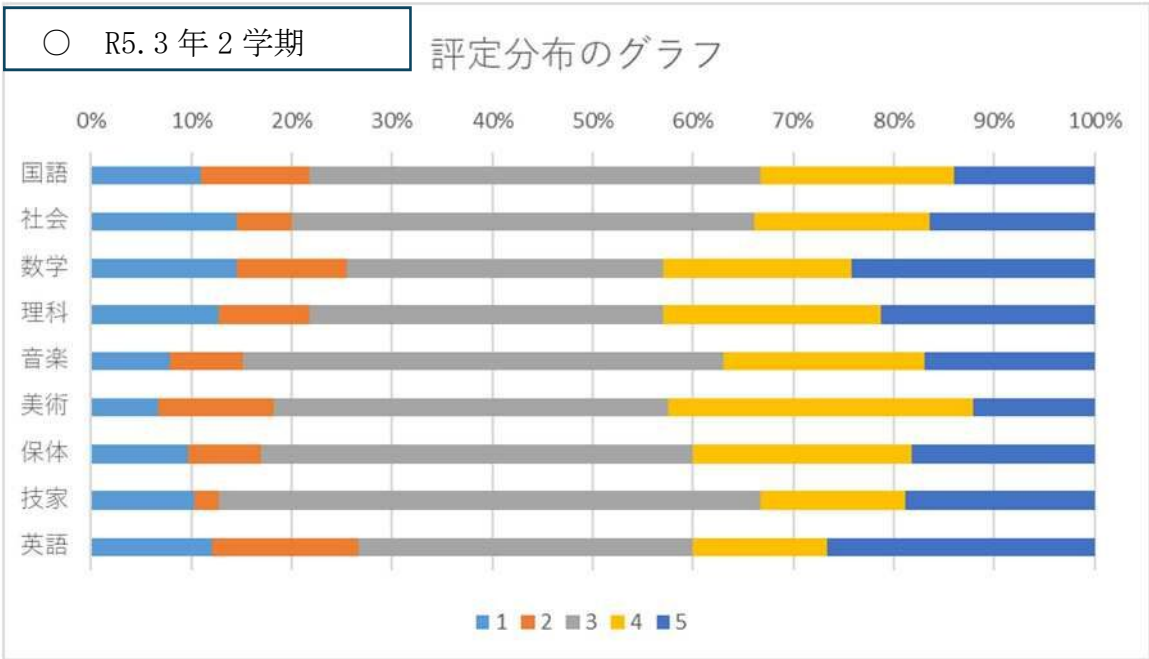
> ④　平均評定は3.1～3.4を目安とする。目安を下回る場合や上回る場合は教務に事前に相談をする。なお、目安を下回る場合においては3.0以下、上回る場合においては3.5以上にならないようにする。

○　R6.3年2学期



	平均値
国語	3.4
社会	3.3
数学	3.4
理科	3.3
音楽	3.4
美術	3.5
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.4

○　R5.3年2学期

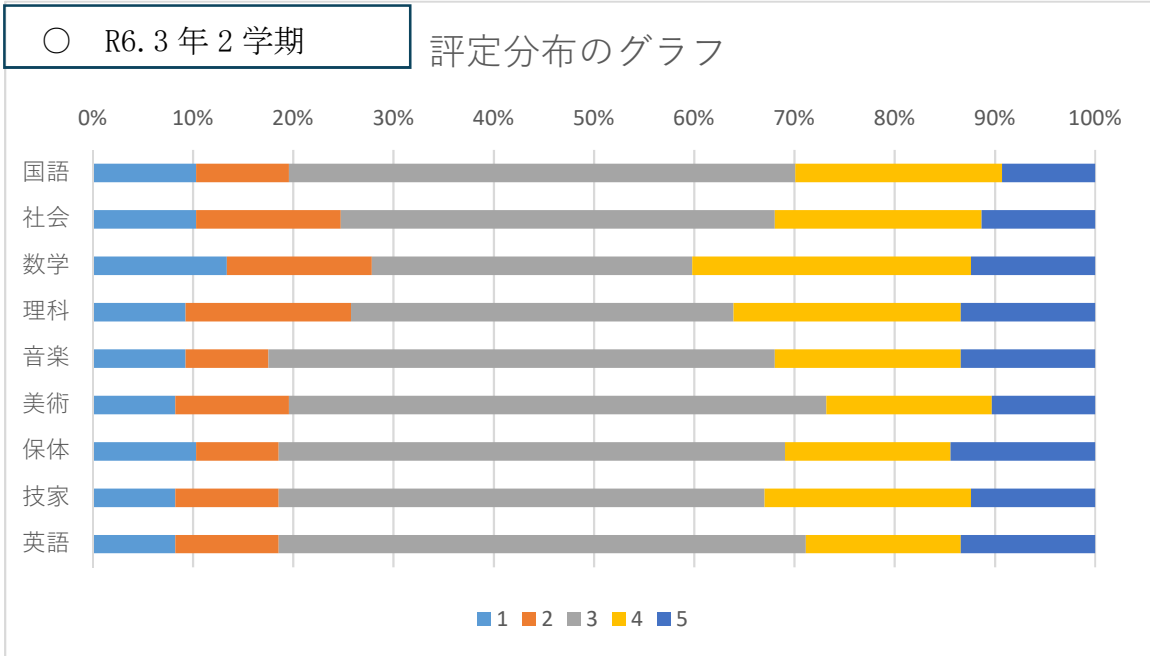


	平均値
国語	3.1
社会	3.2
数学	3.3
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.3

○　文書の記載

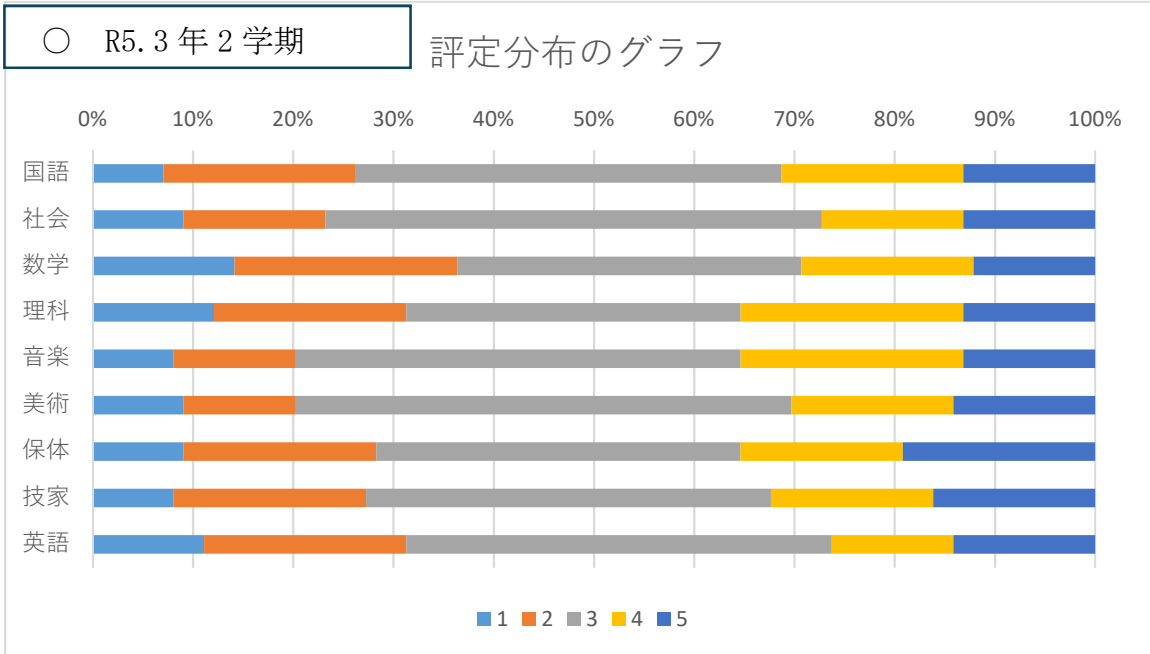
※　人数の比率は設けないが、評価の信頼性と妥当性を高めていくために、評価規準の精査等を継続させていく。
※　各学年・各教科の評定平均は、本校生徒の実態を踏まえると、2.8～3.2の範囲が望ましい。

○　R6.3年2学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.2

○　R5.3年2学期

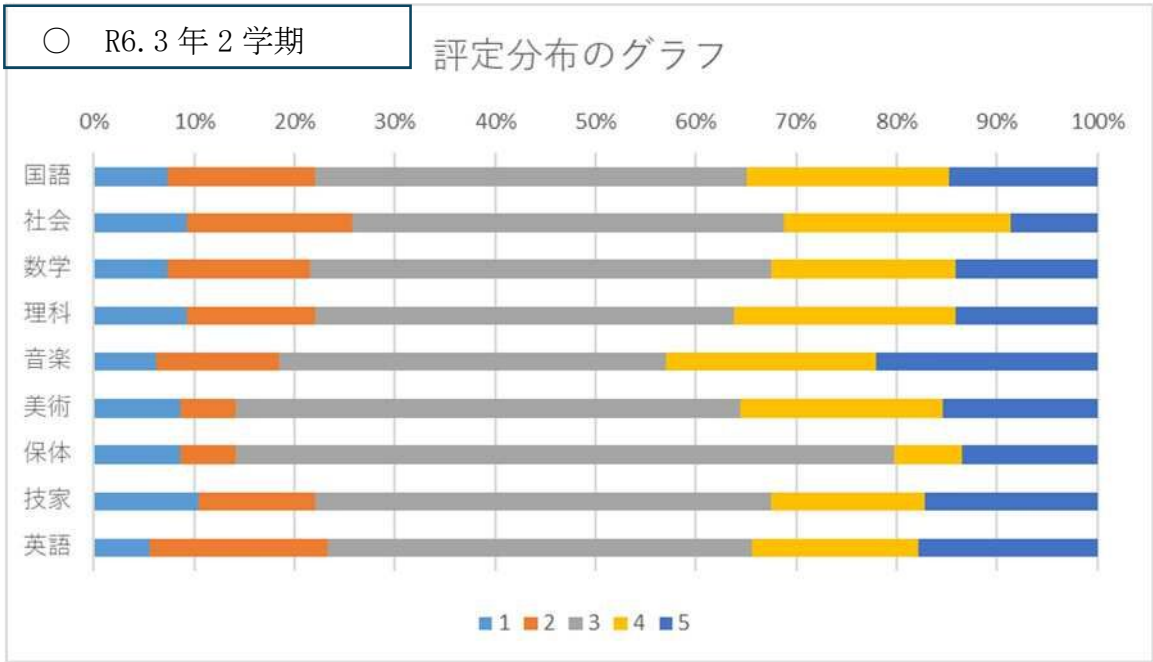


	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	2.9
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.2
保体	3.2
技家	3.1
英語	3.0

○　口頭で周知した内容

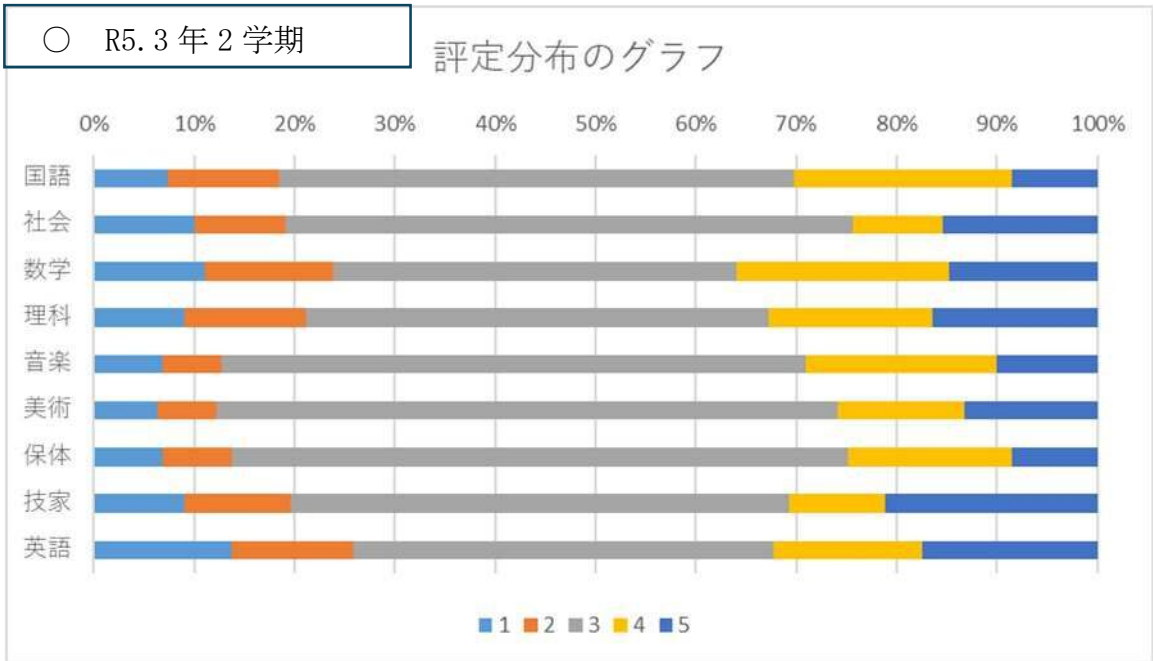
評価規準が適正であると、極端に評定平均が高くなったり、低くなったりすることは考えにくいです。
評定平均2.8～3.2程度を目安に先生方の付けた評価を一度、確認していただければと思います。

○　R6.3年2学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.0
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.4
美術	3.3
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.2

○　R5.3年2学期

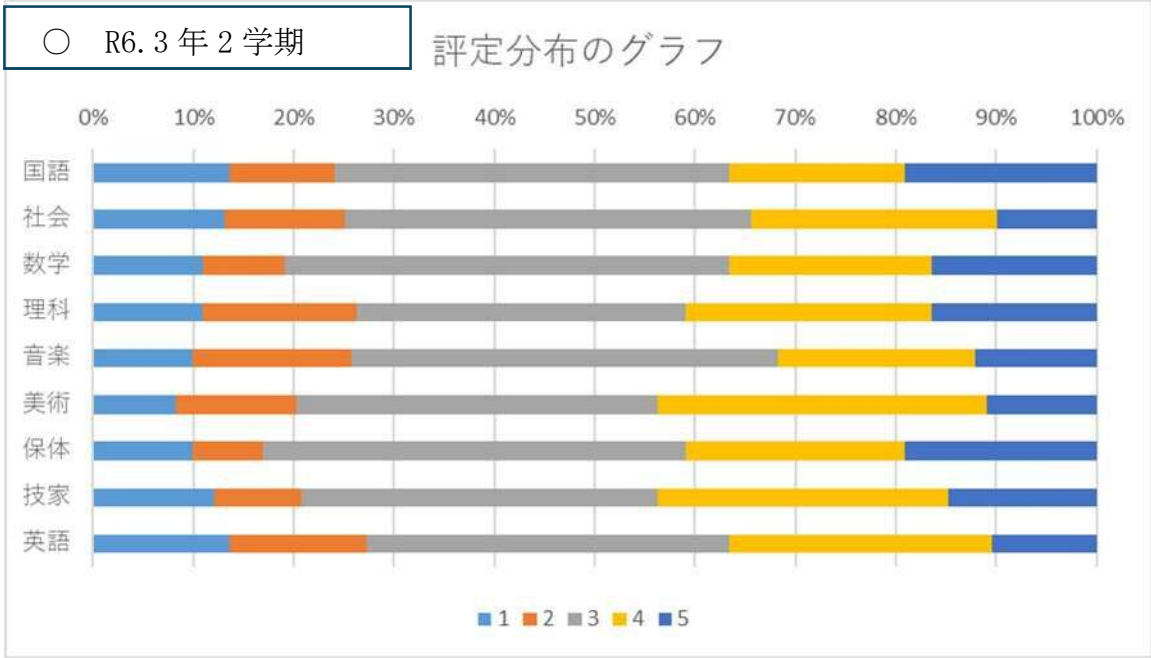


	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.2
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.1

○　口頭で周知した内容

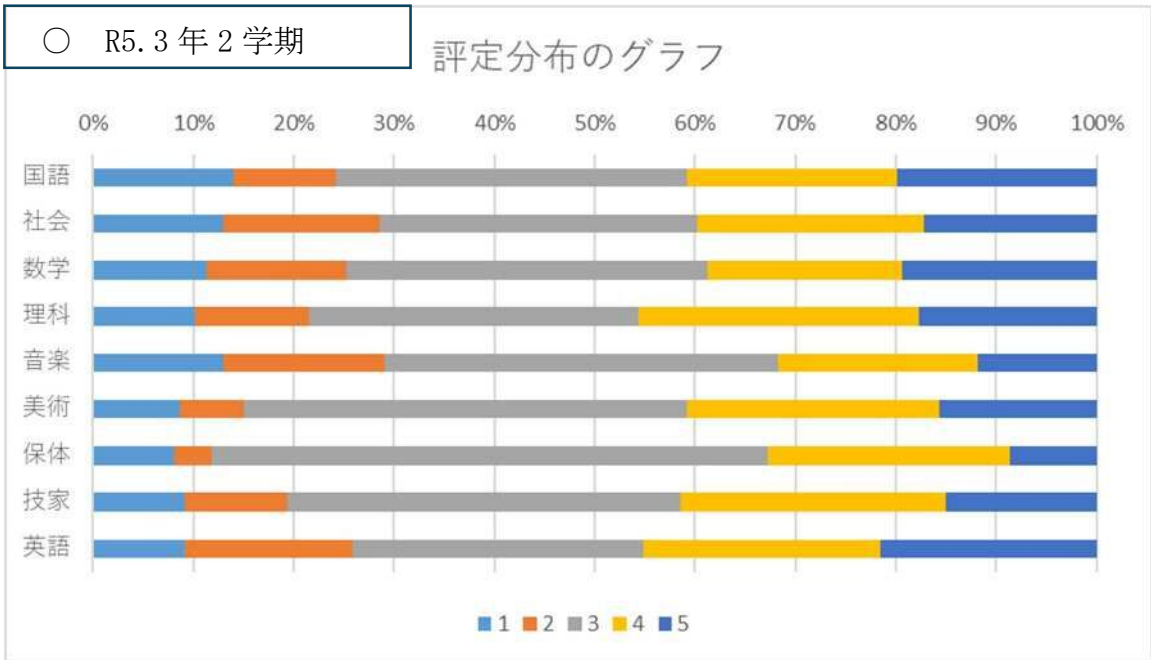
各教科担当に、前年の評定平均値を配布して参考にしてもらえるようにした。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.2
社会	3.1
数学	3.2
理科	3.2
音楽	3.1
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.1

○　R5.3 年 2 学期

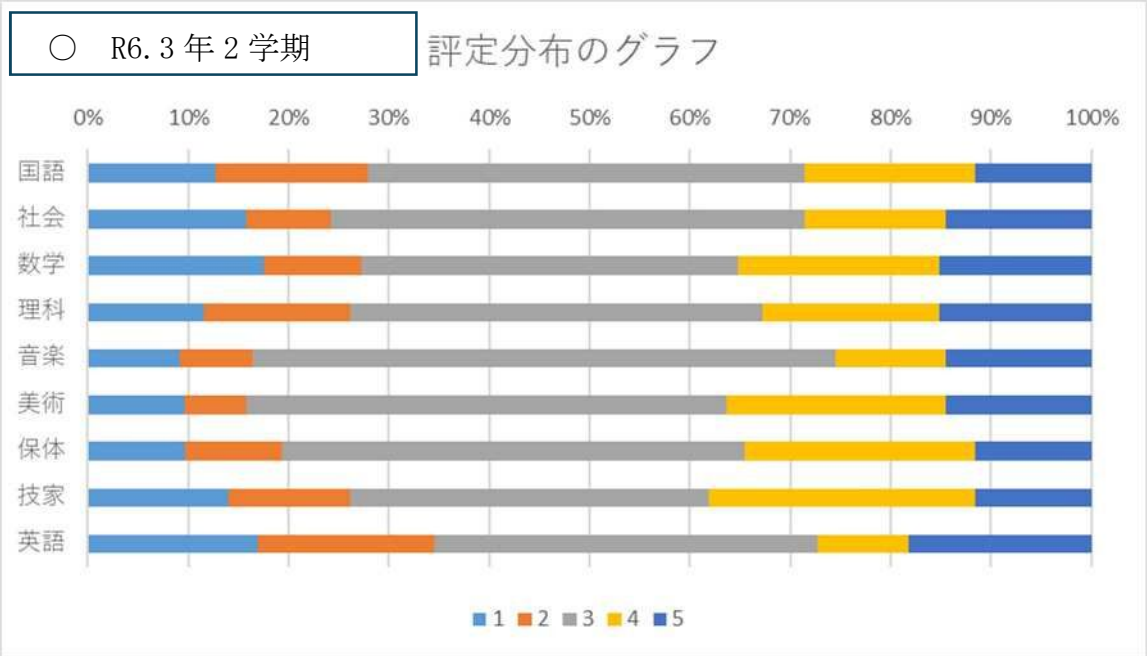


	平均値
国語	3.2
社会	3.2
数学	3.2
理科	3.3
音楽	3.0
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.3
英語	3.3

○　文書の記載

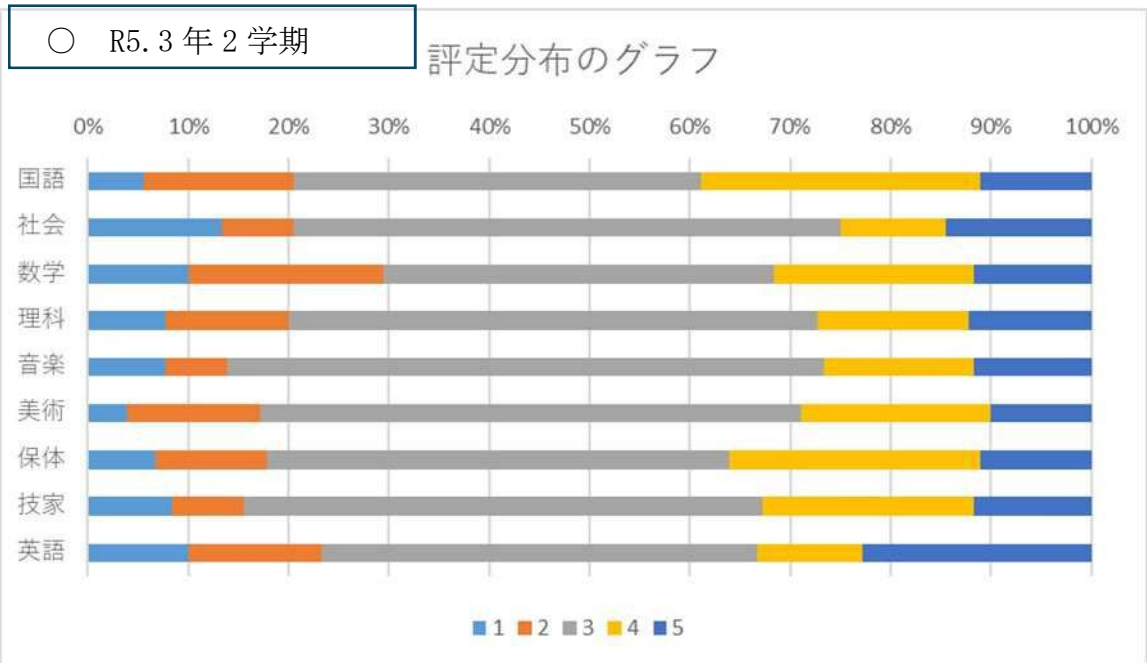
※　職員会議や現職教育の内容を踏まえて、評価してください。学年の評定平均や分布は、信頼性を担保できる範囲（例：評定平均2.8～3.2）となるようにしてください。

○　R6.3年2学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.0
数学	3.1
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.1
英語	2.9

○　R5.3年2学期

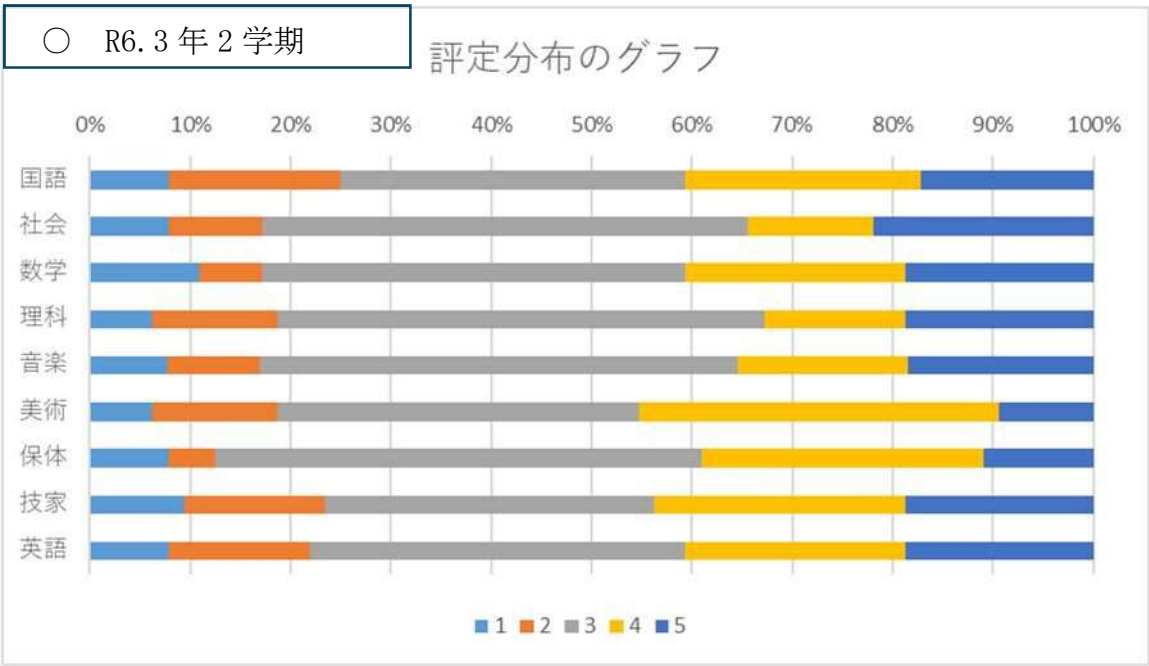


	平均値
国語	3.2
社会	3.1
数学	3.0
理科	3.1
音楽	3.2
美術	3.2
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.2

○　口頭で周知した内容

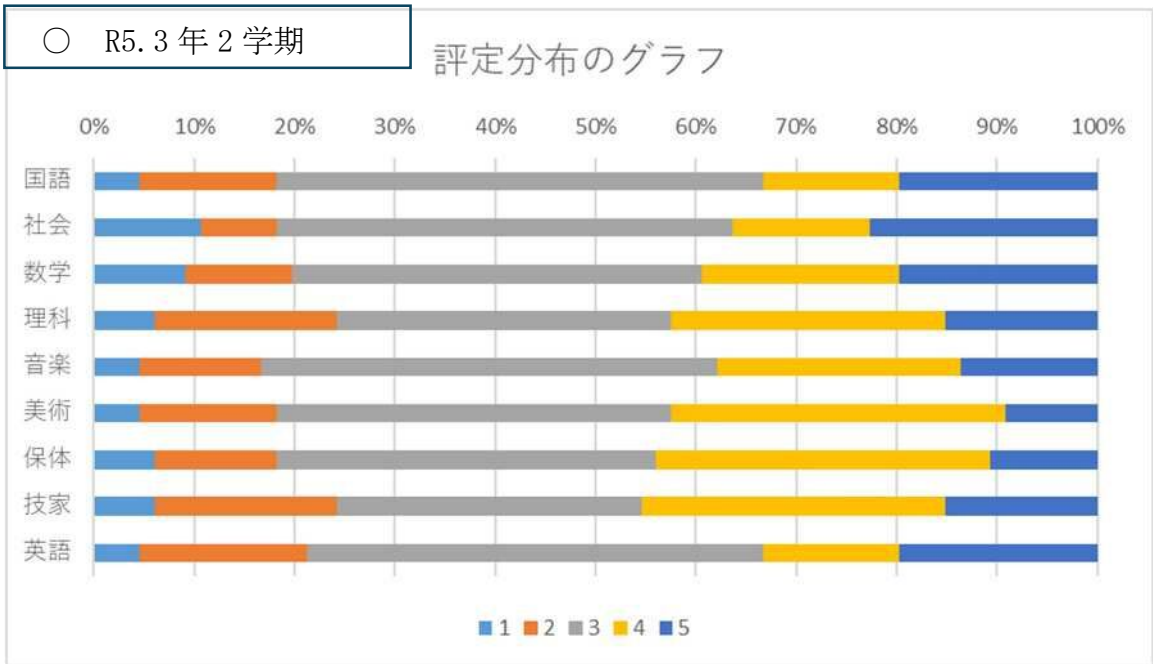
適切な評価規準でつけていれば、評定の平均値が３．３くらいまでになる。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.3
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.3

○　R5.3 年 2 学期

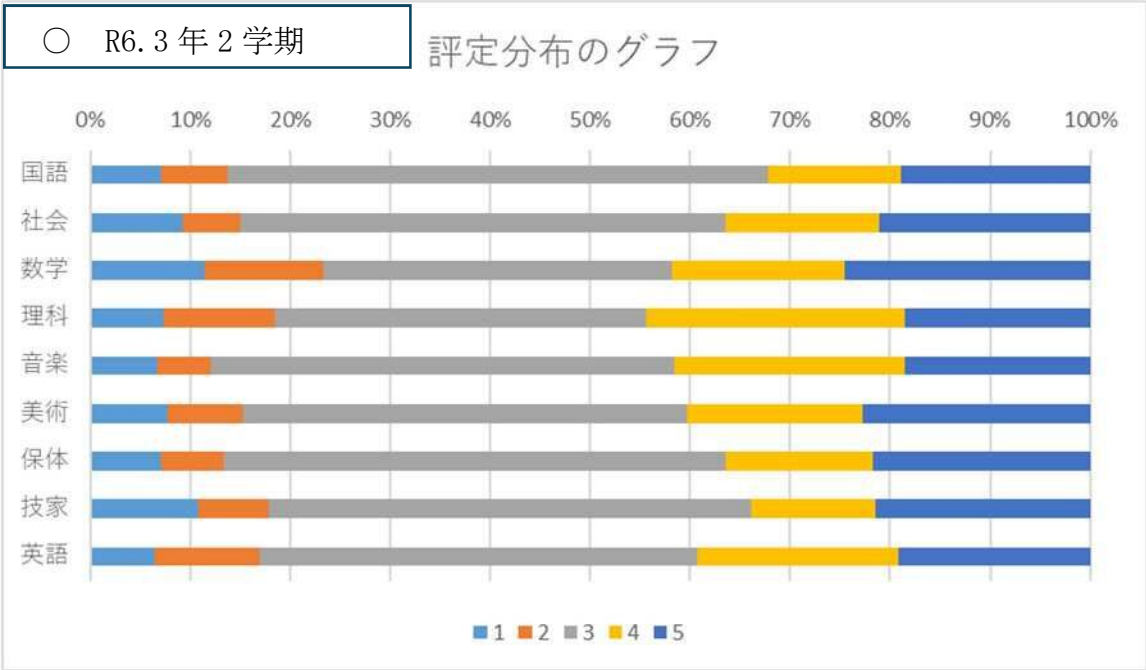


	平均値
国語	3.3
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.3

○　口頭で周知した内容

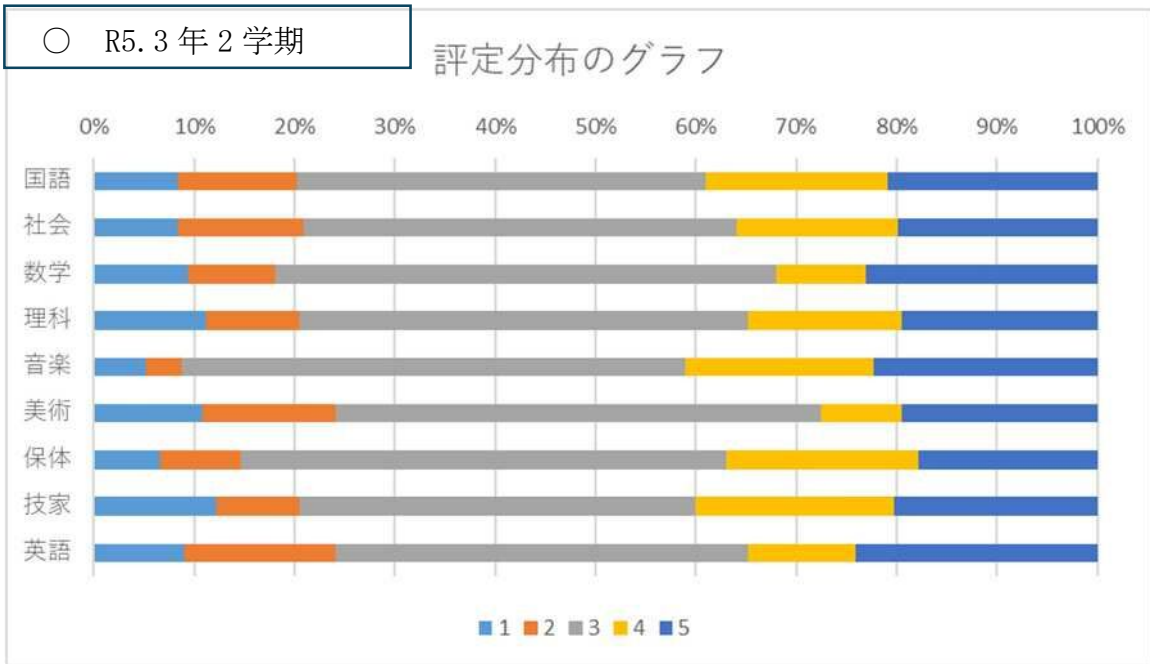
4 月の NRT の結果から、学力状況等を確認し、自身がつけた評定と比較することで実態に合った評定かを見直すこともできる。NRT の結果を見ると、決して低くない。3.2 くらいにはなるはず

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.3
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.4
音楽	3.4
美術	3.4
保体	3.4
技家	3.3
英語	3.4

○　R5.3 年 2 学期

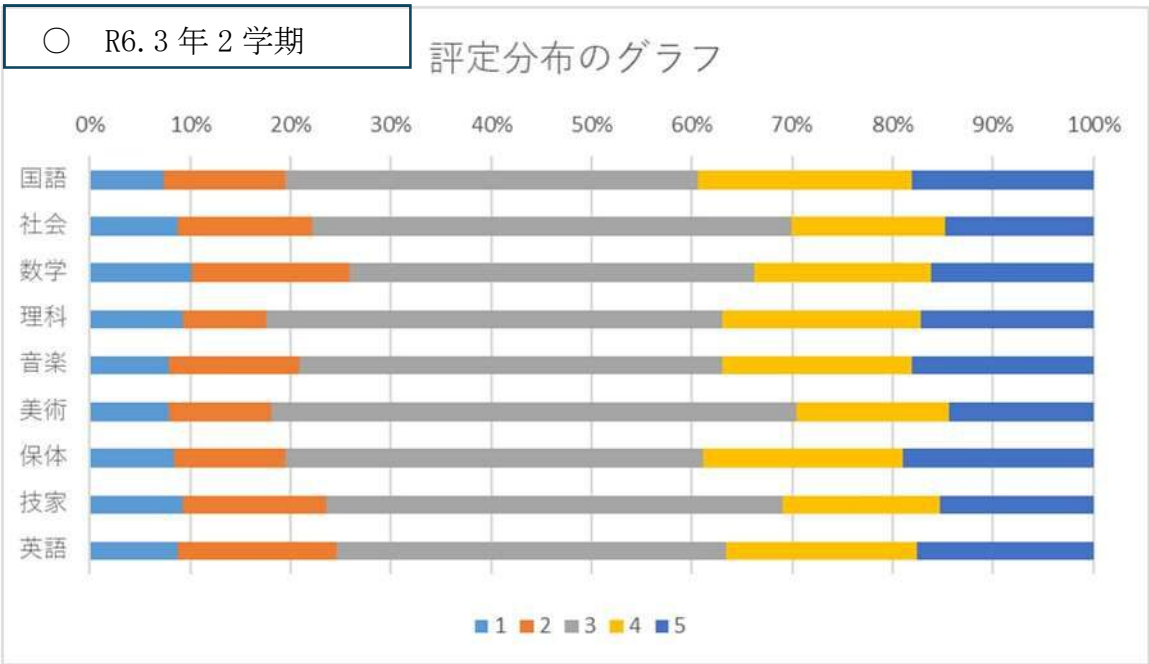


	平均値
国語	3.3
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.2
音楽	3.5
美術	3.1
保体	3.3
技家	3.3
英語	3.3

○　口頭で周知した内容

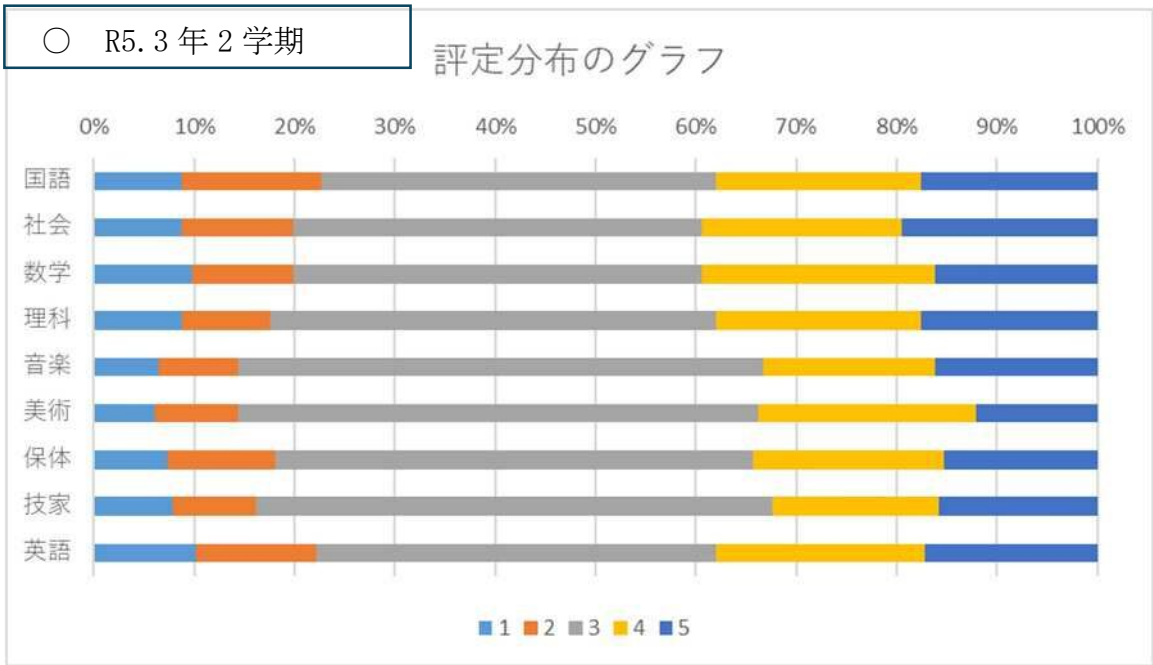
昨年度の評定平均が３．２程度となっていることを周知した。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.3
社会	3.1
数学	3.1
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.2
保体	3.3
技家	3.1
英語	3.2

○　R5.3 年 2 学期



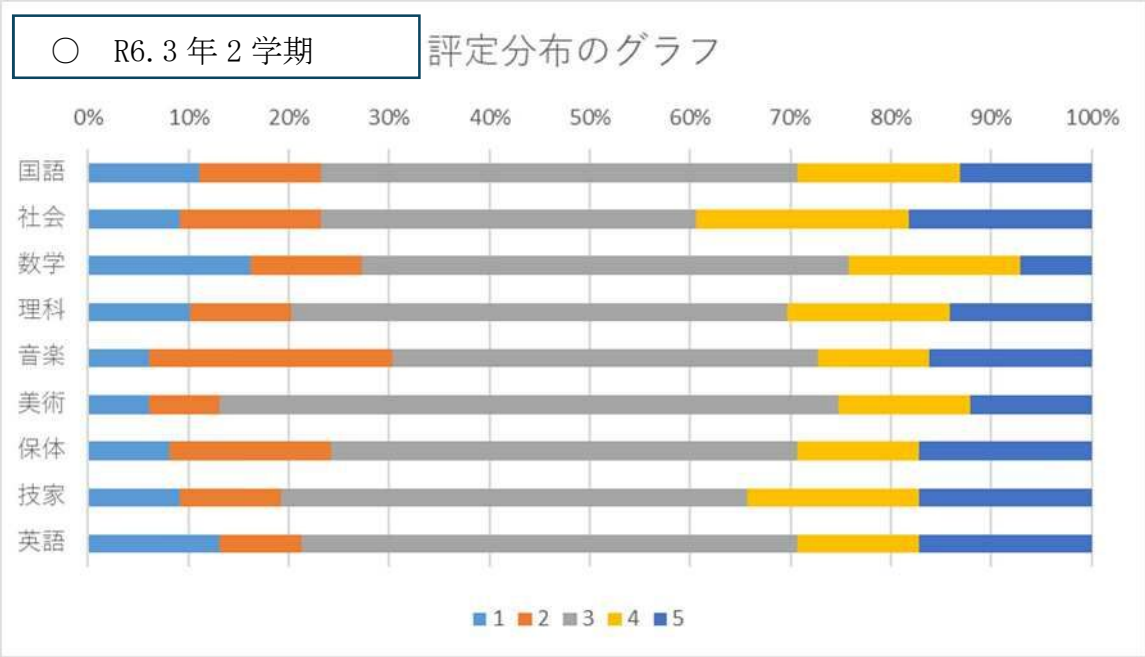
	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.2

○　文書の記載

(5) 評定の信頼性

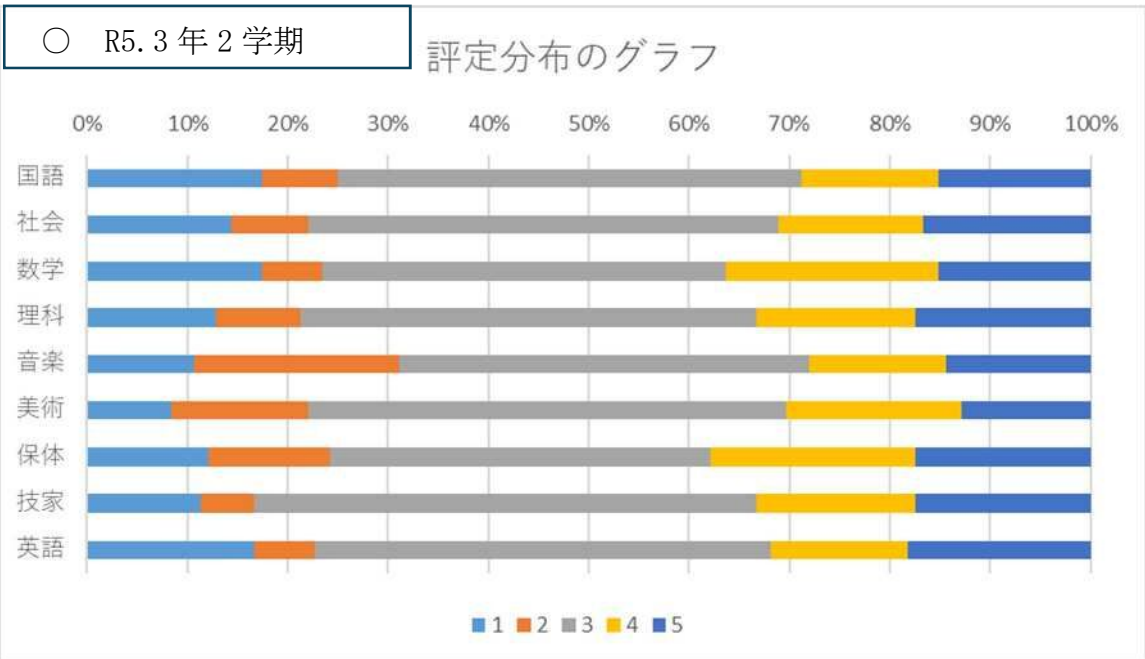
進学にあたって、各高等学校や専修学校等との信頼性は必須である。そうした意味では、評定の正規分布から大きく外れる状態は疑念を招くことになる。そこで、評定の平均を【３．０±０．２】の幅に収めていきたい。各教科で、学年の平均がその範囲に収まらない場合は、観点別の評価規準について修正を行い範囲内に収まるようにする。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.3
数学	2.9
理科	3.1
音楽	3.1
美術	3.2
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.1

○　R5.3 年 2 学期

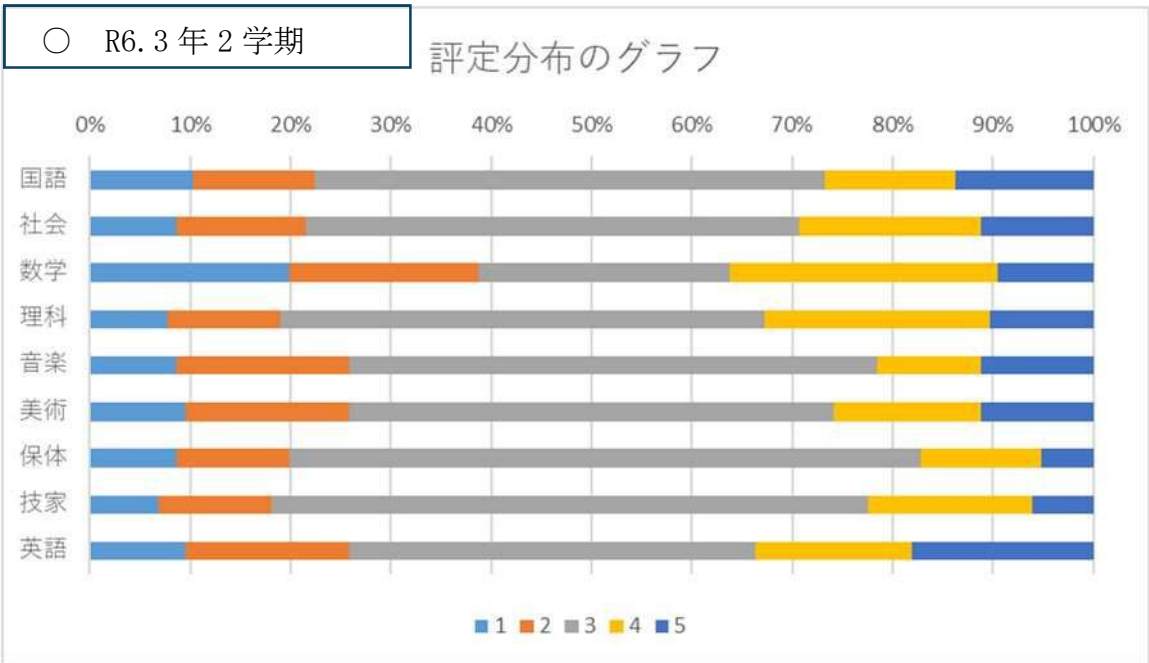


	平均値
国語	3.0
社会	3.1
数学	3.1
理科	3.2
音楽	3.0
美術	3.1
保体	3.2
技家	3.2
英語	3.1

○　口頭で周知した内容

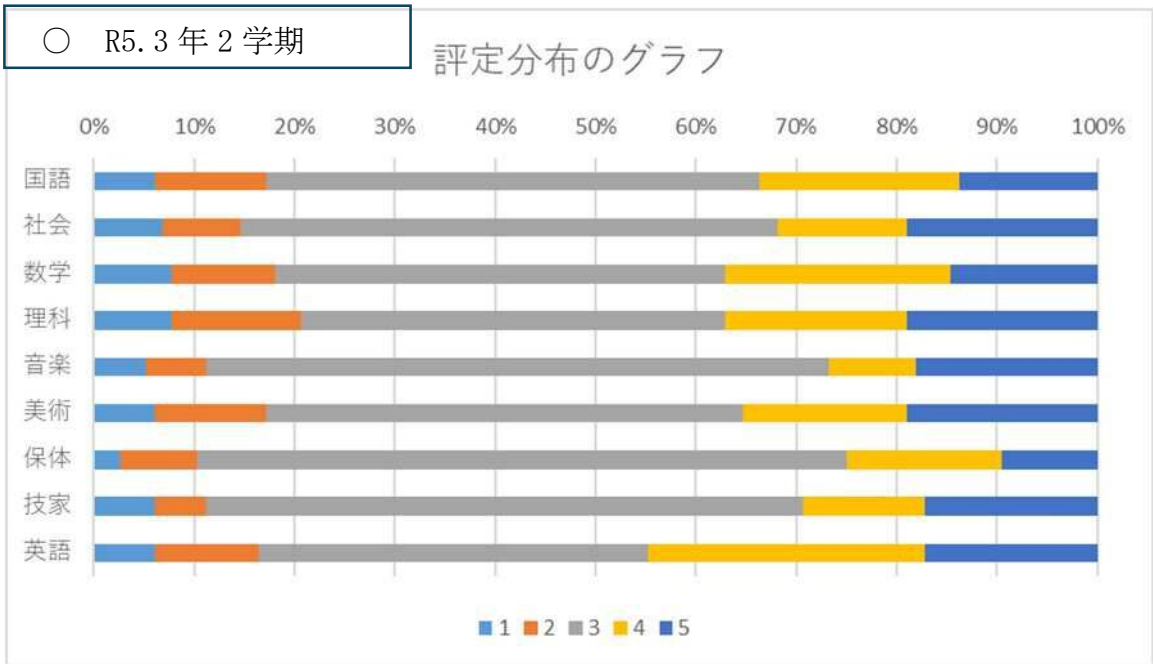
評定平均が高すぎるということは、授業者の目標設定が甘すぎたということも考えられる。目標に準拠した評価になっているのか、目標をよく見直してください。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.1
社会	3.1
数学	2.9
理科	3.2
音楽	3.0
美術	3.0
保体	2.9
技家	3.0
英語	3.2

○　R5.3 年 2 学期

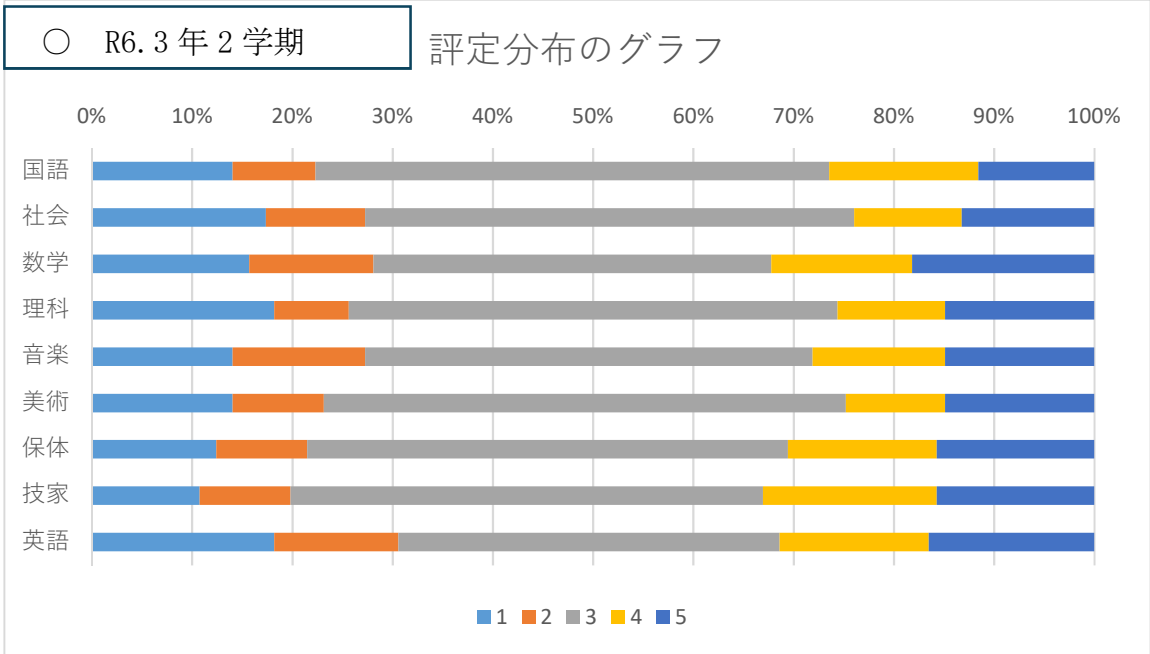


	平均値
国語	3.2
社会	3.3
数学	3.3
理科	3.3
音楽	3.3
美術	3.3
保体	3.2
技家	3.3
英語	3.4

○　文書の記載

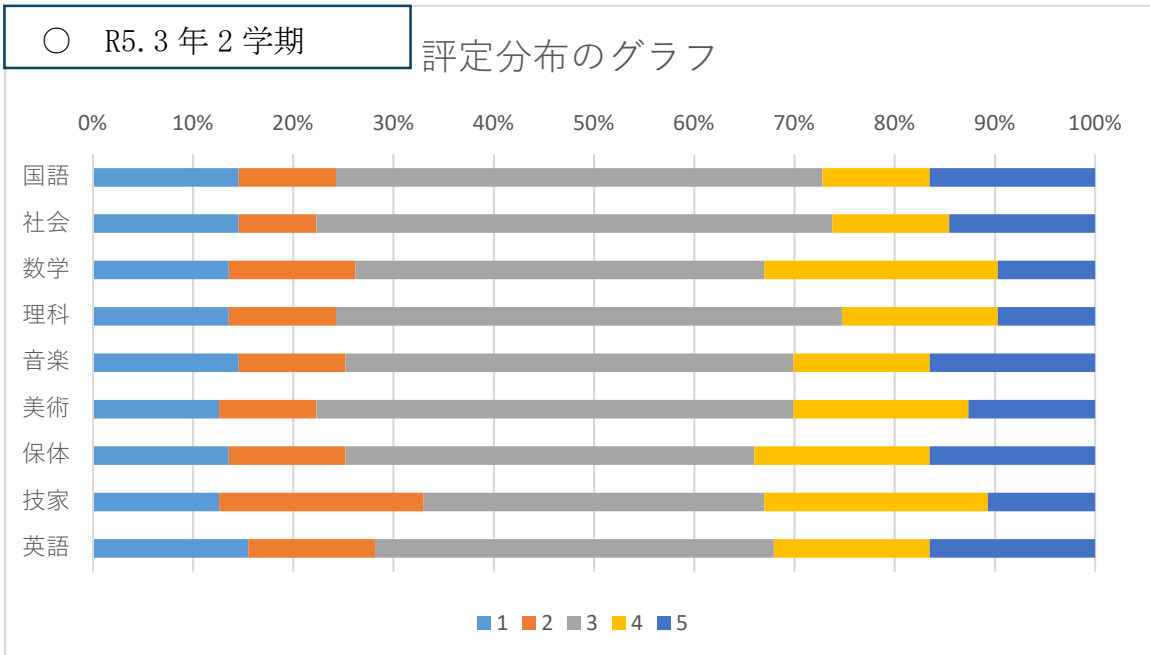
集団の資質能力を考慮し評価規準を設定する。そのため、評定平均が２．８～３．２になることが妥当である。また、集団の特性を考慮し「４」「５」の出現度数や「１」「２」の出現度数に規則性はないとする。

○　R6.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	2.9
数学	3.1
理科	3.0
音楽	3.0
美術	3.0
保体	3.1
技家	3.2
英語	3.0

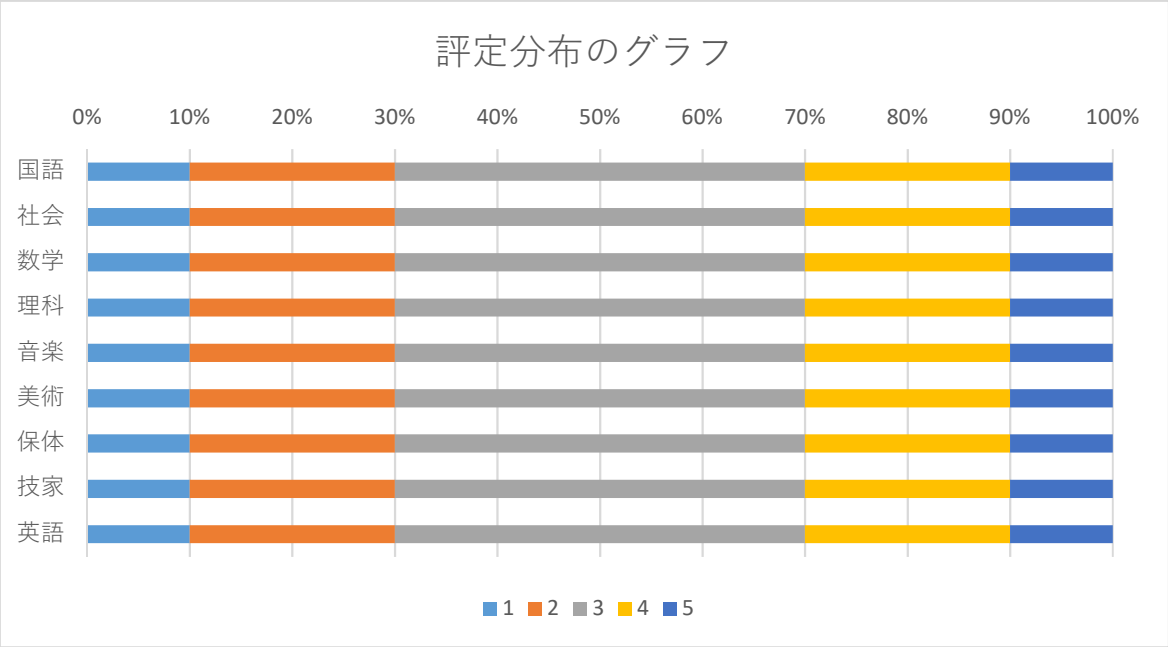
○　R5.3 年 2 学期



	平均値
国語	3.0
社会	3.0
数学	3.0
理科	3.0
音楽	3.1
美術	3.1
保体	3.1
技家	3.0
英語	3.0

（７）集団に準拠した評価（いわゆる相対評価）を行った場合の割合や平均値の例【参考】

	1	2	3	4	5	合計	平均値
国語	10	20	40	20	10	100	3.0
社会	10	20	40	20	10	100	3.0
数学	10	20	40	20	10	100	3.0
理科	10	20	40	20	10	100	3.0
音楽	10	20	40	20	10	100	3.0
美術	10	20	40	20	10	100	3.0
保体	10	20	40	20	10	100	3.0
技家	10	20	40	20	10	100	3.0
英語	10	20	40	20	10	100	3.0



６　調査用紙

７教義第１６号

令和７年４月４日

名古屋市立中学校長　様

教育支援部義務教育課長

令和６年度における学習評価に関する調査について（依頼）

各中学校における学習評価の実態について、下記のとおり調査を実施します。ご協力いただきますようお願いいたします。

記

１　調査方法

調査①　別添えの調査内容について、LoGo フォームでご回答ください。

【LoGo フォーム URL】https://logoform.jp/form/mX9C/986496

調査②　指導主事ファイルポストに格納した Excel ファイル「〇〇〇〇学習評価調査②」（〇〇〇〇は IP 番号）に入力し、上書き保存してください。（ファイルの回収ができなくなるので、ファイル名は変えないでください。）

２　調査期限　　令和７年４月１４日（月）１６時厳守

３　留意点

・　調査結果は、公開の対象となります。

義務教育課　学習指導担当

ＴＥＬ　９７２－３２３２

ＩＰ　　６４４－０３２

調査①

目標に準拠した評価に関する調査（令和６年度の状況）

Ｑ１：区番　Ｑ２：校番（①は１と入力）Ｑ３：校名（〇〇中）

目標に準拠した評価について

Ｑ４：目標に準拠した評価を実施していましたか。
　１　していた
　２　していない

Ｑ５：校内で目標に準拠した評価をどのように周知していましたか。
　１　文書を基に説明
　２　文書のみ
　３　口頭のみ　　→Ｑ９へ

Ｑ６：誰が文書を作成していましたか。（複数選択可）
　１　教務主任（主幹教諭）
　２　進路指導主事
　３　努力点担当者
　４　その他（具体的に記述）

Ｑ７：どのような場で文書が出されましたか。（複数選択可）
　１　職員会議
　２　現職教育
　３　教科部会
　４　その他（具体的に記述）

Ｑ８：文書にはどのような内容が書かれていましたか。（複数選択可）
　１　指導と評価の一体化について
　２　学習評価の基本的な考え方について
　３　具体的な手順や方法について
　４　その他（具体的に記述）

観点別評価の割合について

Ｑ９：観点別評価（Ａ～Ｃ）の割合を周知していましたか。
　１　していた
　２　していない　→Ｑ１２へ

Ｑ１０：どのような形で周知していましたか。
　１　文書を基に説明
　２　文書のみ
　３　口頭のみ

Ｑ１１：どのような意図で周知していましたか。（複数選択可）
　１　指定した割合に収めさせるため
　２　評価規準が適正であるかを振り返らせるため
　３　その他（具体的に記述）

評定の割合について

Ｑ１２：評定（５～１）ごとの割合を周知していましたか。
　１　していた
　２　していない　→Ｑ１５へ

Ｑ１３：どのような形で周知していましたか。
　１　文書を基に説明
　２　文書のみ
　３　口頭のみ

Ｑ１４：どのような意図で周知していましたか。（複数選択可）
　１　指定した割合に収めさせるため
　２　評価規準が適正であるかを振り返らせるため
　３　その他（具体的に記述）

評定の平均値について

Ｑ１５：評定の平均値について周知していましたか。
　１　していた
　２　していない　→Ｑ１８

Ｑ１６：どのような形で周知していましたか。
　１　文書と口頭
　２　文書のみ
　３　口頭のみ

Ｑ１７：どのような意図で周知していましたか。（複数選択可）
　１　指定した平均値に近づけさせるため
　２　評価規準が適正であるかを振り返らせるため
　３　その他（具体的に記述）

過去の文書について（令和２年度～令和５年度）

Ｑ１８：評価・評定の割合や評定の平均値に関する記載はありましたか。
　１　あった
　２　なかった　→終了

Ｑ１９：その内容は何年度までありましたか。
　１　令和２年度まで
　２　令和３年度まで
　３　令和４年度まで
　４　令和５年度まで

調査②－１

【分析の手順】

① シート１に令和６年度３年生の２学期における各教科の評定ごとの人数を入力してください。

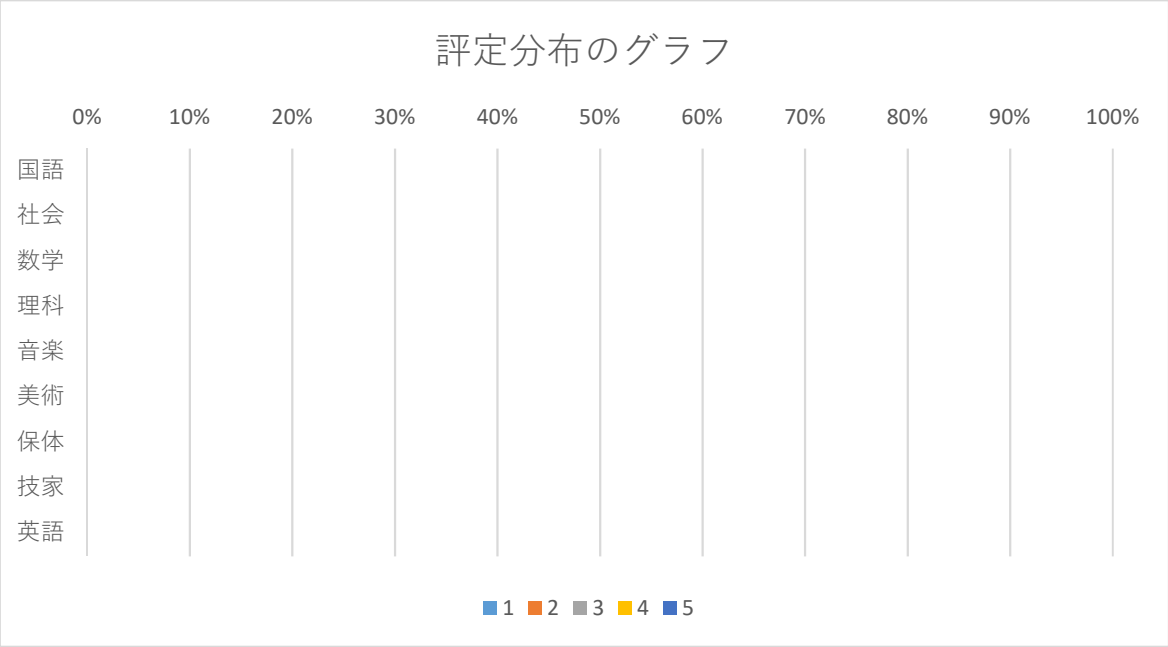
② シート２に令和５年度３年生の２学期における各教科の評定ごとの人数を入力してください。

③ グラフの評定分布や平均値を確認していただき、２学期における評定の分析結果を入力してください。

令和６年度３年生の２学期における評定の分析

学校名（　　）中学校

	1	2	3	4	5	合計	平均値
国語						0	#DIV/0!
社会						0	#DIV/0!
数学						0	#DIV/0!
理科						0	#DIV/0!
音楽						0	#DIV/0!
美術						0	#DIV/0!
保体						0	#DIV/0!
技家						0	#DIV/0!
英語						0	#DIV/0!

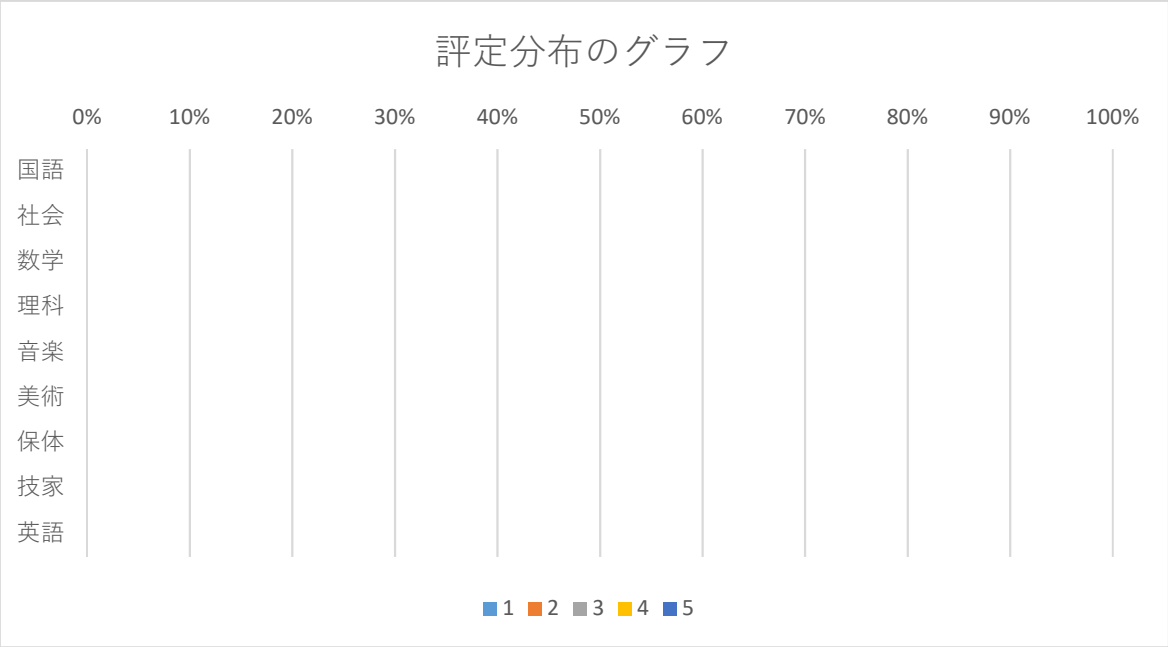


【分析結果】

調査②－２

令和５年度３年生の２学期における評定

	1	2	3	4	5	合計	平均値
国語						0	#DIV/0!
社会						0	#DIV/0!
数学						0	#DIV/0!
理科						0	#DIV/0!
音楽						0	#DIV/0!
美術						0	#DIV/0!
保体						0	#DIV/0!
技家						0	#DIV/0!
英語						0	#DIV/0!



調査②－１

【分析の手順】

① シート１に令和６年度３年生の２学期における各教科の評定ごとの人数を入力してください。
② シート２に令和５年度３年生の２学期における各教科の評定ごとの人数を入力してください。
③ グラフの評定分布や平均値を確認していただき、２学期における評定の分析結果を入力してください。

記入例

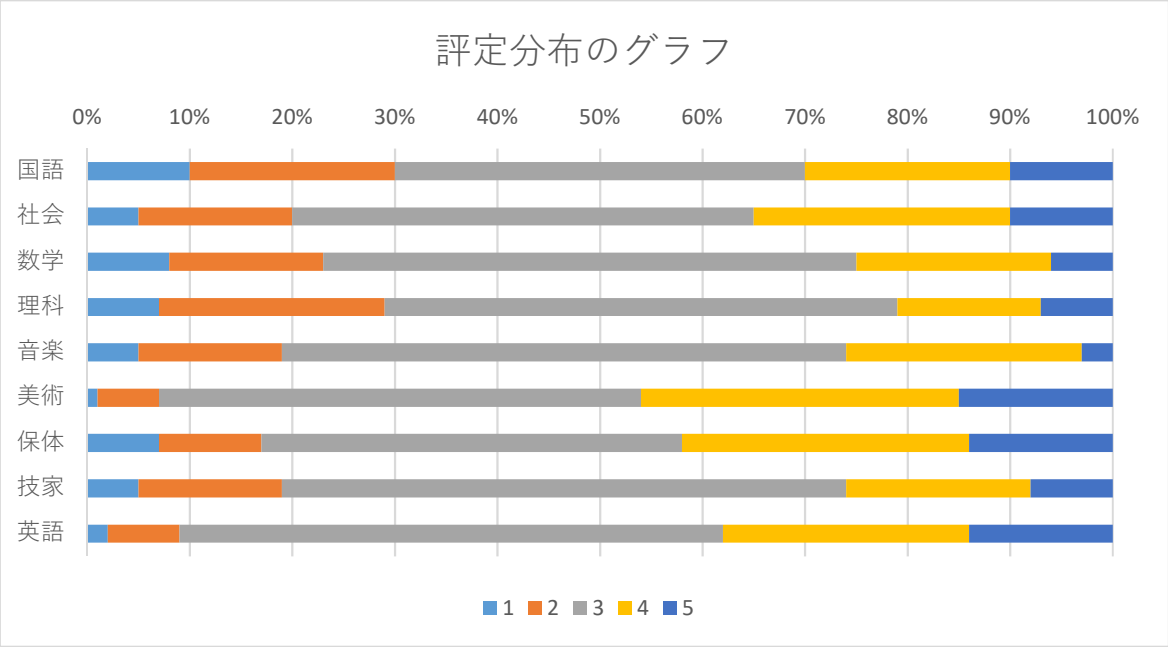
令和６年度３年生の２学期における評定の分析

学校名（　**なごや**　　）中学校

	1	2	3	4	5	合計	平均値
国語	10	20	40	20	10	100	3.0
社会	5	15	45	25		100	3.2
数学	8	15	52				
理科	7	22	50				
音楽	5	14	55				
美術	1	6	47				
保体	7	10	41	28	14	100	3.3
技家				18	8	100	3.1
英語				24	14	100	3.4

合計欄が評定を出した生徒数の合計になっているか確認してください。

この黄色のセルに、評定ごとの人数を入力してください。



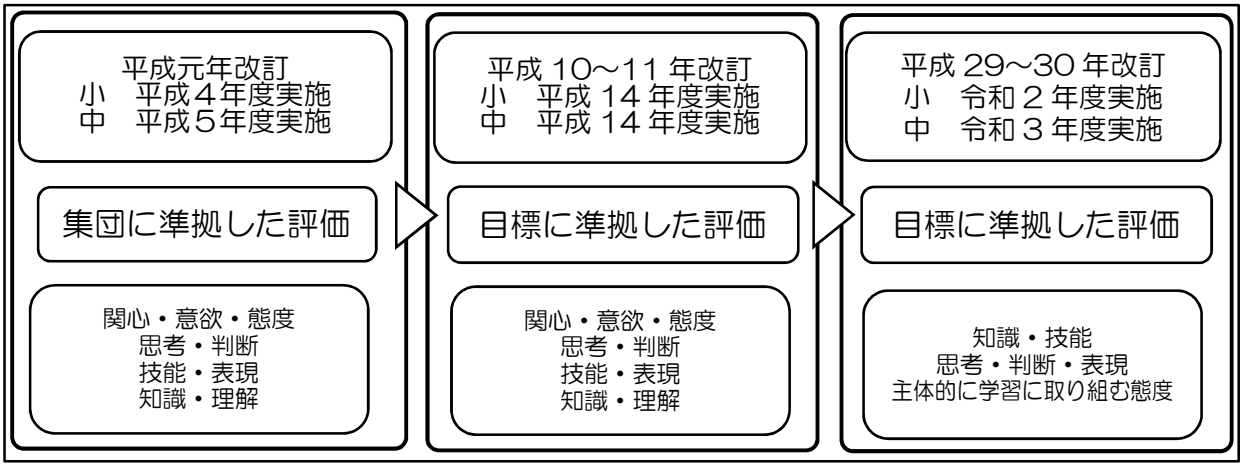
【分析結果】

分析の観点（例）

○　令和６年度における教科ごとの評定分布や平均値の比較
○　令和５年度との比較
○　令和６年度の評価が適切だったかどうか、校長としての考え

7　学習評価についての参考資料

(1)　学習指導要領改訂と学習評価の変遷について



(2)　「集団に準拠した評価」と「目標に準拠した評価」について

○　「集団に準拠した評価」（いわゆる「相対評価」）

学年や学級などの集団においてどのような位置にあるかを見る評価のことを指します。（平成 13 年度以前）

○　「目標に準拠した評価」（いわゆる「絶対評価」）

学習指導要領に示す目標がどの程度実現したか、その実現状況を見る評価のことを指します。（平成 14 年度以後）

(3)　各教科における観点別学習状況の評価の観点について

（小学校：令和２年度以後、中学校：令和３年度以後）

○　知識・技能

各教科等における学習の過程を通した知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既有の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかを評価します。

【評価方法の例】
ペーパーテスト　文章による説明　観察・実験　式やグラフでの表現　など

○　思考・判断・表現

各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価します。

【評価方法の例】
ペーパーテスト、論述やレポートの作成、発表、グループや学級での話合い、作品の制作や表現、ポートフォリオ　など

○　主体的に学習に取り組む態度

知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価します。

【評価方法の例】
ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察、
児童生徒による自己評価や相互評価等の状況　など
※　「挙手の回数」や「毎時間ノートを取る」といった、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えるような評価の方法は適しません。

(4)　観点別学習状況について

各教科の学習目標に対し、その達成状況を観点ごとに３段階で評価します。その表示はＡ・Ｂ・Ｃで示します。

Ａ：十分満足できる　　Ｂ：おおむね満足できる　　Ｃ：努力を要する

観点別学習状況は、ペーパーテストだけでなく、授業の中で評価場面を設定し、評価しています。授業の中での評価場面には、発表や話し合いの発言内容、ノートやレポートの記述内容、作品、行動観察などがあります。教科や観点ごとに適する方法で評価した積み上げによって学期ごとにＡ・Ｂ・Ｃで評価します。

(5)　評定について（小学校は学年末に３段階）

５：十分満足できると判断されるもののうち、特に高い程度のもの
４：十分満足できると判断されるもの
３：おおむね満足できると判断されるもの
２：努力を要すると判断されるもの
１：一層の努力を要すると判断されるもの

観点別学習状況の達成の様子を基に、教科の学習の状況を総括的に評価します。

(6)　観点別学習状況の評価の組み合わせと評定について（例）

観点別学習状況の評価の組み合わせ	評　定
ＡＡＡ	5
ＡＡＢ　ＡＢＢ	4
ＢＢＢ　ＢＢＣ　ＡＢＣ　（ＡＡＣ）（ＡＣＣ）	3
ＢＣＣ	2
ＣＣＣ	1

(7)　指導と評価の一体化について

教師は、日々の授業において、①計画する、②計画を基に実践する、③実践したことを評価する、④評価を基に改善する、という一連の活動を繰り返しながら、子どものよりよい成長を目指して指導を行っています。指導と評価を別物と考えるのではなく、評価の結果によってその後の指導を改善し、新しい指導の成果を再度評価するという指導に生かす評価を充実させることを、「指導と評価の一体化」と言います。

学校では、「指導と評価の一体化」を進めるため、評価活動を評価のための評価に終わらせるのではなく、指導の改善に生かすことによって指導の質を高めるようにしています。

出典：文部科学省ＨＰ
国立教育政策研究所「学習評価の在り方ハンドブック」
名古屋市教育センター「授業づくりハンドブック」